

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第27集

竹 下 遺 跡 Ⅱ

— 竹下町自治公民館建設に伴う発掘調査報告 —

平成元年 3 月

宇都宮市教育委員会

序

竹下遺跡は宇都宮市東部における縄文時代中期から後期の遺跡としてかねてから注目されてまいりました。しかしこの地にも、昨今は開発の波が徐々に及んできております。これも時代の流れであり、いたしかたのないところでありましょう。

しかしながら私たちの祖先が残してくれた文化財を、永く子孫のために伝えていくことは現代に生きる者の使命であります。そこで当教育委員会といたしましても、文化財の保護に努力を傾注してまいりました。

このたび竹下遺跡の範囲内に竹下町自治会による自治公民館の建設が行われることとなり、その工事によって遺跡が影響をうけることが予想されました。そこで当教育委員会と竹下町自治会では、文化財保護の立場から誠意をもって協議を重ねました結果、遺跡を記録として保存するための発掘調査を実施することとなりました。

調査は国庫及び県費の補助を得て当教育委員会が実施し、竪穴住居跡1軒と多数の袋状土坑及び土器・石器類の出土を見るにいたりました。その成果をまとめたものが本報告書であります。読者各位におかれましては、本書を存分に御活用いただき、文化財の保護に努めていただければ幸いです。

末文になりましたが、発掘調査にあたり御指導いただきました本市文化財保護審議委員会委員・埴静夫、大金宣亮、橋本澄朗各氏、栃木県立博物館研究員・上野修一氏、また何かと便宜をお図りいただいた土地所有者の阿久津ナミ子氏、竹下町自治会長・小堀秀夫氏に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

平成元年3月

宇都宮市教育委員会教育長 藤田 昌平

例 言

1. 本書は栃木県宇都宮市竹下町500番地他に所在する竹下遺跡（栃木県遺跡番号3，宇都宮市遺跡番号305）の，竹下町自治公民館建設に伴う記録保存のための緊急発掘調査報告書である。
2. 本書の標題は当遺跡についての報告がすでになされていることに鑑み（堀静夫，1953年，『栃木県清原村竹下遺跡発掘調査報告』宇都宮大学郷土史研究班），『竹下遺跡Ⅱ』とした。
3. 調査は国費及び県費の補助を得て宇都宮市教育委員会がこれを行った。
4. 調査期間は昭和62年10月16日から同年12月19日までであり，調査面積は1040㎡である。そのうち490㎡については発掘調査（本調査）を，550㎡については試堀（造構確認）を行なった。
5. 遺跡地における測量，写真撮影等は賀来孝代・糸永郁美の協力を得つつ赤石澤亮・神野安伸がこれにあたった。
6. 本報告書の作成については，栃木県立博物館研究員上野修一氏の指導助言のもとに，上野とも子の協力を得て，赤石澤亮・神野安伸がこれを担当した。また拓本図の作成については大野節子・大森八重子・渡辺知枝の協力を得た。写真図版の作成については神野がこれにあたった。
7. 石器の石質については，栃木県立博物館自然課主任荒川竜一氏の御教示を得た。
8. 出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔指導助言〕 宇都宮市文化財保護審議委員会委員 堀 静夫

同 大金 宣亮

同 橋本 澄朗

〔事務局〕	教育長（前）	後藤一雄	文化振興係	定岡明義	同	大塚雅之
	教育長（現）	藤田昌平	同	渡辺 卓	同	赤石澤亮
	教育次長	上野 渡	同	斎藤全男	同	神野安伸
	社会教育課長	塚田隆一	同	手塚英男	同	今平利幸
	同課長補佐	河越昌司	同	梁木 誠	調査員補	金田信夫（当時）
	文化振興係長	小林錦一	同	小松俊雄		

〔調査補助員〕 阿久津タツ，阿久津とみ，阿久津フジイ，荒井操，大橋徳治，岡田ハルエ，小川ミノ，菊地一弥，國井幸男，小池シズエ，坂本ヨシ，佐藤武雄，諏訪トモ，岡谷勘吉，北條トミ，山中金三郎，大野節子（遺物整理），大森八重子（同），鈴木芳子（同）

〔調査協力者〕 阿久津ナミ子，池田友保，糸永郁美，上野とも子，大澤順子，大塚清，賀来孝代，小林真理，小堀秀夫，小松寅雄，島崎熊夫，堀田一夫，谷中一郎，吉澤良助

10. 発掘調査及び報告書作成に関して次の諸機関，諸氏の御協力を得た。記して謝意を表する次第である。（敬称略）

栃木県教育委員会文化課，栃木県文化振興事業団，岩上照朗，岩淵一夫，植木茂雄，岡良一郎，木下実，芹澤清八，高藤常松，塚本師也，津布楽一樹，直井学，直井茂吉，山懸真理子

目 次

序 文

例 言

I. 調査に至るまでの経過	1
II. 位置と環境	2
1. 遺跡の位置	2
2. 周辺の地形	2
3. 周辺の遺跡	3
III. 調査の経過と方法	5
1. 調査の経過——発掘日誌抄——	5
2. 調査の方法	6
IV. 検出された遺構と遺物	10
1. 土坑・住居跡と出土遺物（第1地区～第15地区）	10
2. その他の出土遺物（土製円盤・線刻土版・石器・表土中出土の遺物）…	127
V. まとめ	153

插 图 目 次

第1图	竹下遺跡位置图	1
第2图	竹下遺跡調査地区图	2
第3图	竹下遺跡周辺遺跡分布图	3
第4图	竹下遺跡遺構配置图	7.8
第5图	第4号·7号·20号土坑出土土器	10
第6图	第1地区遺構图	11
第7图	第2地区遺構图	12
第8图	第1号·2号·5号·6号·8号·14号土坑出土土器	14
第9图	第3地区遺構图(1)	16
第10图	第3地区遺構图(2)	17
第11图	第9号·10号·11号·13号·22号土坑出土土器	18
第12图	第22号土坑出土土器(1)	21
第13图	第22号土器出土土器(2)	22
第14图	第22号·28号·29号土坑出土土器	23
第15图	第4地区遺構图	26
第16图	第16号·17号·18号·19号·25号·26号·32号·33号土坑出土土器	29
第17图	第33号·34号·146号·162号土坑出土土器	31
第18图	第179号土坑出土土器	32
第19图	第5地区遺構图(1)	34
第20图	第5地区遺構图(2)	35
第21图	第41号·43号·78号·79号·147号·154号土坑出土土器	37
第22图	第6地区遺構图(1)	38
第23图	第6地区遺構图(2)	39
第24图	第1号住居跡·148号土坑出土土器	40
第25图	第7地区遺構图	41
第26图	第150号·152号土坑出土土器	42
第27图	第152号土坑出土土器	44
第28图	第8地区遺構图(1)	46
第29图	第8地区遺構图(2)	47
第30图	第56号·60号土坑出土土器	48
第31图	第60号土坑出土土器	50
第32图	第60号·64号土坑出土土器	51
第33图	第64号·73号土坑出土土器	53
第34图	第92号土坑出土土器(1)	55
第35图	第92号土坑出土土器(2)	57

第36图	第92号·180号土坑出土土器	58
第37图	第9地区遗構图(1)	60
第38图	第9地区遗構图(2)	61
第39图	第54号土坑出土土器	63
第40图	第71号·72号·74号土坑出土土器	64
第41图	第74号·85号·86号·91号土坑出土土器	66
第42图	第108号·109号·111号·132号土坑出土土器	68
第43图	第10地区遺構图	70
第44图	第101号·107号土坑出土土器	71
第45图	第107号·110号土坑出土土器	73
第46图	第110号·125号土坑出土土器	75
第47图	第125号土坑出土土器	77
第48图	第125号·127号土坑出土土器	78
第49图	第127号·142号土坑出土土器	80
第50图	第11地区遺構图	82
第51图	第105号·106号土坑出土土器	83
第52图	第106号·112号·116号·118号土坑出土土器	85
第53图	第118号土坑出土土器(1)	87
第54图	第118号土坑出土土器(2)	88
第55图	第118号·138号·157号土坑出土土器	89
第56图	第12地区遺構图(1)	91
第57图	第12地区遺構图(2)	92
第58图	第117号·119号土坑出土土器	93
第59图	第120号土坑出土土器	94
第60图	第121号·124号·149号土坑出土土器	96
第61图	第149号土坑出土土器	97
第62图	第149号·156号土坑出土土器	99
第63图	第13地区遺構图(1)	101
第64图	第13地区遺構图(2)	102
第65图	第126号·128号土坑出土土器	103
第66图	第128号·129号土坑出土土器	104
第67图	第129号土坑出土土器	105
第68图	第129号·133号·134号土坑出土土器	107
第69图	第134号·137号土坑出土土器	109
第70图	第165号·166号·167号土坑出土土器	111
第71图	第169号·171号土坑出土土器	112
第72图	第14地区遺構图	114
第73图	第135号土坑出土土器(1)	115

第74图	第135号土坑出土土器(2)	116
第75图	第136号·172号·173号·176号土坑出土土器	119
第76图	第177号·178号土坑出土土器	121
第77图	第15地区遗構图	122
第78图	第161号·181号土坑出土土器	124
第79图	第181号·183号土坑出土土器	126
第80图	第184号·188号土坑出土土器	127
第81图	土製円盤拓影图	128
第82图	線刻土版実測图	128
第83图	打製石斧実測图(1)	130
第84图	打製石斧実測图(2)	131
第85图	打製石斧実測图(3)	132
第86图	石鏃·石錐·切目石錘·礮石錘実測图	132
第87图	磨製石斧実測图(1)	134
第88图	磨製石斧実測图(2)	135
第89图	磨石·磨石兼敲石·磨石兼凹石実測图(1)	136
第90图	磨石·磨石兼敲石·磨石兼凹石実測图(2)	137
第91图	磨石·磨石兼敲石·磨石兼凹石実測图(3)	138
第92图	特殊敲石実測图	140
第93图	石皿実測图(1)	142
第94图	石皿·台石実測图(2)	143
第95图	蜂巢石実測图	144
第96图	表土中出土土器(1)	146
第97图	表土中出土土器(2)	147
第98图	表土中出土土器(3)	148
第99图	表土中出土土器(4)	149
第100图	表土中出土土器(5)	150
第101图	表土中出土土器(6)	150
第102图	表土中出土土器(7)	151
第103图	表土中出土土器(8)	151

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	3
第2表	調査地区番号・遺構番号対照表	9
第3表	土製円盤・線刺土版一覧表	128
第4表	打製石斧一覧表	129
第5表	石鏃・石錐・切目石錘・礫石錘一覧表	132
第6表	磨製石斧一覧表	133
第7表	磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石一覧表	139
第8表	特殊敲石一覧表	141
第9表	石皿・台石一覧表	141
第10表	蜂巣石一覧表	141
第11表	磨斧原石・砥石一覧表	145

写真図版目次

P.L. 1	① 竹下遺跡東地区全景
P.L. 2	② 竹下遺跡航空写真(調査前) ③ 竹下遺跡東地区航空写真(完掘状況)
P.L. 3	④ 調査前状況 ⑤ 東地区遺構確認作業(西から)
P.L. 4	⑥ 第1・2・3地区遺構調査状況(東から) ⑦ 第4地区付近遺構完掘状況(北から)
P.L. 5	⑧ 第1・2・3・4・5・6・7地区遺構完掘状況(東から) ⑨ 第2地区遺構完掘状況(北東から)
P.L. 6	⑩ 第3地区北東部付近遺構完掘状況(南東から) ⑪ 第3地区南東部付近遺構完掘状況(東から)
P.L. 7	⑫ 第6・7地区遺構完掘状況(東から) ⑬ 第8・9・10・11地区遺構完掘状況(東から)
P.L. 8	⑭ 第8・9・10・11地区遺構完掘状況(東から) ⑮ 第8・9地区遺構完掘状況(東から)
P.L. 9	⑯ 第10地区遺構完掘状況(南東から) ⑰ 第11地区遺構完掘状況(東から)
P.L. 10	⑱ 第11地区・第12地区西半部遺構完掘状況(東から) ⑲ 第13地区北半部遺構完掘状況(南東から)
P.L. 11	⑳ 第15地区遺構完掘状況(東から) ㉑ 第22号土坑完掘状況(東から)
P.L. 12	㉒ 第54号土坑完掘状況(西から) ㉓ 第74号土坑完掘状況(西から)
P.L. 13	㉔ 第108・109・111号土坑完掘状況(南から) ㉕ 第129・130号土坑完掘状況(西から)

- P.L. 14 ㉔ 第147号土坑完掘状況(西から) ㉕ 第162号土坑完掘状況(北東から)
 P.L. 15 ㉖ 第60号土坑遺物出土状況(南から) ㉗ 第64号土坑遺物出土状況(東から)
 P.L. 16 ㉘ 第92号土坑遺物出土状況(1)(南から) ㉙ 第92号土坑遺物出土状況(2)(南から)
 P.L. 17 ㉚ 第110号土坑遺物出土状況(1)(北から) ㉛ 第110号土坑遺物出土状況(2)(西から)
 P.L. 18 ㉜ 第114号土坑遺物出土状況(東から) ㉝ 第119号土坑遺物出土状況(南から)
 P.L. 19 ㉞ 第152号土坑遺物出土状況(1)(南東から) ㉟ 第152号土坑遺物出土状況(2)(東から)
 P.L. 20 ㊱ 第178号土坑遺物出土状況(1)(南東から) ㊲ 第178号土坑遺物出土状況(2)(北から)
 P.L. 21 ㊳ 第183号土坑遺物出土状況(東から) ㊴ 西地区表土除去状況(東から)
 P.L. 22 ㊵ 第54号土坑出土土器 ㊶ 第64号土坑出土土器 ㊷ 第92号土坑出土土器
 P.L. 23 ㊸ 第92号土坑出土土器 ㊹ 第92号土坑出土土器 ㊺ 第92号土坑出土土器
 P.L. 24 ㊻ 第105号土坑出土土器 ㊼ 第110号土坑出土土器 ㊽ 第110号土坑出土土器
 ㊾ 第110号土坑出土土器
 P.L. 25 ㊿ 第118号土坑出土土器
 P.L. 26 ㉀ 第118号土坑出土土器
 P.L. 27 ㉁ 第118号土坑出土土器 ㉂ 第119号土坑出土土器 ㉃ 第125号土坑出土土器 ㉄ 第125号土坑出土土器
 P.L. 28 ㉅ 第129号土坑出土土器 ㉆ 第129号土坑出土土器 ㉇ 第150号土坑出土土器 ㉈ 第152号土坑出土土器
 P.L. 29 ㉉ 第152号土坑出土土器 ㊰ 第152号土坑出土土器 ㊱ 第156号土坑出土土器 ㊲ 第162号土坑出土土器
 P.L. 30 ㊳ 第178号土坑出土土器 ㊴ 第178号土坑出土土器 ㊵ 第183号土坑出土土器 ㊶ 表土中出土土器 ㊷ 表土中出土土器
 P.L. 31 ㊸ 土製円盤(1) ㊹ 土製円盤(2) ㊺ 線刻土版(1) ㊻ 線刻土版(2)
 P.L. 32 ㊼ 打製石斧 ㊽ 磨製石斧(1)
 P.L. 33 ㊾ 磨製石斧(2) ㊿ 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石(1)
 P.L. 34 ㉀ 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石(2) ㉁ 特殊敲石
 P.L. 35 ㉂ 石錘・石鏃 ㉃ 切目石錘・礫石錘 ㉄ 磨斧原石 ㉅ 砥石 ㉆ 作業風景(1) ㉇ 作業風景(2) ㉈ 指導員会議

凡 例

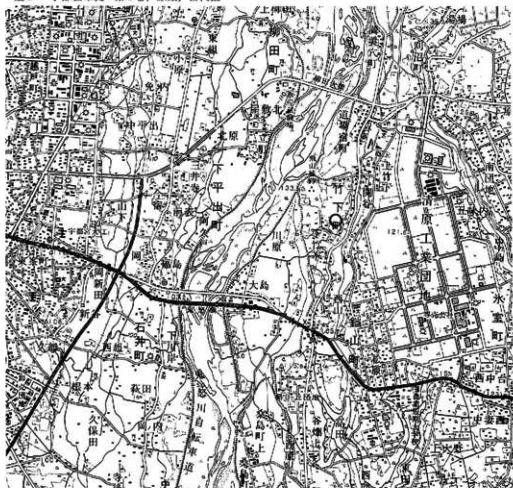
1. グリッド名は当該グリッドの北東隅に位置する杭の番号による。
2. 説明の便宜上、東地区を第1～第15の地区に分けた。地区設定は任意である。
3. 遺物の実測・拓本図は特記以外すべて $\frac{1}{2}$ 、遺構図は特記以外すべて $\frac{1}{4}$ である。
4. 挿図及び表中では、遺構名に次の略号を使用した。SI(住居跡) SK(土坑)
5. 土層は地区毎に通し番号を付し、一括して説明した。土層説明では次の略号を使用した。IP(今市火山灰) SP(七本桜火山灰) KP(鹿沼火山灰) ロームB(ロームブロック)
6. セクションポイント・エレベーションポイントは地区毎にアルファベット小文字による通し記号を付した。また標高値の単位はメートルである。
7. 写真図版中の土器・石器等の番号は、実測図中の番号に一致させた。

I 調査に至るまでの経過

本遺跡の存在は、かなり古くから知られており、昭和28年に宇都宮大学史学教室により発掘調査が行われている。その調査所見によると、昭和28年当時も耕作等により包含されていた遺物が露呈し、散在している状態であり、調査によって、柱穴様のピット7個、60余の河原石によって配石された組石、および多数の土器片、石器、また、袋状土壌等が確認されている^(註1)。

昭和61年2月、竹下町自治会より、自治公民館を建設したい旨の申し出があり、当市教育委員会では、埋蔵文化財保護の立場から、自治会長および、土地所有者と協議を重ねたが、当地以外に建設適地が見つからず、遺跡地の現状を変更せざるを得ない状況となったため、昭和61年7月記録保存をする方針を定め、調査を翌年10月から12月に実施することとし、調査の準備を進めることとした。

註1 宇都宮市史 第1巻、原始、古代編



第1図 竹下遺跡位置図 (1:50,000)

Ⅱ 位置と環境

1 遺跡の位置

本遺跡が所在するのは、宇都宮市竹下町500番地他である。JR宇都宮駅の東方約7kmの地点であり、さらに東方3kmで芳賀郡芳賀町との市町界に達する。

遺跡の東側には主要地方道真岡～高根沢線が通じ、南約1.5kmのところ国道123号線（水戸街道）が、北約1.5kmのところ主要地方道宇都宮～向田線（柳田街道）が通じている。

遺跡周辺は主に畑地として利用されているが、西方からは市街化が迫り、東方台地上は清原工業団地として開発されており、その影響を受けて徐々に宅地化が進行しつつある。

2 周辺の地形

本遺跡が立地するのは、南北に連なる真岡台地の北部・清原台地が小河川によって開析されてきた、一見独立丘陵の様相を呈する台地上であり、南流する鬼怒川の左岸にあたる。この台地は北・東・西側は崖状をなすが、南側は日照良好な緩傾斜面となっており、この場所を選んで縄文時代の集落が営まれたと考えられる。遺跡の標高は120～125mであり、台地下水田面との比高差15～20mを測る。



第2図 竹下遺跡調査地区図（1：5000）

3 周辺の遺跡

竹下遺跡が所存する鬼怒川左岸の清原台地上には数多くの遺跡が分布している。そのうち現在宇都宮市遺跡台帳に登録されているものは以下の25ヶ所を数える。(番号は同台帳による)

各遺跡の内容は、発掘調査例

番号	遺跡名	種別	時期	備考
297	鎮守林西	集落	縄文・奈良 平安	市指定史跡 国指定史跡 本遺跡
298	淡路城跡	城館	室町	
299	向原	集落	奈良・平安	
300	講美穴古墳群	古墳	古墳	
301	刈沼(赤高地)	集落	縄文・古墳	
302	同慶寺館跡	城館	室町	
303	竹下浅間山古墳	古墳	古墳	
304	飛山城跡	城館	室町	
305	竹下	集落	縄文・古墳	
306	千波ヶ原	集落	縄文・古墳	
307	籠山東原	集落	縄文・奈良 平安	
319	おひじり塚古墳	古墳	古墳	
320	千波稲荷神社古墳	古墳	古墳	
323	中橋高塚群	高塚	江戸	
324	東田	集落	縄文	
325	シドミ久保	集落	縄文・古墳	
326	西原庚申塚群	庚申塚	江戸	
327	上園谷管塚古墳	古墳	古墳	
328	西向	集落	縄文・奈良 平安	
329	上園谷和尙塚	高塚	江戸	
330	小泉庚申塚群	庚申塚	江戸	
331	下西原	集落	縄文・奈良 平安	
332	下上	集落	縄文・奈良 平安	
333	無宗古墳群	古墳	古墳	
357	とどづか高塚	高塚	江戸	

第1表 周辺の遺跡一覧



第3図 竹下遺跡周辺遺跡分布図 (1:50,000)

の少ない現状ではかならずしも明確ではないが、表面採集等によって縄文時代の遺物が確認されるものが10ヶ所にのぼる。それらについて概略を述べれば次のとおりである。

鎮守林西遺跡(297) 宝積寺段丘に入り込む谷に面する東斜面に立地し、縄文土器片・土師器片が採集できる。

刈沼(赤高地)遺跡(301) 丘陵の西～南斜面に位置し、縄文時代と古墳時代の集落が重なっている。縄文時代については後～晩期の所産と考えられる土器が採集されており、竹下遺跡に後続する時期である点が注目される。多量の遺物の散布が見られることで古くから知られていたが、近年宅地造成等により一部が破壊された。

竹下遺跡(305) 今回発掘調査を行った遺跡であり、詳細については本文に記した。昭和28年に宇都宮大学史学教室による調査が実施され、縄文時代中～後期の住居跡・袋状土坑と多量の土器が検出された。

千波ヶ原遺跡(306) 谷を見おろす丘陵西端に立地し、縄文土器片を主体として土師器片の散布も見られる。

鐘山東原遺跡(307) 丘陵を開削して南流する小河川の東側丘陵上に立地し、縄文土器・土師器・須恵器の散布が見られる。

東田遺跡(324) 水田を見おろす丘陵の東斜面に立地し、縄文土器片の散布が見られる。

シドミ久保遺跡(325) 水田をへだてて東田遺跡と向いあう丘陵西斜面に立地しており、縄文土器・土師器の散布が見られる。

西向遺跡(328) 小河川を見おろす丘陵西斜面に立地し、縄文土器のほか、磨製石斧が採集されている。

下西原遺跡(331) 丘陵西端に立地し、縄文土器・磨製石斧が採集されている。

下上遺跡(332) 小河川を見おろす丘陵西斜面に立地し、多量の縄文土器のほか、若干の土師器・須恵器の破片が見られる。

このように竹下遺跡周辺には比較的多くの縄文時代集落跡と考えられる遺跡が分布しているが、表面採集の結果から推察する限りにおいては、遺跡の面積、遺物の量ともに竹下遺跡と刈沼(赤高地)遺跡が目立った存在であると言える。またそれらのほとんどに発掘調査が実施されていない現在、当地域の縄文時代の歴史を知るうえで今回の竹下遺跡の調査は一定の資料を提供することになると同時に、今後開発が急ピッチで進行していくなかで埋蔵文化財保護のあり方を考える材料として利用することが可能である。

参考文献

- 堀 静夫他, 1978年, 『宇都宮市史』原始・古代編 宇都宮市史編さん室
堀 静夫他, 1983年, 『宇都宮の遺跡』 宇都宮市教育委員会

Ⅲ 調査の経過と方法

1 調査の経過

今回の調査地には、栗の木が植えられていたため、調査に先立ち、これらの伐採を行わなければならない。この伐採作業及び焼却に、10月16日から20日の3日間を費やした。伐採作業終了後、グリッドの設定及びテントの設営等を行い、10月21日より本格的な調査作業に取りかかった。以下、調査の概要については、発掘日誌抄に示すとおりである。

————— 発掘日誌抄 —————

10月21日

調査地内の標準堆積土層を把握するため、調査区北側において土層調査を行った。その結果、ローム漸移層（黄褐色土層）まで掘り下げ、遺構、遺物の検出を行うこととした。

10月22日

東地区及び西地区の排土を開始する。表土下約40cmの茶褐色土層中より、かなりの数の土器片が出土した。

10月23日～11月2日

東地区、西地区の排土および遺構プランの検出作業を行う。これによって東地区には、住居跡1軒、土坑180基等、西地区には、住居跡5軒、土坑210基等が存在することを確認した。これらの遺構がほぼ確認できた段階の10月26日に、宇都宮市文化財保護審議委員塚静夫、橋本澄朗両氏、文化財調査員高藤常松氏により、発掘調査技術等の指導を受け、東地区については、全面発掘調査、西地区については、遺構の確認調査を行うことに決定した。

11月5日

東地区の各遺構について、西側から番号を付し、各遺構の調査を開始する。

11月6日～11月11日

各遺構の調査を進める。



西地区の排土作業風景



東地区の遺構調査風景

11月12日～11月20日

各遺構の調査を進める。東地区の西側部分においては、土坑どうしの切り合いが比較的少なく調査も順調に進んだが、中央部分および東側部分においては、切り合いがはなはだしく、調査が難航した。

11月24日～11月30日

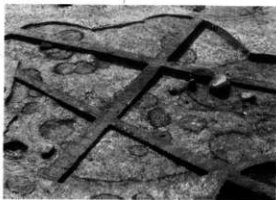
東地区の西寄り部分に確認された1号住居跡の調査を行う。

12月2日～12月4日

東地区の調査と並行して、西地区の遺構確認作業および実測作業を行う。

12月7日

現地にて、前記の3氏に遺構および出土遺物等に関する指導を受ける。



1号住居跡調査状況

12月8日～12月11日

東地区の各遺構の調査と並行して、写真撮影および実測作業を行う。西地区については、埋め戻し作業を開始する。

12月15日～12月16日

東地区、西地区の埋め戻し作業を行う。東地区については、16日午前中まで、遺構全体の写真撮影および遺構の実測作業を行い、午後に埋め戻しを行った。埋め戻しには、人力の他に、重機を使用した。

12月19日

テント、器材等の撤去を行い、調査終了とする。

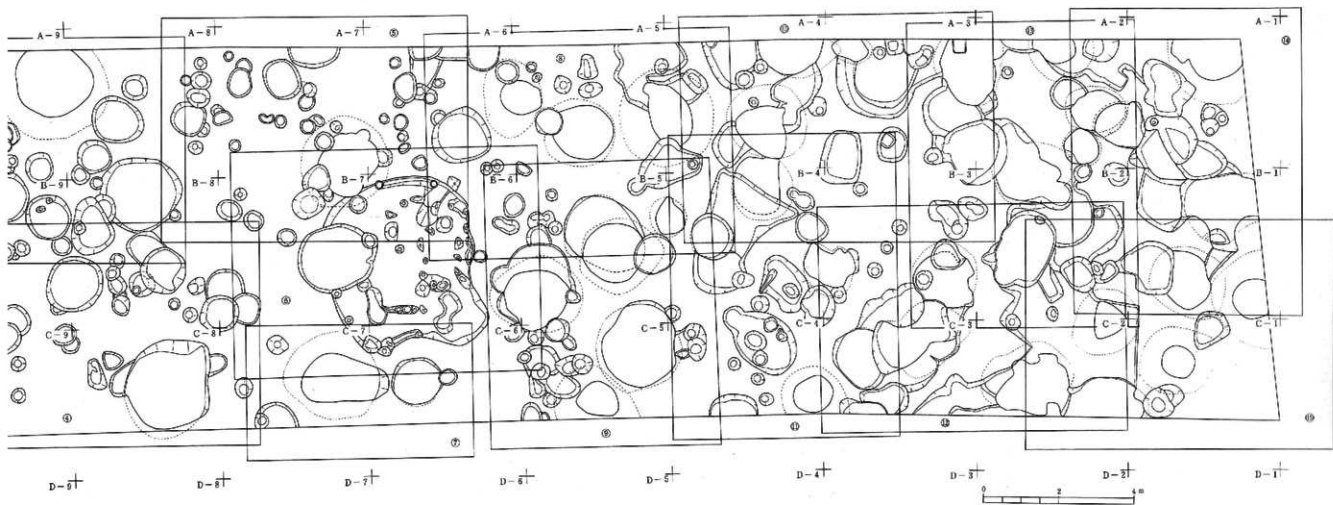
2 調査の方法

現地は2000㎡の短冊形の地割りをもち栗林となっており、その東半に自治公民館が、西半に宅地造成が計画されていた。調査は、緊急に建設工事が開始される自治公民館部分については発掘調査（本調査）を、将来的に建設が予定されている宅地造成部分については確認調査とした。

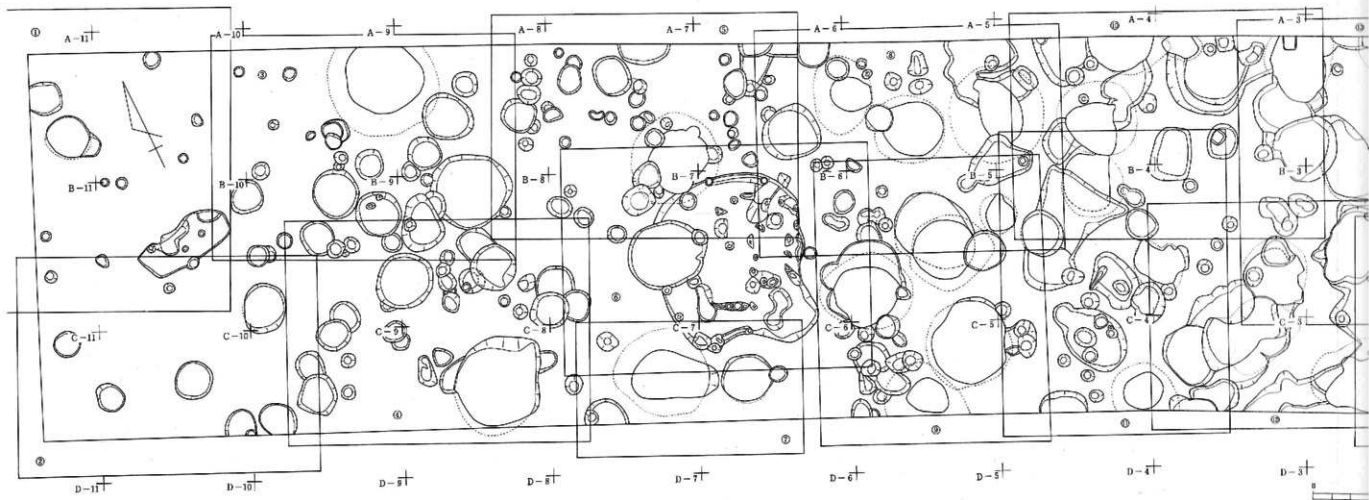
調査地が東西に長く、しかも長軸が大きくふれているため、南北軸を基本とするグリッド設定を行うのが困難であり、やむをえず地割りの長軸方向に基準線を設けて、4m方眼による設定を行った。東西軸の傾きはE-24°-Sである。

標高は、水準点までの距離が遠いことから、付近の道路に設定された標高点を使用した。

調査は建物建設部分の全面発掘を原則として、まず土層確認のためのトレンチを設定した。その結果、上層から黒色土→黒褐色土→ローム層の順であり、黒褐色土層下部に遺構確認面があることがわかったため、そのレベルまで全面的排土を行なって遺構の確認につとめた。



第4図 竹下道路遺構配置図(東地区) (①~⑨は地区番号を示す。)



第4図 竹下遺跡遺構配置図(東地区) (①~⑮は地区番号を示す。)

その段階で自治公民館部分（東地区）では住居跡1軒，土坑約200基，宅地部分（西地区）では住居跡5軒，土坑約200基が確認され，調査費用，調査期間等を考慮して，西地区については宅地造成が具体化した時点で本調査を行うこととし，東地区についてのみ遺構の掘り込みを行なった。

調査面積は東地区490㎡，西地区550㎡の合計1040㎡である。

地区番号	土 坑 (SK) 番 号 ・ 住 居 跡 (SI) 番 号
1	SK3 (SK4) (SK7) (SK20)
2	(SK1) (SK2) (SK5) (SK6) (SK8) (SK14)
3	(SK9) (SK10) (SK11) (SK13) SK21 (SK22) SK23 SK24 SK27 (SK28) (SK29) SK35 SK44 SK45 SK46 (SK53) SK58 SK62 SK76 SK82 SK216
4	SK15 (SK16) (SK17) (SK18) (SK19) (SK25) (SK26) SK30 SK31 (SK32) (SK33) (SK34) SK47 SK48 SK49 SK50 SK123 SK144 SK145 (SK146) SK151 (SK162) SK163 SK164 (SK179)
5	SK36 SK37 SK38 SK39 SK40 (SK41) SK42 (SK43) SK51 SK52 SK 55 SK77 (SK78) (SK79) SK141 (SK147) (SK154) SK155
6	(SI1) SK75 (SK148) SK158
7	(SK150) (SK152) SK174
8	(SK56) (SK60) SK63 (SK64) (SK73) SK80 SK83 SK87 SK88 SK90 (SK92) SK93 SK95 SK104 (SK180) SK194 SK197
9	(SK54) SK65 SK66 SK67 SK68 SK69 SK70 (SK71) (SK72) (SK74) SK84 (SK85) (SK86) (SK91) (SK108) (SK109) (SK111) SK131 (SK 132) SK189 SK190 SK191 SK192
10	SK96 (SK101) SK102 (SK107) (SK110) (SK125) (SK127) (SK142) S K195 SK196 SK198 SK199 SK201 SK202
11	(SK105) (SK106) (SK112) (SK116) (SK118) (SK138) (SK157) SK200 SK203 SK204 SK205
12	(SK117) (SK119) (SK120) (SK121) (SK124) (SK149) (SK156)
13	(SK126) (SK128) (SK129) SK130 (SK133) (SK134) (SK137) SK139 (SK165) (SK166) (SK167) SK168 (SK169) SK170 (SK171) SK206 SK 207 SK217
14	(SK135) (SK136) (SK172) (SK173) SK175 (SK176) (SK177) (SK178) SK208 SK213
15	SK160 (SK161) (SK181) SK182 (SK183) (SK184) (SK188) SK214 SK 215

第2表 調査地区番号・遺構番号対照表

() を付したものは遺物の出土したものを示す。

Ⅳ 検出された遺構と遺物

1 土坑・住居跡と出土遺物

・第1地区(第6図)

本地区は調査区の西部に位置し、A-10、A-11、B-10、B-11グリッドにある。本地区に含める遺構は土坑4基である。

第3号土坑

不整な円形を呈し、長径1.14m、短径1.04m、深さ0.48mを測る。壁は平坦な底面から立ち上がり、やや袋状を呈する。

第4号土坑

ほぼ円形を呈し、径0.88m、深さ0.22mを測る。壁は平坦な底面から垂直に立ち上がる。

出土土器(第5図1・2)

1は、胴部片。地文に単節LRの縄文が施され、細い粘土紐の隆帯が貼付される。2は、胴部片。単節LR縦位の縄文が施される。

第7号土坑

長楕円形を呈し、長径2.46m、短径1.00m、深さ0.10mを測る。底面には3個のピットが認められるが本土坑には伴わないものと考えられる。壁は底面から浅く斜めに立ち上がる。

出土土器(第5図1・2)

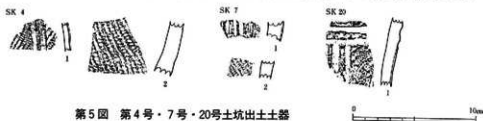
1は、胴部片。やや丸味をもった原体による沈線が密に施される。2は、胴部片。単節LR縦位の縄文が施される。

第20号土坑

円形を呈し、径0.48m、深さ0.34mを測る。壁はほぼ平坦な底面からやや外傾して立ち上がる。

出土土器(第5図1)

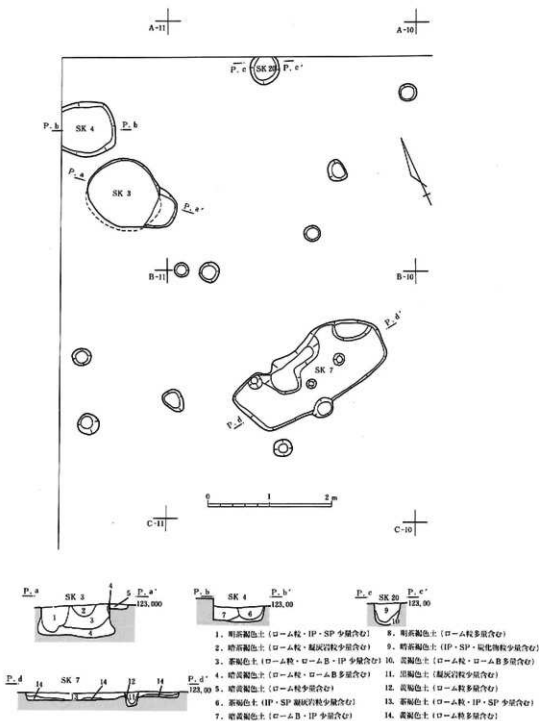
1は胴部片。磨減が著しいが、LR横位の縄文を地文とし、沈線による区画文が施される。



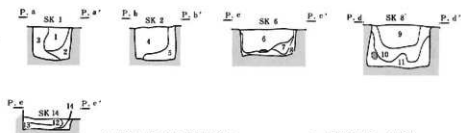
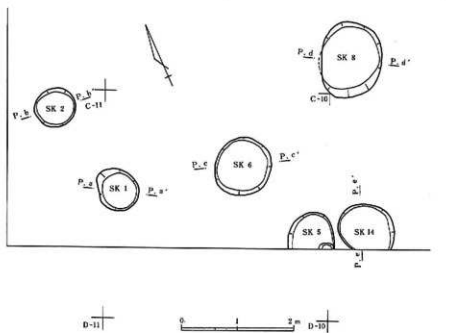
第5図 第4号・7号・20号土坑出土土器

・第2地区(第7図)

本地区は、調査区南西のA-9、A-10、A-11、B-9、B-10、B-11グリッドにまたがっ



第6图 第1地区 遺構図



- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. 黒褐色土 (ローム粒・炭化物粒含む) | 8. 暗茶褐色土 (ローム粒含む) |
| 2. 黒褐色土 (ローム粒・炭化物粒・焼土粒少量含む) | 9. 黒褐色土 (ローム粒・凝灰岩粒・IP 少量含む) |
| 3. 黄褐色土 (ローム粒・ローム目少量含む) | 10. 暗茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む) |
| 4. 黒褐色土 (凝灰岩粒少量含む) | 11. 暗茶褐色土 (ローム粒少量含む) |
| 5. 黄褐色土 (ローム粒・ローム目少量含む) | 12. 暗褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む) |
| 6. 黒褐色土 (ローム粒・炭化物粒含む) | 13. 茶褐色土 (ローム粒少量含む) |
| 7. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・焼土粒少量含む) | 14. 暗茶褐色土 (ローム粒少量含む) |

第7図 第2地区 遺構図

ており、西側と南側は調査区外となる。土坑は6基検出されたが、いずれも比較的小規模で、壁がほぼ垂直に立ち上がるものが多い。

第1号土坑

やや南北に長い円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央部の低いならかな凹状をなす。長径0.80m、短径0.69m、深さ0.57mを測る。

出土土器（第8図1）

1は、胴部片。断面三角形の隆線が施され、内面は粗い調整が施される。

第2号土坑

やや東西に長い円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、若干の起伏が認められる。長径0.72m、短径0.66m、深さ0.60mを測る。

出土土器（第8図1）

1は、胴部片。縦位の条線を地文とし、横位の平行沈線が施される。

第5号土坑

調査区の南端にあり、調査区外にまたがっているため全体は把握できないが、北東～南西に長い楕円形をなすものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏を有する。深さは0.16mを測る。底面の東側壁直下に、土坑底面よりの深さが0.35mを測る小ビットをもつ。

出土土器（第8図1～7）

1は、深鉢形土器の破片。口縁部は小波状、肩部は隆帯で区画、胴部には幅広の沈線による「H」字状の区画文、区画文以外にはRLの単節斜縄文を充填。2は、口縁部片。低い隆線が巡る。内面には丁寧な研磨が施される。3は、胴部片。縦位の沈線が施され、RL横位の縄文を充填。4は、胴部片。RL斜位の縄文が施される。5は、胴部片。器面にはRL縦位の縄文が施される。6は、小形土器の底部。底部直上でくびれ、胴部はひろがる器形である。7は、無文の赤彩された底部。

第6号土坑

ほぼ円形を呈する土坑であり、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏をもつ。径1.06m、深さ0.48mを測る。

出土土器（第8図1・2）

1は、胴部片。地文にLRの縄文が施され、端部に弧を描いた沈線と、縦方向の沈線がみられる。2は、胴部片。器面は櫛状の原体による短かい縦位の条線文が施される。

第8号土坑

北東～南西に長い不整楕円形を呈する土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北東側部分はややオーバーハンクしている。底面はなだらかな低い起伏を有する。長径1.34m、短径1.06m、深さ0.76mを測る。

出土土器（第8図1～7）

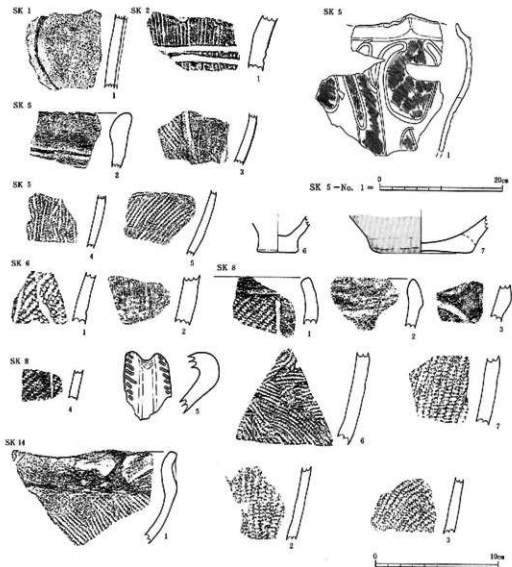
1は、口縁部片。やや内湾しながら開く口縁部は、無文である。縦位の沈線による区画内にはRL縦位の縄文が充填される。2は、口縁部片。口縁端部はやや内湾しながら開き、内外面に平坦に整形している。3は口縁部に近い胴部片。沈線文が施される。4は、胴部片。地文にRLの縦位縄文が施され、縦位の沈線がみられる。5は、橋状把手の破片。縁辺にLRの単節斜縄文が施される。6は、胴部片。LR斜位の縄文が施される。7は、胴部片。RL縦位の縄文が施される。内面は丁寧な研磨がなされている。

第14号土坑

調査区の南端に、一部分が調査区外にまたがって検出された。全体を把握できないが、ほぼ不整形円形を呈するものと思われる。壁はやや外反して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。長径1.05m、深さ0.20mを測る。

出土土器（第8図1～3）

1は、口縁部片。低い波状口縁を有し、波頂部直下には押圧が加えられる。胴部にはRL横位の縄文、内面には横位の粗い研磨が施される。2は、胴部片。RLの縦位縄文が施される。3は、胴部片。RLの縦位縄文が施される。



第8図 第1号・2号・5号・6号・8号・14号土坑出土土器

・第3地区(第9・10図)

本地区はA-8, A-9, B-8, B-9グリッドに位置しており、北側は調査区外である。本地区に記載した遺構は土坑21基である。第22号土坑は円形の袋状土坑、その他は円形もしくは不整形の土坑である。

第9号土坑

B-9グリッド内に存在し、小ピットを切っている。ほぼ円形を呈し、壁はやや外反して立ち上がる。底面は中央部がくぼむ凹面をなす。長径0.59m、短径0.56m、深さ0.25mを測る。

出土土器(第11図1・2)

1は、胴部片。器面は粗い研磨が施され、横位の鋸歯状文が施される。2は、胴部片。LRの横位縄文が施される。

第10号土坑

B-9, B-10グリッドにまたがっている。東西にやや長い不整形円形を呈しており、壁はやや外反して立ち上がり、底面は起伏を有する。長径0.96m、短径0.84m、深さ0.24mを測る。

出土土器(第11図1~4)

1は、口縁部片。丸味をもつ口縁端部は無文を呈する。横位の沈線文が施される。LRの縦位縄文がみられる。2は、胴部片。断面三角形をした細い粘土紐を縦位に貼付。3は、胴部片。RLの縦位縄文が施される。4は、胴部片。LRの横位縄文が施される。

第11号土坑

A-9グリッドに位置する。円形を呈し、壁の立ち上がりは底面に近いほど急傾斜となり、底面は凹状をなす。長径0.49m、短径0.44m、深さ0.50mを測る。

出土土器(第11図1・2)

1は、胴部片。沈線によって区画文が施され、RLの縦位縄文が充填される。2は、胴部片。櫛歯状の原体による縦位の条線文が施される。

第12号土坑

B-9グリッドに位置し、第24号土坑に切られている。ほぼ円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。径0.92m、深さ0.18mを測る。

第13号土坑

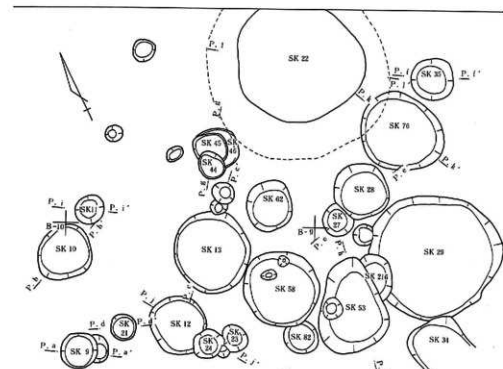
A-9, B-9グリッドに位置し、小ピットによって切られている。円形を呈し、壁面はやや内湾しつつ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。長径1.32m、短径1.22m、深さ0.60mを測る。

出土土器(第11図1~7)

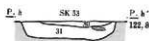
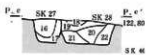
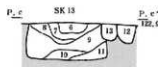
1は、口縁部片。口縁部は、巾広の無文を呈する。頸部には、断面三角形をした細い粘土紐が廻らされている。胴部には、LRの縦位縄文が施される。2は、胴部片。地文にRLの斜位縄文が施される。断面三角形をした細い粘土紐を弧を描くように貼付。3は、胴部片。幅広の平行沈線文によって区画され、LRの縦位縄文が充填される。4は、胴部片。地文にLRの横位縄文が施さ

A-10

A-9

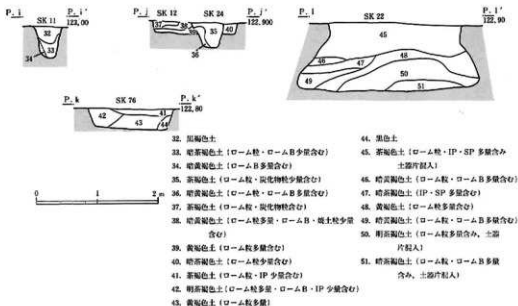


0 1 2 m



1. 赤褐色土 (ローム粒少量含む)
2. 暗黄褐色土 (ローム粒多量含む)
3. 暗黄褐色土 (ローム粒、炭化物粒少量含む)
4. 暗茶褐色土 (IP・SP少量含む)
5. 黄褐色土 (ロームB多量含む)
6. 赤褐色土 (燧土粒、炭化物粒多量含む)
7. 暗赤褐色土 (燧土粒多量、炭化物粒、ローム粒少量含む)
8. 暗茶褐色土 (燧土粒少量含む)
9. 茶褐色土 (ローム粒多量含む)
10. 暗黄褐色土 (ローム粒多量含む)
11. 暗茶褐色土 (ローム粒少量含む)
12. 黒褐色土
13. 暗茶褐色土 (ローム粒含む)
14. 赤褐色土 (砂粒、燧灰石粒含む)
15. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)
16. 黒色土
17. 暗茶褐色土 (ローム粒含む)
18. 黒褐色土 (ローム粒、炭化物粒含む)
19. 茶褐色土 (ローム粒少量含む)
20. 赤褐色土 (ローム粒多量、ロームB少量含む)
21. 明茶褐色土 (ローム粒多量、ロームB少量含む)
22. 茶褐色土 (ローム粒多量、IP・SP少量)
23. 黒褐色土 (ローム粒、炭化物粒少量)
24. 黒褐色土 (ローム粒少量)
25. 茶褐色土 (ローム粒少量含む)
26. 茶褐色土 (ローム粒多量含む)
27. 暗黄褐色土 (ローム粒多量含む)
28. 赤褐色土
29. 黄褐色土 (ローム多量含む)
30. 暗赤褐色土 (ローム粒、IP・SP多量含む)
31. 暗茶褐色土 (ローム粒、IP・SP少量含む)

第9図 第3地区 遺構図(1)



第10図 第3地区 遺構図(2)

れ斜位の平行沈線がみられる。5は、胴部片。縦位沈線によって区画され、LRの横位縄文が充填される。6は、胴部片。器面はもろい。縦位沈線によって区画され、LRの縦位縄文が充填される。7は、胴部片。縦位沈線によって区画され、LRの縦位縄文が充填される。

第21号土坑

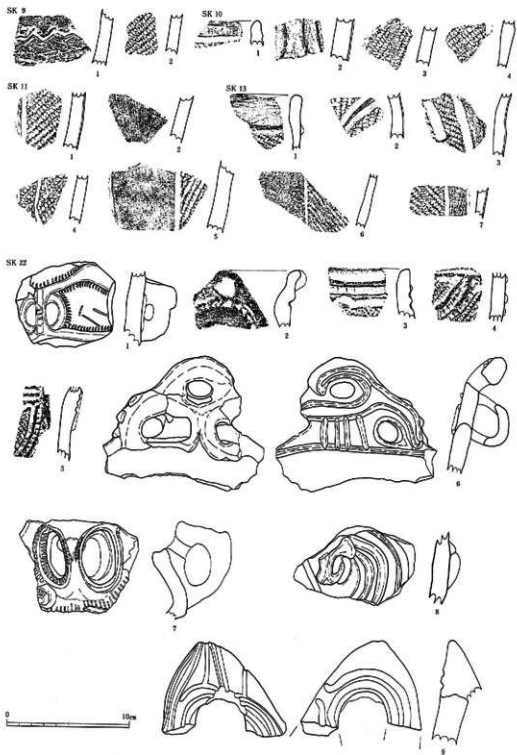
B-9グリッドに位置する。円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。長径0.41m、短径0.43m、深さ0.18mを測る。

第22号土坑

A-8、A-9グリッドに位置し、一部が調査区外にまたがるため、全体は把握できない。ほぼ円形を呈し、底面から大きく内傾して立ち上がり、開口部付近は垂直もしくは少し外傾する袋状土坑である。底面はほぼ平坦で、小ピット類は認められなかった。開口部径2.04m、床面径3.02m、深さ1.10m測る。

出土土器(第11図1~9、第12図10~21、第13図22~40、第14図41~48)

1は、波状口縁部片。文様帯の上下を画す隆帯から派生するように橋状把手を付し、把手の両側には、隆帯で眼鏡状のモチーフを作っている。把手及び、隆帯に沿って連続爪形文が施される。2は、波状口縁部片。口唇部には隆帯を貼付。波頂部には押圧が加えられる。隆帯に沿って角押文が施される。3は、口縁部片。直立する口唇部の内外面は、平坦に整形される。断面三角形の細い粘土紐を貼付。隆帯下に2本の角押文が施される。4は、胴部片。RLの縦位縄文を地文とし、押し引きの沈線によって背を割られた隆帯が施される。5は、胴部片。RLの横位縄文を地文とし、縦位の隆帯と押し引きによる沈線が施される。6は、把手の破片。粘土紐を「X」字状に組み合わせ



第11图 第9号·10号·11号·13号·22号土坑出土土器

た縦位の棒状把手が貼付される。それをとり囲むように上と左右に把手が貼付される。左右の把手上には突起が付され、内面には、隆帯による渦巻文、縦位の棒状浮文が施される。7は、眼鏡状把手の破片。把手の内部にも貫通孔を有し、眼鏡状の貫通孔の周囲には沈線もしくは、連続刺突文が施される。胴部は、ごく一部残存し、条線文が施された上に、沈線もしくは連続刺突文で背を割れた隆帯が貼付される。8は、胴部片。隆帯と沈線によって複弧文を形成し、「Y」字状の把手が貼付される。9は、山形を呈する把手の破片。外面は、眼鏡状を呈し、内面に穿孔する。内外面ともに沈線が施される。10は、把手の破片。横位の貫通孔を有する。正面及び、側面には沈線が施され、側面及び隆帯上には刻目が施される。11は、有孔の環状把手の破片。外面は、背面に沈線を有する隆帯によって、「の」の字状の文様を作り、内面は孔の周囲に沈線による円形文を施す。縁辺には鶏冠状に隆帯が貼付される。12は、胴部片。つば状の隆帯が貼付され、その上面には胴部が続く。縦位の条線が施される。13は、口縁部片。隆帯が貼付され、隆帯に沿うように沈線または、交互刺突文が施される。文様帯内には、縦位の条線文がみられる。14は、口縁部片。隆帯と沈線により渦巻文を形成し、空白部に縦位の沈線が施される。15は、口縁部片。口縁には隆帯貼付により二重口縁を作り、その下には横位の蛇行する隆帯を貼付する。胴部には縦位の沈線が施される。16は、破損した眼鏡状把手を有する口縁部片。口縁部外面に隆帯を有し、その隆帯から派生する形で眼鏡状把手を貼付する。把手上には沈線文が施される。口縁部文様帯には、背面に沈線を有する隆帯が貼付され、斜行する沈線文を充填する。17は、口縁部片。口縁部文様帯は隆帯による区画文を作り、区画内には縦位の沈線が充填される。胴部にはLR縦位による縄文が施される。18は、胴部片。背面に沈線を有する隆帯によって区画文を作り、区画内には縦位の沈線を充填している。19は、波状口縁を有する深鉢形土器の破片である。口縁部文様帯は上下を隆帯で区画され、その中に隆帯による渦巻文、区画文を作っている。胴部には横位の3条の平行沈線が上下に施され、その間に1条の波状沈線が施文される。また、口縁部、胴部とも地文のLRの単節斜縄文を磨り消している。色調は暗橙色を呈する。器高は21cmである。20は、口縁部片。口唇外面には隆帯が付され、平行な2本の隆帯によってクランク状の文様と渦巻文が表わされる。地文はRL縦位の縄文である。21は、口縁部破片。口唇外面には隆帯が付され、円盤状の把手が水平に付される。把手の上面には沈線による渦巻文。把手から2本の隆帯が派生する。地文はLR横位の縄文である。22は、口縁部破片。隆帯によって区画文を作り、区画の接点は、外方、上方に突出して波状をなし、その直下には縦位の沈線が見られる。23は、口縁部片。口唇端部及び口縁直下に断面三角形の隆帯、その下に沈線が施された断面四角形の隆帯が付される。24は、口縁部片。口縁部文様帯の上を隆帯で区画し、内部には、RL縦位縄文を地文とし2本一對の隆帯とそれに沿う沈線による文様を施す。25は、口縁部片。文様帯の上部に横位の隆帯、それからクランク状に2本一對の隆帯を貼付する。26は、口縁部片。口縁端部に断面三角形の1条の隆帯を貼付。地文にLRの縦位縄文が施され、沈線により背を割られた隆帯で渦巻文が描かれる。27は、口縁部片。口縁部文様帯の上下を隆帯で区画し、文様帯内には、LR横位の縄文を地文として、2本一對の隆帯とそれに伴う沈線によって蛇行する文様

が作られる。28は、口縁部から胴部にかけての破片。文様帯の上下を隆帯とそれに沿う沈線で区画し、文様帯内には、隆帯により剣先文のつく渦巻文を施し、RLの縄文が充填される。胴部には、RL縦位の縄文が施される。29は、口縁部片。口縁部文様帯の上は隆帯で区画し、内部にはRL縦位の縄文を地文として隆帯による剣先文が施される。30は、口縁部片。隆帯とそれに伴う沈線で区画し、RL横位の縄文が充填される。31は、口縁部片。口唇部は沈線が巡らされ、胴部はRL縦位の縄文を地文とし、3本一対の沈線により剣先状のモチーフが付く渦巻文が施される。32は、胴部片。縦位の蛇行する1本をはさみ、両側に3本一対の平行沈線文が、施される。33は、胴部片。横位の隆帯が回り、半截竹管による直線及び、蛇行する平行沈線が施される。34は、胴部片。LR縦位の縄文を地文とし、横位の3本の平行沈線文が施される。35は、胴部片。地文にLR縦位の縄文が施され、縦横の沈線で区画し、蛇行する沈線がみられる。36は、胴部片。RL縦位の縄文を地文とし縦位の平行沈線と蛇行する隆帯が施される。37は、胴部片。LR縦位の縄文を地文とし、途中に円形文が配された、2条以上が一体となる縦位の沈線が垂下する。38は、胴部片。地文はLR縦位の縄文。縦位に3本一対の平行沈線文が施される。39は、やや巾広の浅い縦位の沈線で区画し、LR横位の縄文が充填されている。40は、胴部片。RL縦位の縄文が施され、縦位の磨消が加えられる。内面に粗い研磨。41は、頸部片。ゆるやかな曲線の条線文が施される。42は、深鉢形土器の底部。底径10cm。胴部にはRL縦位の縄文が施され、底部近くは無文となる。43は、口縁部片。無文の口縁端部は内湾しながら開き、彩色してある。「く」の字に曲折した部分に断面三角形の1本の隆帯を貼付する。44は、口縁部片。内湾しながら開く口縁部は、器面に研磨による凹凸が生じる。不等間の沈線が数本みられる。45は、口縁部片。内湾しながら開き端部に無文の平坦面を有する。46は、口縁部片。隆帯で区画しRL縦位の縄文が充填される。47は、浅鉢形土器の底部。器面は丁寧に研磨されている。福物圧痕が残る。48は、口縁部片であり約五分が残存する。口縁部内面には隆帯を付し、外面にも断面三角形の隆帯が付されて刻目が施される。胴部には、LR縦位の縄文が施される。口径（復元）20.4cmである。

第23号土坑

B-9グリッドに位置し、第24号土坑に切られ、小ピットを切っている。南北に長い楕円形を呈し、壁はやや外傾して立ち上がり、底面は平坦である。径0.44m、深さ0.17mである。

第24号土坑

B-9グリッドに位置し、第12号土坑、第23号土坑および小ピットを切っている。不整形を呈し、壁はやや外反しつつ立ち上がる。長径0.54m、短径0.44m、深さ0.41mを測る。

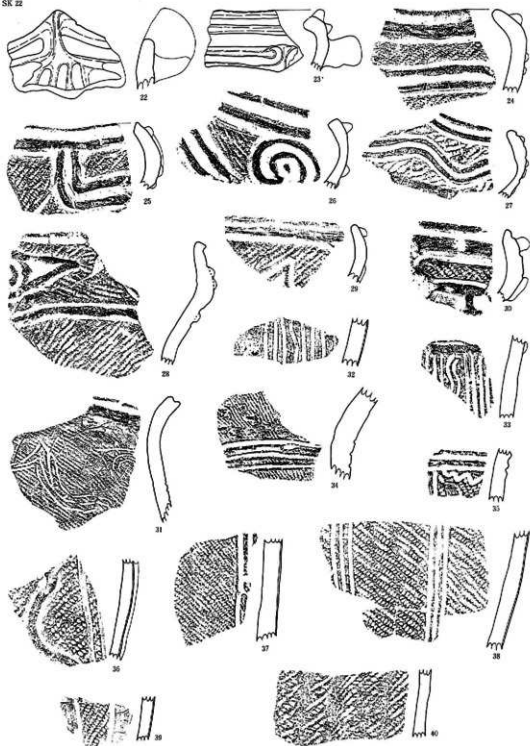
第27号土坑

A-8、B-8グリッドに位置し、第28号土坑を切っている。不整形を呈し、壁は湾曲しつつ立ち上がり、底面は平坦である。



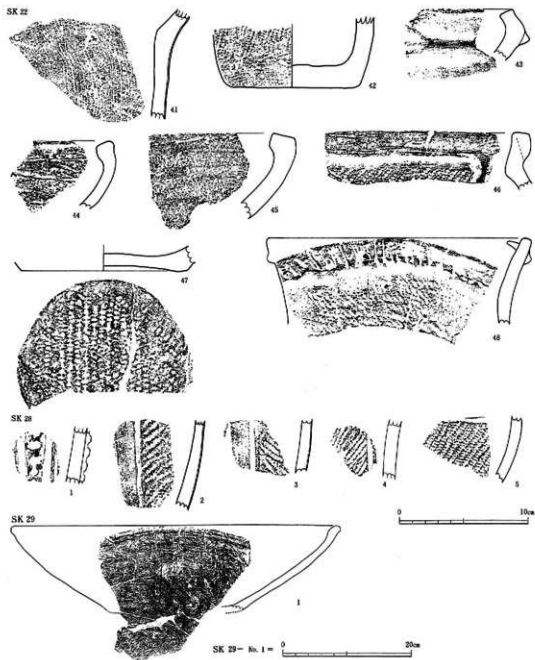
第12图 第22号土坑出土土器(1)

SK 22



第13图 第22号土坑出土土器(2)

0 10cm



第14図 第22号・28号・29号土坑出土土器

第28号土坑

A-8グリッドに位置し、27号土坑により切られている。不整円形を呈し、壁は外傾しつつ立ち上がり、底面は平坦である。長径0.88m、短径0.83m、深さ0.38mを測る。

出土土器（第14図1～5）

1は、胴部片。縦位の隆帯が貼付され、隆帯上には押圧が加えられる。隆帯に沿うように沈線が施される。2は、胴部片。沈線で区画し、RL縦位の縄文が充填される。3は、胴部片。沈線で区画し、LR縦位の縄文が充填される。4は、胴部片。沈線で区画し、RL縦位の縄文が充填される。5は、胴部片。RL縦位の縄文が施される。

第29号土坑

A-8、B-8グリッドに位置し、第216号土坑に切られている。ほぼ円形を呈し、壁は若干オーバーハング気味であるがほぼ垂直に立ち上がり、底面はなだらかな起伏をもつ。長径2.16m、短径1.84m、深さ0.77mを測る。

出土土器（第14図1）

1は、浅鉢形土器。復元口径約48cmで無文を呈する。

第35号土坑

A-8グリッドに位置する。円形を呈し、壁は底面からゆるい湾曲をもって立ち上がり、開口部付近ではほぼ直立する。長径0.68m、短径0.65m、深さ0.50mを測る。

第44号土坑

A-9グリッドに位置し、第45号土坑、第46号土坑を切っている。北西～南東に長い楕円形を呈し、平坦な底面から壁が垂直に立ち上がる。長径0.46m、短径0.41m、深さ0.18mを測る。

第45号土坑

A-9グリッドに位置し、第44号土坑に切られ、第46号土坑を切っている。東西に長い楕円形を呈し、壁は外傾しつつ立ち上がり、底面は平坦である。長径0.60m、深さ0.25mを測る。

第46号土坑

A-9グリッドに位置し、第44号土坑、第45号土坑によって切られている。不整円形になるものと思われ、壁は直線的に垂直に立ち上がる。重複のため規模は明確にし難いが、径0.75m、深さ0.15m程度と考えられる。

第53号土坑

B-8グリッドに位置し、第216号土坑を切っている。小ピットが認められるが前後関係は不明である。北東～南西に長軸をもつ不整楕円形を呈し、壁の立ち上がりは西側が緩く、東側が急であり、底面は中央がくぼむ。長径1.54m、短径1.15m、深さ0.31mを測る。

第58号土坑

B-8、B-9グリッドに位置し、第82号土坑を切っている。円形を呈し、起伏のある底面から壁がやや開き気味に立ち上がる。底面に2個の小ピットを有する。長径1.26m、短径1.20m、深さ0.27mを測る。

第62号土坑

A-9、B-9グリッドに位置する。円形を呈し、床面からやや開き気味に壁が立ち上がる。長径0.80m、短径0.72m、深さ0.42mを測る。

第76号土坑

A-8グリッドに位置する。北西-南東に長軸をもつ楕円形を呈し、平坦な底面より壁が開き気味に立ち上がる。長径1.42m、短径1.20m、深さ0.32mを測る。

第82号土坑

B-9グリッドに位置し、第58号土坑に切られている。南北に若干長い円形を呈し、底面から直線的かつ開き気味に壁が立ち上がる。大きさは明確にできないが、長径0.54m、短径0.51m、深さ0.13mと考えられる。

第216号土坑

B-8グリッドに位置し、第29号土坑を切り、第53号土坑に切られている。南北に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は現存で長径0.80m、深さ0.30mを測る。

・第4地区（第15図）

本地区はB-7、B-8、B-9、C-7、C-8、C-9グリッドにまたがっている。当地区において記載する遺構は土坑23基で、大半が切り合っている。

第15号土坑

C-9グリッドに位置し、第16号土坑を切っている。不整形を呈し、壁は平坦な底面よりやや外傾して立ち上がる。長径1.16m、短径1.08m、深さ0.26mを測る。

第16号土坑

C-9グリッドに位置し、第15号土坑に切られている。本来の形状は不明だが南北に長い楕円形を呈するものとみられ、壁は平坦な底面より垂直に立ち上がる。短径0.73m、深さ0.16mを測る。

出土土器（第16図1～3）

1は、口縁部片。背を沈線によって割られた隆帯が施される。2は、胴部片。横位の平行沈線文で区画し、磨消縄文が充填される。3は、胴部片。RL横位の縄文が施される。

第17号土坑

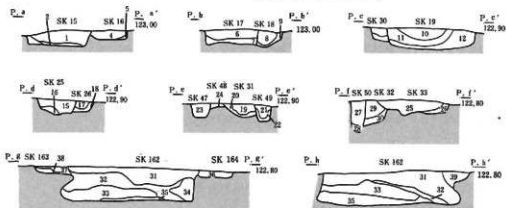
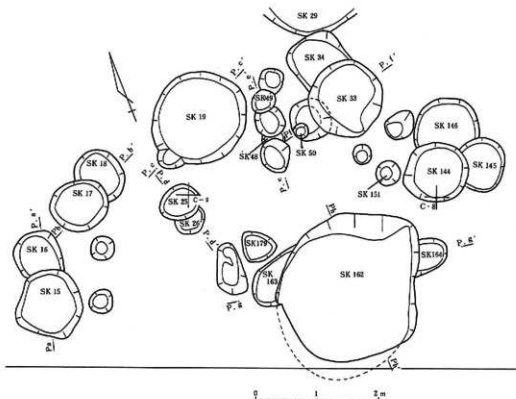
B-9、C-9グリッドに位置し、第18号土坑を切っている。楕円形を呈し、壁は平坦な底面より垂直に立ち上がる。長径0.94m、短径0.82m、深さ0.24mを測る。

出土土器（第16図1・2）

1は、地文に、LR縄文。比較的浅い原体によって斜位の2本一對の平行沈線文が施される。輪積みの接合で剝離する。2は、胴部片。地文にRLの磨消縄文。2本の沈線がみられる。

第18号土坑

B-9、C-9グリッドに位置し、第17号土坑に切られている。全体の形状・規模は不明だが、円形を呈するものと思われる。壁はやや起伏を有する底面から急角度で立ち上がる。深さ0.26mを測る。



1. 暗赤褐色土：(IP・SP・炭化海粒少量含む)
2. 赤褐色土：(ロームB少量含む)
3. 明赤褐色土：(ローム粒多量・炭化物粒少量含む)
4. 赤褐色土(ローム粒・IP・SP少量含む)
5. 赤褐色土：(ローム粒少量含む)
6. 赤褐色土：(ローム粒少量含む)
7. 黄褐色土：(ローム粒多量含む)
8. 赤褐色土：(ローム粒多量含む)
9. 暗黄褐色土：(ローム粒多量含む)
10. 黒褐色土
11. 暗赤褐色土：(ローム粒多量・炭化物粒少量含む)
12. 赤褐色土：(ローム粒多量含む)
13. 赤褐色土：(ローム粒・ロームB少量含む)
14. 暗黄褐色土：(ローム粒少量含む)
15. 赤褐色土：(ローム粒・炭化物粒少量含む)
16. 黄褐色土：(ローム粒多量含む)
17. 暗赤褐色土：(ローム粒・炭化物粒少量含む)
18. 赤褐色土：(ローム粒多量含む)
19. 赤褐色土：(ローム粒少量含む)
20. 暗黄褐色土：(ローム粒多量含む)
21. 赤褐色土：(ローム粒多量含む)
22. 暗黄褐色土：(ローム粒多量含む)
23. 赤褐色土：(ローム粒少量含む)
24. 黒褐色土
25. 赤褐色土：(ローム粒・KP・IP少量含む)
26. 暗黄褐色土：(ローム粒多量含む)
27. 暗赤褐色土：(ローム粒多量含む)
28. 明赤褐色土
29. 暗赤褐色土：(ローム粒・IP少量含む)
30. 明赤褐色土：(ローム粒・ロームB多量含む)
31. 黒褐色土：(ローム粒少量含む)
32. 赤褐色土：(ローム粒多量含む)
33. 黄褐色土：(ローム粒・ロームB多量含む)
34. 明赤褐色土：(ロームB多量含む)
35. 黒色土
36. 赤褐色土
37. 赤褐色土
38. 暗黄褐色土
39. 暗黄褐色土：(ロームB多量含む)

第15圖 第4地区 遺構圖

出土土器（第16図1・2）

1は、胴部片。地文にLR横位の縄文。縦位の3本の不等間沈線が施される。2は、隆帯で区画し、LR横位の縄文が充填される。

第19号土坑

B-8、B-9グリッドに位置し、第30号土坑を切っている。ほぼ円形を呈し、底面は中央のくぼむ鍋底状となり、壁はやや外傾して立ち上がる。径1.42m、深さ0.33mを測る。

出土土器（第16図1～16）

1は、口縁部片。隆帯が巡らされる。2は、口縁部片。RL縦位の縄文が施される。3は、口縁部片。地文に、羽状縄文が施され、縦位の沈線による楕円形文がみられる。4は、口縁部片。口縁端部に、横位の隆帯を貼付。胴部はRL横位の縄文が施される。5は、胴部片。沈線により、縦位の楕円形の区画文が施され、RL縦位の縄文が充填される。6は、胴部片。沈線によって縦位の楕円形の区画文が施され、RL縦位の縄文が充填される。7は、胴部片。縦位の沈線で区画し、RL縦位の縄文が充填される。8は、縦位の沈線で区画し、RL縦位の縄文が充填される。9は、胴部片。地文にRL横位の縄文。断面三角形の2本の隆帯が弧を描くように貼付される。10は、地文に羽状縄文が施される。断面三角形の隆帯を貼付。11は、胴部片。断面三角形を呈する縦位の隆帯で区画し、RL縦位の縄文が充填される。12は、縦位の隆帯で区画し、RL縦位の縄文が充填される。13は、胴部片。縦位の隆帯で区画し、RL縦位の縄文が充填される。14は、胴部片。隆帯が巡らされる。15は、全体的に整形は雑で、研磨や縦位の条線が施される。16は、胴部片。縦位の条線文が施される。17は、胴部片。弧を描くように交差しながら条線文が施される。

第25号土坑

C-9グリッド北東隅付近に位置し、第26号土坑を切っている。やや西側が突出する円形を呈する。底面はやや起伏を有し、壁面は外傾しつつ立ち上がる。長径0.68m、短径0.57m、深さ0.24mを測る。

出土土器（第16図1・2）

1は、胴部片。縦位の幅広の沈線が施される。RL縦位の縄文がみられる。2は、胴部片。斜位に交差する条線文が施される。

第26号土坑

C-8、C-9グリッドに位置し、第25号土坑に切られている。全体の形状・規模は不明だが、ほぼ円形を呈するものと思われる。底面は平坦で壁はやや外傾する。径0.50m、深さ0.18mを測る。

出土土器（第16図1）

1は、胴部片。やや幅広の原体によって斜位に交差する条線文が施される。

第30号土坑

B-9グリッドに位置し、第19号土坑によって切られている。ほぼ円形を呈するものと思われ、底面は平坦で壁はやや外傾する。径0.44m、深さ0.22mを測る。

第31号土坑

B-8グリッドに位置し、第48号土坑を切り、第49号土坑に切られている。南北に長い楕円形を呈し、底面はスリパチ状を呈し、壁面は外傾する。径0.47m、深さ0.21mを測る。

第32号土坑

B-8グリッドに位置し、第33号土坑、第50号土坑に切られている。ほぼ円形を呈するものと考えられる。底面は鍋底状となり、壁面はほぼ直立する。径0.72m、深さ0.40mを測る。

出土土器（第16図1-2）

1は、胴部片。断面が楕円形をした隆帯が貼付され、縁に2本の縦位の角押文が施される。数条の波状条線文がみられる。2は、LR横位の縄文が施される。

第33号土坑

B-8グリッドに位置し、第32号土坑、第34号土坑を切っている。不整な円形を呈し、底面は起伏が多く、壁の立ち上がりは傾斜が一様でない。径1.24m、深さ0.25mを測る。

出土土器（第16図1-4、第17図5-7）

1は、口縁部片。口唇と平行するように隆帯が貼付され、両側には沈線が施される。胴部は、RL横位の縄文を地文とする。2は、胴部片。巾広の縦位の沈線で区画し、RL縦位の縄文が充填される。3は、胴部片。縦位の沈線で区画し、RL縦位の縄文が充填される。4は、胴部片。縦位の沈線で区画し、LR横位の縄文が充填される。5は、胴部片。縦位の条線が施され、内面は一部赤彩されている。6は、底部片。下端は磨かれており、縦位の沈線も施されている。7は浅鉢形土器の無文の口縁部片。口唇部に平坦面をもつ。

第34号土坑

B-8グリッドに位置し、第29号土坑を切り、第33号土坑に切られている。全体の形状は不明だが、隅丸方形もしくは隅丸長方形になるものと思われる。径0.86m、深さ0.11mを測る。

出土土器（第17図1-3）

1は、胴部片。横位に角押文が施される。2は、胴部片。不明瞭であるが数本の燃系文が施されている。3は、口縁部片。口縁端部に平坦面をもつ無文の土器である。

第47号土坑

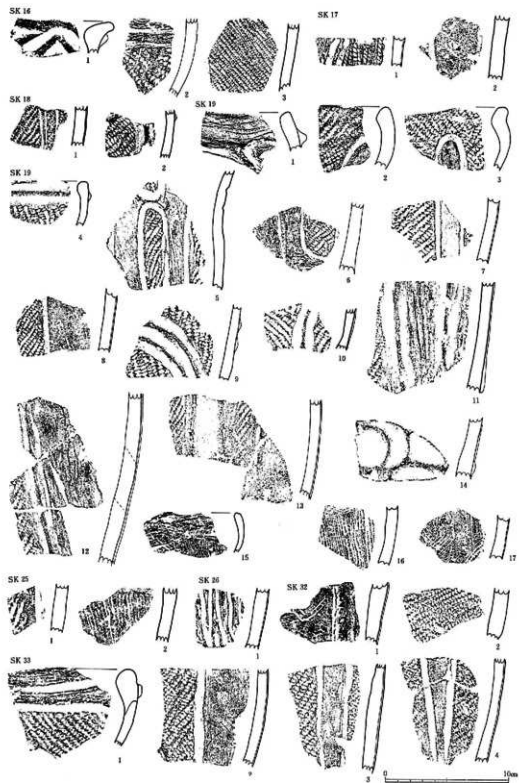
B-8グリッドに位置し、第48号土坑を切っている。開口部は円形、底面は楕円形を呈し、壁は東側の傾斜が緩く、西側が急である。長径0.56m、短径0.50m、深さ0.22mを測る。

第48号土坑

B-8グリッドに位置し、第31号土坑、第47号土坑に切られている。平面形は不明で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。径0.38m、深さ0.08mを測る。

第49号土坑

B-8グリッドに位置し、第31号土坑および小ビットを切っている。東西に長軸をもつ楕円形をなし、底面は平坦で垂直に壁が立ち上がる。長径0.42m、短径0.36m、深さ0.27mを測る。



第16图 第16号·17号·18号·19号·25号·26号·32号·33号土坑出土土器

第50号土坑

B-8グリッドに位置し、第32号土坑を切っている。円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。径0.24m、深さ0.50mを測る。

第123号土坑

C-8グリッドに位置する。南側が開く細長い台形のプランを有し、底面は起伏が多い。壁の立ち上がりの傾斜は一様ではない。長径0.84m、深さ0.41mを測る。

第144号土坑

B-7、B-8グリッドに位置し、第145号土坑、第146号土坑を切っている。円形を呈し、壁はやや外傾して立ち上がる。径1.10m、深さ0.32mを測る。

第145号土坑

B-7グリッドに位置し、第144号に切られ、第146号土坑を切っている。ほぼ円形を呈し、底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。径0.88m、深さ0.31mを測る。

第146号土坑

B-7、B-8グリッドに位置し、第144号土坑、第145号土坑に切られている。円形を呈し、底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。径1.10m、深さ0.34mを測る。

出土土器（第17図1～3）

1は頸部片。沈線によく複弧文が施されている。2は、口縁部片。羽状縄文が施されている。3は、胴部片。LR縦位の縄文を地文とし、角押文が縦位に施される。

第151号土坑

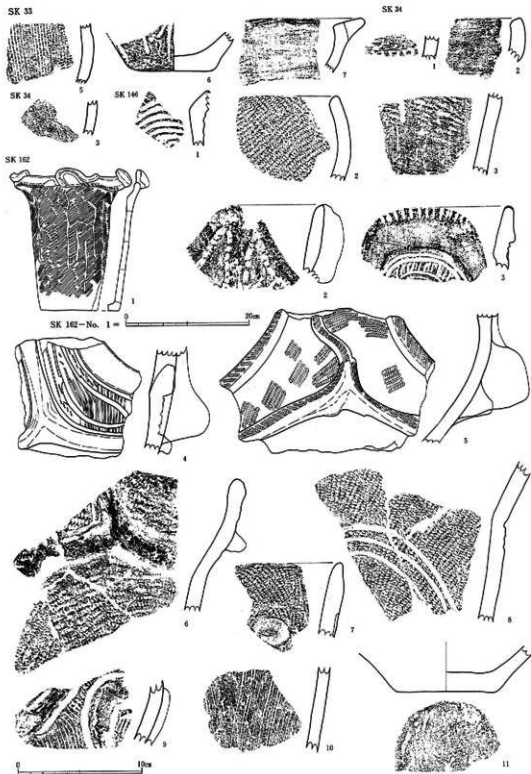
B-8グリッドに位置する。円形を呈し、底面からやや外傾して壁が立ち上がる。径0.22m、深さ0.28mを測る。

第162号土坑

C-8グリッドに位置し、第163号土坑、第164号土坑を切っている。不整形円形を呈するが、これは壁面の崩落によるもので、元来は円形であった可能性がある。底面はほぼ平坦であり、壁は大きく内傾して袋状を示すが、開口部の落下が顕著である。規模は現状で底径2.33m、開口部径2.40m、深さ0.52mを測る。

出土土器（第17図1～11）

1は、口縁部が開く深鉢形土器である。口縁部は隆帯によって二重口縁を作出し、さらに隆帯による横位の「S」字文が4単位施される。二重口縁の外縁から胴部全面にRLの縦位回転による単節斜縄文を施し、一部に縦位の磨消しが加えられる。2は、波状口縁をもつ土器の波頂部の破片。外面中央に縦位の隆帯を付し、隆帯の両側及び、口縁縁辺に角押文を施す。3は、扇状把手の端部の破片である。頂部には、刻目が施され、外面には半截竹管による沈線文が施される。4は、波状口縁を有する深鉢形土器の口縁部の破片。口縁部文様帯の上下は、隆帯で区画され文様帯下端的隆帯より波頂部へむけて隆帯がのびる。文様帯内には、条線を地文として施したのちに、不規則な沈



第17图 第33号·34号·146号·162号土坑出土土器

線が施される。5は、波状口縁を有する深鉢形土器の口縁部～頸部の破片である。口縁部文様帯下端は、波状をなす隆帯で画し、そこから把手にむけて蛇行する隆帯が付される。隆帯上及び、文様帯内にはLRの縄文が施される。6は、波状口縁を有する深鉢形土器の口縁部～胴部の破片である。文様帯下端は隆帯で画され、波頂部下では上方へ向けて派生して「H」字形をなす。文様帯内、頸部、胴部ともRL斜位の縄文が施される。7は、頂部が方形をなす扇状把手の破片である。RL横位の縄文が施され中央部に凹部がもうけられる。8は、胴部片である。RL縦位の縄文を地文とし、3本一組の沈線が施される。9は、口縁部片である。隆帯により渦巻文を付し、条線を充填する。10は、胴部の破片である。縦位の条線が施され、内面には縦位の研磨が加えられる。11は、底部片であり、底面の約半を欠く。底面に網代痕が残る。

第163号土坑

C-8グリッドに位置し、第162号土坑に切られている。大半が失われているが、楕円形を呈するものと考えられる。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかな曲線を描いて立ち上がる。深さ0.12mを測る。

第164号土坑

C-7、C-8グリッドに位置し、第162号土坑に切られている。切りあいにより平面形は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかな曲線をもって立ち上がる。第163号土坑と一連の遺構である可能性がある。深さは0.11mを測る。

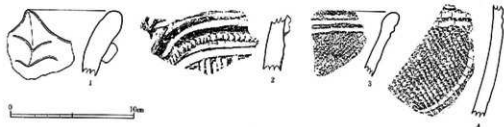
第179号土坑

C-8グリッドに位置し、三辺のふくらんだ三角形を呈する。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。径0.54m、深さ0.44mを測る。

出土土器（第18図1～4）

1は、波状口縁を有する土器の波頂部の破片。波頂は鋭角をなし、波頂下にV字形の隆帯が付される。2は、口縁部片。背面に沈線をもつ隆帯が弧状に付されて区画をなし、隆帯の内側に沿って角押文が施される。区画内には太い沈線に囲まれて縦位の沈線が施される。3は口縁部片。RL縦位の縄文を地文とし、口縁直下には二条の平行沈線がまわされる。4は、胴部片。LR縦位の縄文を地文とし、横位もしくは曲線的な結節沈線文が施される。

SK 179



第18図 第179号土坑出土土器

・第5地区（第19・20図）

本地区は調査区中央部北側のA-6, A-7, A-8, B-6, B-7, B-8グリッドに位置し、北側は調査区外となる。本地区に記載する遺構は土坑18基である。

第36号土坑

A-8グリッドに位置し、第37号土坑と開口部を接しているが前後関係は不明である。円形を呈し、平坦な底面から壁がやや外傾気味に立ち上がり開口部付近で垂直となる。長径0.54m, 短径0.48m, 深さ0.54mを測る。

第37号土坑

A-8グリッドに位置し、第36号土坑と接し、第38号土坑を切っている。楕円形を呈し、底面は平坦で、壁はやや外傾しつつ立ち上がる。長径0.64m, 短径0.50m, 深さ0.21mを測る。

第38号土坑

A-8グリッドに位置し、第37号土坑に切られ、小ピットを切っている。不整な円形を呈し、底面は平坦であるが傾斜をもち、壁の立ち上がり角度は一様でない。長径1.01m, 短径0.90m, 深さ0.19mを測る。

第39号土坑

A-7グリッドに位置し、第40号土坑を切っている。楕円形で、底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長径0.80m, 短径0.64m, 深さ0.16mを測る。

第40号土坑

A-7グリッドに位置し、第39号土坑に切られている。ほぼ円形を呈するものと思われ、底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。径0.44m, 深さ0.12mを測る。

第41号土坑

A-7グリッドに位置し、四辺のふくらんだ隅丸長方形の平面形をもつ。底面は平坦で小ピットを1個有し、壁はやや外傾する。長径1.09m, 短径0.92m, 深さ0.12mを測る。

出土土器（第21図1-3）

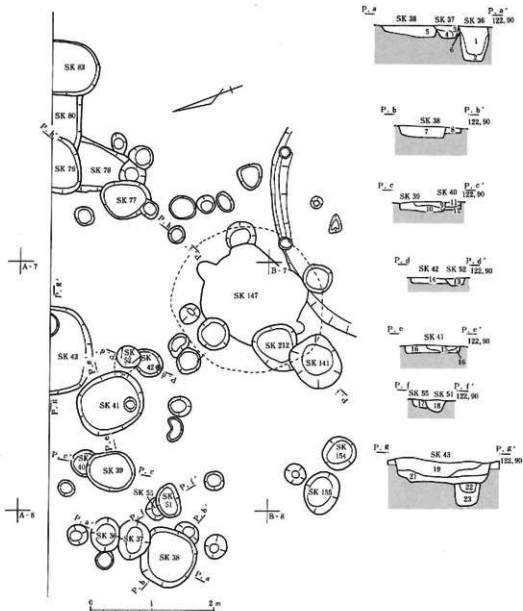
1は、口縁部片。口縁部内外面にそれぞれ稜が認められる。2は、口縁部片。口唇部に隆帯が貼りつけられ、内面はうすくおり返されている。3は、キザミを加えた微隆帯及び沈線の施された破片である。

第42号土坑

A-7グリッドに位置し、第52号土坑に切られている。楕円形を呈するものと思われ、底面は平坦で小ピット1個を有し、壁は垂直に立ち上がる。径0.42m, 深さ0.09を測る。

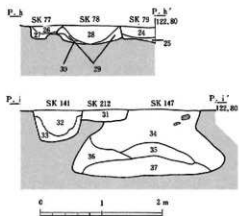
第43号土坑

A-7グリッドに位置し、調査区外にまたがっている。そのため全体は把握できないが、楕円形を呈するものと思われる。底面はやや起伏を有し、壁は垂直に立ち上がる。底面に小ピットを有するが、本土坑に先行するものである。長径1.42m, 深さ0.28mを測る。



1. 赤褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)
2. 赤褐色土 (ローム粒多量含む)
3. 茶褐色土 (ローム粒・腐炭屑少量含む)
4. 暗炭褐色土 (ローム粒多量含む)
5. 炭褐色土 (ローム粒多量含む)
6. 暗炭褐色土 (ローム粒・炭化物粒含む)
7. 炭褐色土 (ローム粒多量含む)
8. 暗炭褐色土 (ローム粒多量含む)
9. 炭褐色土 (ローム粒多量含む)
10. 炭褐色土 (ローム粒多量含む)
11. 赤褐色土 (ローム粒・砂粒少量含む)
12. 暗炭褐色土 (ローム粒多量含む)
13. 赤褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)
14. 炭褐色土 (ローム粒多量含む)
15. 茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)
16. 暗炭褐色土 (ローム粒・ローム目多量含む)
17. 茶褐色土 (ローム粒・腐炭屑少量含む)
18. 暗炭褐色土 (ローム粒多量含む)
19. 黒褐色土
20. 暗炭褐色土 (ローム粒多量・炭化物粒少量含む)
21. 茶褐色土 (ローム粒多量・ローム目少量含む)
22. 赤褐色土 (ローム粒少量含む)
23. 暗炭褐色土 (ローム粒多量・炭化物粒少量含む)

第19図 第5地区 遺構図(1)



第20図 第5地区 遺構図(2)

24. 黒褐色土 (ローム粒・腐葉屑・IP少量含む)
25. 暗黄褐色土 (ローム粒多量・炭化物粒少量含む)
26. 黄褐色土 (ローム粒多量・IP少量含む)
27. 暗黄褐色土 (ローム粒多量・炭化物粒少量含む)
28. 茶褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)
29. 暗茶褐色土 (ローム粒・IP少量含む)
30. 暗黄褐色土 (ローム粒多量・IP少量含む)
31. 黒褐色土 (ローム粒・IP少量含む)
32. 黒褐色土 (ローム粒・IP・KP少量含む)
33. 黄褐色土 (ローム粒・ロームB多量含む)
34. 茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒・IP少量含む)
35. 暗茶褐色土 (ローム粒多量・ロームB少量含む)
36. 暗黄褐色土 (ローム粒多量含む)
37. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)

出土土器 (第21図1～5)

1は、口縁部文様帯が隆帯とそれに沿う幅広の凹線によって区画された土器で、胴部には磨り消し縄文手法による感垂文が施されている。2は、口縁部片。口唇部無文帯下に凹線を巡らした土器である。3は、口縁部片。沈線に区画された中にはRL横位回転による縄文が施されている。4は、胴部片。単節RLの横位回転により縄文の施された土器で沈線も認められる。5は地文に単節RL横位回転による縄文が施された土器で横位に沈線が施される。

第51号土坑

A-7グリッドに位置し、第55号土坑を切っている。不整な楕円形を呈し、底面は傾斜しており、壁との境界が明瞭でない。長径0.55m、短径0.38m、深さ0.10mを測る。

第52号土坑

A-7グリッドに位置し、第42号土坑を切っている。円形を呈し、開口部から底面まで斜めに掘りこまれている。開口部径0.41m、深さ0.40mを測る。

第55号土坑

A-7、A-8グリッドに位置し、第51号土坑に切られている。そのため平面形は明確にし難い。底面は傾斜しており、壁は外傾する。

第77号土坑

A-6グリッドに位置し、第78号土坑、小ピットを切っている。不整円形を呈し、底面は凹面をなし、壁はやや外傾して立ち上がる。長径0.82m、短径0.62m、深さ0.10mを測る。

第78号土坑

A-6グリッドに位置し、第77号土坑、第79号土坑、第80号土坑および小ピットによって切られており、平面形は明確にし難い。底面はやや凹面をなし、壁は垂直に立ち上がる。現存最大径0.87m、深さ0.30mを測る。

出土土器 (第21図1)

1は、小形の土器の口縁部片で縄文を地文とし、弧状の隆帯上およびそれに沿って角押文が施されている。

第79号土坑

A-6グリッドに位置し、第78号土坑、第80号土坑を切っている。不整な円形を呈するものと思われ、底面は起伏が多く、壁は外傾して立ち上がる。径0.94m、深さ0.31mを測る。

出土土器（第21図1・2）

1は、口縁部片。やや幅広の沈線が横位に施されている。2は、口縁部片。

第141号土坑

B-7グリッドに位置し、第212号土坑を切っている。開口部は不整形、底面は円形を呈し、壁面はやや外傾して立ち上がる。長径0.84m、短径0.72m、深さ0.80mを測る。

第147号土坑

A-7、B-7グリッドに位置し、第1号住居跡を切り、第212号土坑、小ピットに切られている。開口部は崩落によって不整形をなすが、底面は円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、壁は大きく内傾して袋状をなし、開口部付近で直立もしくはやや外傾する。底径2.42m、深さ1.08mを測る。

出土土器（第21図1～11）

1は、波頂部の破片であり、隆帯上には縄文が施され、隆帯端部には細い沈線が施されている。2は、口縁部片。口縁上部に交互刺突文が施されている。3は、深鉢形土器片であり、隆帯とそれに沿う沈線により渦巻文が施され、横長の区画文を基調として文様が構成されている。地文はRL縦位回転による縄文が施されている。4は、胴部片。縄文地に沈線によってモチーフを施した土器である。5は、胴部片。やや太めの沈線が横位及び波状に施されている。6は、胴部片。地文はRLの燃糸文が施され、縦位及び横位に沈線が施される。7は、胴部片。地文はLRの燃糸文である。8は、胴部片。磨り消し縄文による懸垂文が施されている。9は、地文に楕円状の条線が波状に施された破片である。10は、底部片。11は、浅鉢形土器の口縁部片である。

第154号土坑

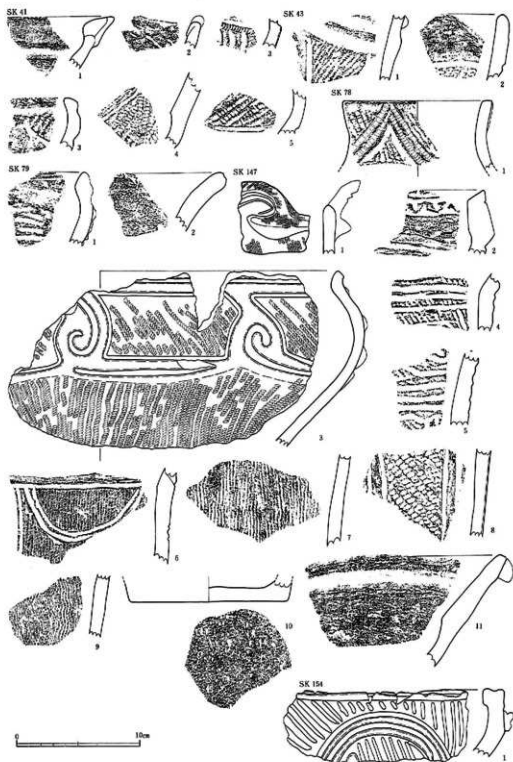
B-7グリッドに位置する。円形をなし、底面はイチジク形を呈する。底面は平坦で壁は直立する。径0.54m、深さ0.22mを測る。

出土土器（第21図1）

1は、口縁部片で、沈線により背を割られた隆帯とその下に巡る1条の沈線により口縁部文様帯が区画され、地文は縦位の短沈線が施される。口縁部上端はゆるく窪み、口縁部内面は少しおり返される。

第155号土坑

B-7グリッドに位置し、楕円形を呈する。底面は平坦で壁はほぼ直立するが西側の傾斜が緩い。長径0.70m、短径0.56m、深さ0.47mを測る。



第21图 第41号·43号·78号·79号·147号·154号土坑出土土器

第212号土坑

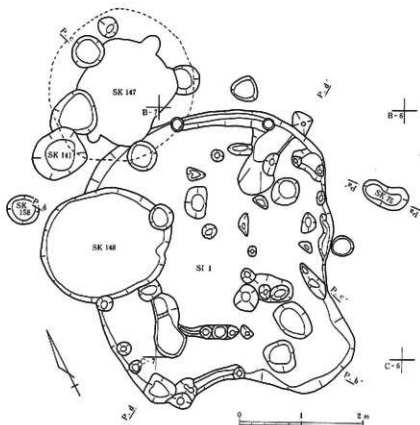
A-7, B-7に位置し, 第141号土坑に切られ, 第147号土坑を切っている。不整形形を呈し, 壁はやや外傾して立ち上がる。径0.82m, 深さ0.37mを測る。

・第6地区(第22・23図)

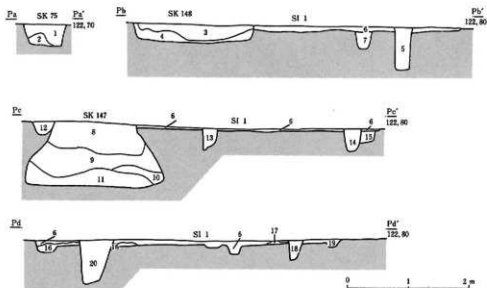
本地区は調査区中央部のB-6グリッドを中心にA-5, A-6, B-7, C-6, C-7各グリッドにまたがっている。本地区において記載する遺構は住居跡1軒, 土坑3基である。

第1号住居跡

B-6, B-7, C-6, C-7グリッドに位置し, 第147号土坑, 第148号土坑に切られている。不整形形の平面プランをもち, 南東側に突出部をもっている。床面は平坦であり軟弱でまわりがない。壁の立ち上がりはわずか3-6cm確認されたにすぎず, 壁の状況は明確でない。周溝は南部および北部のごく一部で検出された。住居跡内には柱穴が39個検出されたが, 住居跡に伴わないものが多い。なお炉跡は確認することができなかった。



第22図 第6地区 遺構図(1)



- | | | |
|-----------------------------|---------------------------------|-----------------------------|
| 1. 茶褐色土 (ローム粒・IP 少量含む) | 7. 黄褐色土 (ローム粒多量含む) | 13. 黄褐色土 (ローム粒多量含む) |
| 2. 黄褐色土 (ローム粒多量含む) | 8. 茶褐色土 (ローム粒多量・ロームB少量含む) | 14. 明新褐色土 (ローム粒多量・IP 少量含む) |
| 3. 茶褐色土 (ローム粒・ロームB・IP 少量含む) | 9. 明新褐色土 (ローム粒多量・ロームB・炭化物粒少量含む) | 15. 黄褐色土 (ローム粒多量・IP 少量含む) |
| 4. 明新褐色土 (ローム粒多量・ロームB少量含む) | 10. 黄褐色土 | 16. 暗黄褐色土 (ローム粒多量含む) |
| 5. 黄褐色土 (ローム粒・IP 少量含む) | 11. 暗黄褐色土 (ローム粒多量含む) | 17. 明新褐色土 (ローム粒少量含む) |
| 6. 暗新褐色土 (ローム粒・IP・炭化物粒少量含む) | 12. 黄褐色土 (IP 少量含む) | 18. 暗新褐色土 (ローム粒少量含む) |
| | | 19. 暗新褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む) |
| | | 20. 明新褐色土 (ローム粒多量・炭化物粒少量含む) |

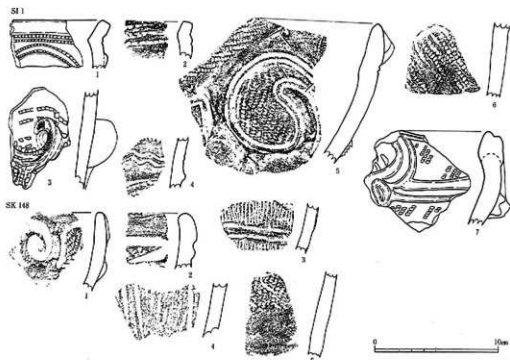
第23図 第6地区 遺構図(2)

出土土器 (第24図1～7)

1は口縁部片。隆帯が付され、口縁直下及び隆帯に沿って半截竹管による角押文が施される。2は口縁部片。ほぼ口縁に沿うように3条の押し引き文が施される。3は胴部片。隆帯が付され、隆帯から派生するような形で中央の凹凸円盤状の突起を有する。隆帯上及び隆帯に沿って角押文が施される。4は胴部片。断面三角形の隆帯が付され、それに沿う半截竹管による角押文が施される。また横位の2条の蛇行沈線も施される。5は波状口縁を有する深鉢形土器の破片である。RLの縄文が口唇部では横位に、また、口縁部文様帯内では縦位に施され、隆帯による渦巻文が懸垂する。6は胴部片。7は波状口縁を有する深鉢形土器の口縁部片である。背面に沈線を有する隆帯を横位に巡らし、波頂部下には結節がもうけられる。波頂部から結節へむけて、逆C字状の隆帯が垂下する。口縁部文様帯及び頸部にはRL縦位回転による縄文が施される。

第75号土坑

B-6グリッドに位置する。ヒョウタン形の平面プランを持ち、底面はやや起伏を有し、壁は外傾しつつ立ち上がる。長形0.76m、短径0.33m、深さ0.36mを測る。



第24図 第1号住居跡・148号土坑出土土器

第148号土坑

B-7グリッドに位置し、第1号住居跡を切っている。東側がややゆがむ楕円形を呈し、底面はほぼ平坦で壁は少し内湾気味に直立する。長形2.14m、短径1.75m、深さ0.32mを測る。

出土土器（第24図1-5）

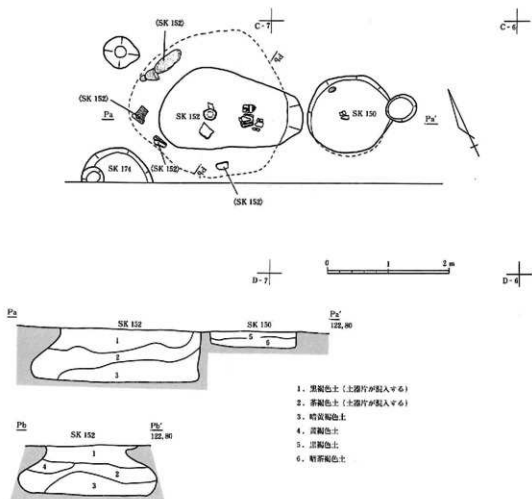
1は口縁部片。口縁部文様帯の上下を隆帯で区画し、文様帯内には隆帯による渦巻文を施しLR横位の縄文を充填する。2は口縁部片。沈線によって区画を施し区画内にLR縦位の縄文を施している。3は胴部片。縦位の条線を地文とし、横位の浅い沈線が2条巡る。4は胴部片。沈線による懸垂文が施される。5は胴部片。LR横位の縄文が施され、結節部の回転圧痕がみられる。

第158号土坑

B-7グリッドに位置している。円形を呈し、平坦な底面からほぼ垂直に壁が立ち上がる。長径0.52m、短径0.45m、深さ0.36mを測る。

・第7地区（第25図）

本地区は調査区中央部南側のC-6、C-7グリッドに位置し、南側は調査区外となる。本地区において記載する遺構は土坑3基である。



第25図 第7地区 遺構図

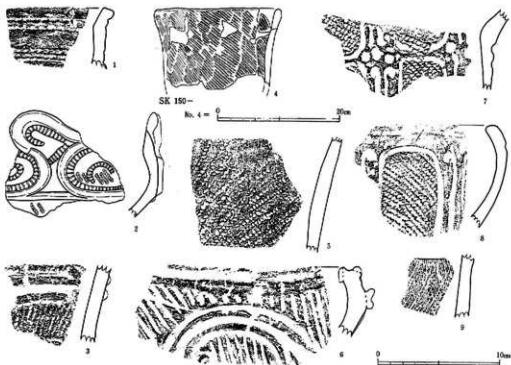
第150号土坑

C-6 グリッドに位置し、小ピットに切られている。円形を呈し、底面はほぼ平坦で、壁は直立もしくは若干オーバーハングして立ち上がる。遺物はいずれも底面から浮いた状態で出土した。径1.40m、深さ0.26mを測る。

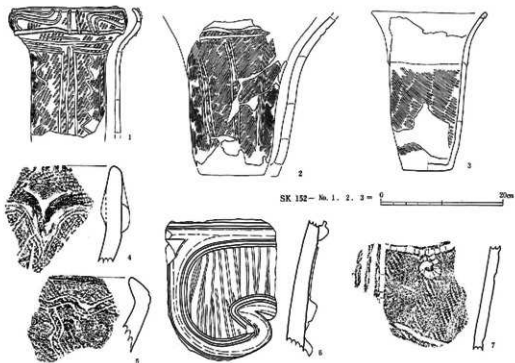
出土土器 (第26図 1-9)

1は口縁部片。複列の角押文が平行に施されている。2は口縁部の破片。1条の隆帯下部には、複列の角押文が施されている。3は胴部片。地文にRL縦位の回転による縄文が施され、2条の隆帯が施される。4は、口縁部の一部及び胴部以下を欠損する小形の深鉢形土器である。色調は、

SK 150



SK 152



第26图 第150号·152号土坑出土土器

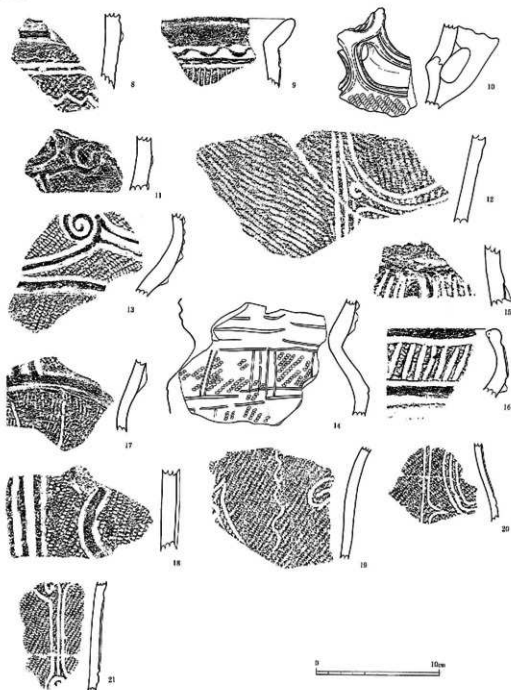
暗褐色を呈し胎土中に砂粒を多量に含む。文様は、地文に無節 LR の縦位回転による縄文が施される。内面は丁寧に磨かれている。5 は、深鉢形土器の胴部片である。RL 縦位回転による縄文が施されている。6 は、口縁部片。口縁部に 1 条の隆帯を巡らして所謂二重口縁を作出し、背を割られた隆帯により、文様帯を画している。地文は、縦位の沈線を地文としている。7 は、単節 LR 縦位の縄文を地文とし、刺突及びわらび状の沈線によってモチーフを施す土器片である。8 は、口縁部片。わらび手文及び沈線により区画された中には、LR 縦位回転による縄文が施され区画外は磨り消されている。9 は、胴部片。櫛歯状工具による条線文が施されている。

第152号土坑

C-6、C-7 グリッドに位置している。開口部は不整な長楕円形を呈するが、崩落による変形が著しい。底面は不整円形を呈し、平坦である。壁の立ち上がりは湾曲しながらオーバーハングし、開口部付近ではほぼ直立する。遺物は大半が底面より 30cm 以上浮いた状態で出土し、一部完形に近い土器が最奥部の底面直上から出土した。開口部長径 2.32m、同短径 1.30m、底面長径 2.56m、同短径 2.32m、深さ 0.86m を測る。

出土土器（第26図 1～7、第27図 8～21）

1 は、深鉢形土器で胴部下半と底部を欠損。口縁部の上は隆帯で区画され、文様帯内は、縦位の 2 条の隆帯を 4 単位配して分割し、それぞれ 2 条の隆帯によるクランク文を施している。頸部は、横位の沈線が断続的に 2～4 条施され、そこから 4 単位の蛇行沈線と 2～3 条の沈線が垂下する。地文は RL の縦位回転による単節斜縄文である。2 は、口縁部の大半と底部を欠損。頸部に 2 条の沈線がまわり、胴部には、2 段 RL 縦位の回転による単節斜縄文を地文として 9 単位の 2 条もしくは、3 条の平行沈線が施される。3 は、口縁部がラップ状に開く小形深鉢形土器で無文部はやや厚く作られ、以下を単節 LR 縦位の縄文を施す。色調は暗褐色を呈し、胎土には小礫を多量に含む。4 は、口縁部片。「V」字状隆帯及びそれに沿う形で細い沈線文が施される。5 は、口縁部片。2 本の沈線が横位及び縦位に波状に描かれている。6 は、胴部片。胴部は、1 条の隆帯によって区画され、この隆帯からクランク状の隆帯が垂下する。7 は、胴部片であり、縄文地に半截竹管による渦巻状沈線及び縦位の沈線が施されている。8 は、地文に LR 横位の縄文が施され、横位の 2 本平行沈線と、波状沈線がみられる。9 は、短く外反する口縁部の無文帯下に交互刺突文を巡らし、以下沈線によってモチーフを施し、空白部に縦位の細沈線を充填する。10 は、口縁部片。中空の箱状把手と考えられる。11 は、縄文地に 2 条の微隆帯が施される。12 は、胴部片。縄文地に沈線により、渦巻文及びわらび手状文が施される。13 は、隆帯により口縁部文様帯が区画され、渦巻文が施される。14 は、小形の土器で縄文地に縦横の沈線が施される。15 は、胴部片。1 条の微隆帯及び縦位の沈線が施される。16 は、地文に縄文が施される。沈線により区画された口縁部文様帯には、斜位の沈線で充填される。17 は、平行する 2 本の隆帯及び、横位の隆帯によって口縁部文様帯が区画され、胴部には縦位の沈線が施される。18 は、縄文地に、隆帯とそれに沿う浅い沈線が施された胴部片である。19 は、胴部片。縄文地に沈線により、蛇行沈線及び渦巻文が描かれ刺突文が伴う。20 は、縄



第27図 第152号土坑出土土器

文地に沈線により渦巻文が施され、剣先文が伴う破片である。21は、胴部片。縄文地に沈線によるわらび手状文が施されている。

第174号土坑

C-7グリッドに位置し、調査区外にまたがっている。そのため全体は明らかにできないが、ほぼ円形を呈するものと思われる。底面は若干の起伏があり、小ピットが一個見られる。径1.14m、深さ0.21mを測る。

・第8地区（第28、29図）

本地区はA-4、A-5、A-6、B-4、B-5、B-6、B-7に位置し、北側は調査区外となる。本地区において記載する遺構は土坑17基である。

第56号土坑

A-6グリッドに位置し、第64号土坑を切っている。円形を呈し、底面は平坦で壁はやや外傾しつつ立ち上がる。径0.66m、深さ0.18mを測る。

出土土器（第30図1-3）

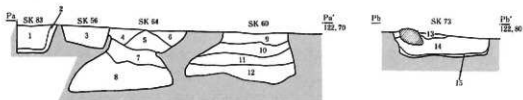
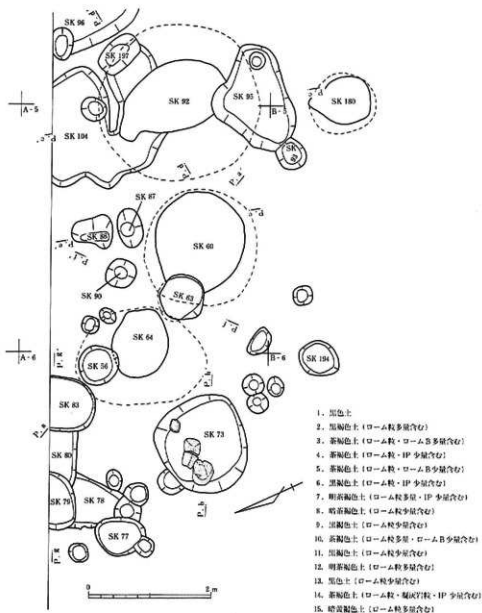
1は、波状口縁を有する深鉢形土器の波頂部の破片である。半截竹管による沈線がめぐり、隆帯の剝離痕が見られる。2は、口縁部片。口縁部文様帯は隆帯により区画文をつくり、隆帯に沿ってキャタピラ文が、区画内には横位の沈線文が施される。3は、波状口縁を有する深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部文様帯の上下は、隆帯で画され、文様帯下端の隆帯は剝離している。口唇部には刻目とRLの縄文が、文様帯内にはRL縦位の縄文を地文として、ほぼ隆帯に沿う沈線が見られる。

第60号土坑

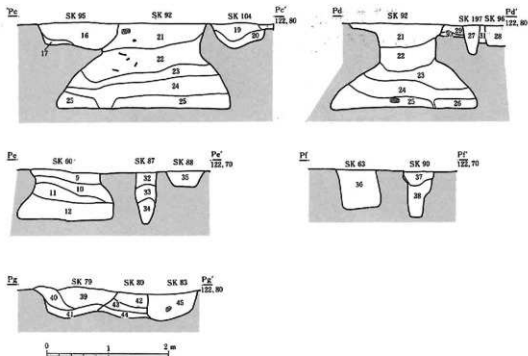
A-5グリッドに位置し、第63号土坑に切られている。円形を呈し、底面は起伏を有し、壁は湾曲しながら強く内傾して立ち上がり開口部付近で直立する。遺物はいずれも底面から30-50cm浮いた状態で出土した。開口部長径1.60m、同短径1.42m、底面長径1.84m、同短径1.78m、深さ0.83mを測る。

出土土器（第30図1-6、第31図7-17、第32図18-23）

1は、波状口縁の深鉢形土器。波頂部下に貫通孔を有する眼鏡状の突起を有し、幅広の刻みを有する。隆帯に沿って半截竹管による平行沈線文が施されている。口縁部の地文はRLの単節斜縄文、頸部にはRLの縦位の単節斜縄文を施している。波頂部は、円盤状を呈したものと思われ、貫通孔の一部が残存している。内面は丁寧に磨かれ、色調は淡橙色を呈している。2は、口縁部~胴部の破片である。口縁部文様帯は隆帯で区画文をつくり、頸部にも隆帯が巡らされる。隆帯に沿ってキャタピラ文が施される。3は、口縁部~胴部の破片である。口縁は大きく肥厚し、外傾する斜面をもち、RL横位の縄文、交互刺突文、刻目が施される。胴部には地文としてRL横位の縄文を施したうえに沈線による渦巻文がみられる。4は、口縁部片。外面に隆帯を付して交互刺突文を施し、隆帯端部には刻目を施す。5は、口縁部半分及び胴部下半を欠損した土器。隆帯とそれに沿う沈線によって口縁部に渦巻文を施し、もう一条の隆帯によって口縁部文様帯を区画している。地文



第28図 第8地区 遺構図(1)



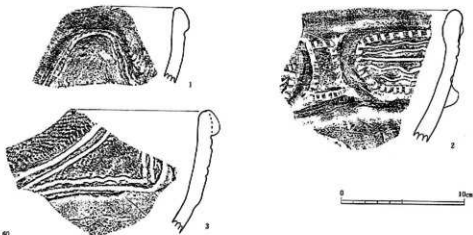
16. 黒褐色土
17. 暗黄褐色土（ローム粒多量含む）
18. 黒色土
19. 茶褐色土（ローム粒・凝灰岩粒・炭化物粒含む）
20. 暗黄褐色土（ローム粒多量・IP少量含む）
21. 暗茶褐色土（ローム粒・IP・SP少量含む）
22. 明茶褐色土（ロームB・炭化物粒・IP・SP少量含む、土器片欠入）
23. 黄褐色土（ローム粒多量含む）
24. 暗茶褐色土（ローム粒・IP・SP多量含む）
25. 暗黄褐色土（ロームB多量含む）
26. 茶褐色土（ロームB多量含む）
27. 茶褐色土（ローム粒・IP少量含む）
28. 黒褐色土
29. 黒褐色土（ローム粒少量含む）
30. 茶褐色土（ローム粒・ロームB少量含む）

31. 暗茶褐色土（ローム粒・IP少量含む）
32. 黒褐色土（ローム粒・ロームB少量含む）
33. 茶褐色土（ローム粒多量・ロームB少量含む）
34. 黒褐色土（ローム粒少量含む）
35. 黒色土
36. 黒褐色土（ローム粒・IP・SP少量含む）
37. 黒褐色土（ローム粒少量含む）
38. 明茶褐色土（ローム粒多量含む）
39. 黒褐色土（ローム粒・凝灰岩粒・IP少量含む）
40. 茶褐色土（ローム粒多量・IP・炭化物粒少量含む）
41. 暗黄褐色土（ローム粒多量・炭化物粒少量含む）
42. 暗茶褐色土（ローム粒・炭化物粒少量含む）
43. 黄褐色土（ローム粒多量含む）
44. 暗茶褐色土（ローム粒多量・炭化物粒少量含む）
45. 暗茶褐色土（ローム粒多量・凝灰岩粒・炭化物粒少量含む）

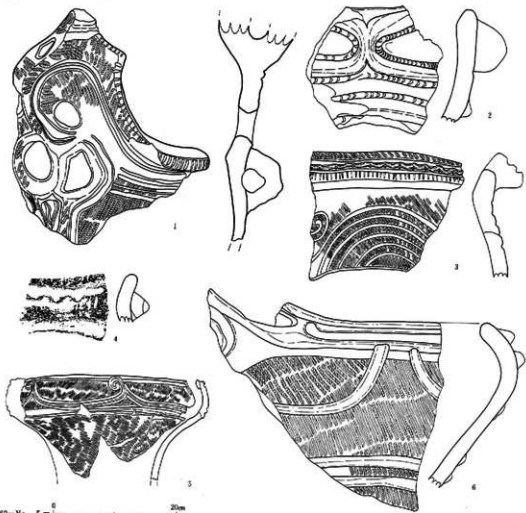
第29図 第8地区 遺構図(2)

は口縁部がLR単節の横位回転によるもので、胴部はLR単節の縦位回転により縄文が施される。内面は、口縁部付近で横方向の研磨が施されている。口唇部には内側に貼り付けがなされ口唇頂部には浅い溝ができる。6は、波状口縁を有する深鉢形土器の破片。口縁部は2本の隆帯をめぐらして隆帯間に沈線を施し隆帯から派生するように波状口縁を付す。口縁部文様帯は下端を2本の隆帯で画す。全面にRL横位の縄文が施される。7は、口縁部片。口縁部文様帯は上下を隆帯で画し、さらに中位の隆帯をもって上下二段に分割している。各隆帯間を上下に結ぶ縦位の隆帯によって区画文をつくり、上・中位の隆帯から立ち上がるように、三脚を有して頂部が渦巻状を呈する把手が

SK 55



SK 60



SK 60-No. 5 = 20cm

第30图 第56号·60号土坑出土土器

付される。地文として RL 横位の縄文が施される。8 は、深鉢形土器の破片。口縁部文様帯下端は隆帯で画し、文様帯内は RL 斜位を地文とし、隆帯による文様が施される。無文帯を介して、RL 縦位を地文として横位の平行沈線が施される。9 は、口縁部片。口縁部は隆帯を付し、沈線による渦巻文が施される。胴部には縦位の隆帯が 2 本付される。10 は、胴部片。RL 縦位の縄文を地文とし 3 条一組の沈線文が施されている。11 は把手の破片。側面に沈線が施され、渦巻文が施されている。12 は口縁部文様帯から頸部にかけての破片。全面に RL 縦位の縄文が施され、剣先文が見られる。13 は、深鉢形土器の口縁部片。RL 横位の縄文を地文とし、渦巻文のある円盤状の突起より派生するような形で 2 本一對の隆帯が付される。14 は、口縁部片。口唇部近くに横位の沈線を 2 本巡らし、口縁部下端には、2 本の隆帯を貼付する。上方の隆帯は対向するわらび状をなす。RL 横位の縄文を地文とする。15 は、口縁部片。隆帯とそれに沿う沈線により、口縁部文様帯を区画し、渦巻文を配する。RL 縦位の縄文を地文とする。16 は、深鉢形土器の口縁部片。口縁部文様帯は、隆帯とそれに沿う沈線によって区画される。地文は、LR 縦位縄文が施される。17 は、波状口縁の波頂部の破片。隆帯と沈線によって渦巻文がつくられる。地文として RL 縦位の縄文が施される。18 は、波状口縁の波頂部の破片。頂部は、肥厚し沈線による渦巻文が施される。19 は、波状口縁の波頂部の破片。頂部は隆帯による渦巻文が付され、そこから隆帯による懸垂文が垂下する。文様帯には、RL 斜位の縄文が充填される。20 は、深鉢形土器の口縁部片。文様帯の上下は隆帯で画し、文様帯内には RL 横位の縄文を地文として、隆帯とそれに伴う沈線によって剣先文の付く渦巻文が横位に展開する。復元口径は、44.5cm。21 は、口縁部片。無文で、2ヶ所穿孔されている。22 は、口縁部片。幅広の沈線が回り、2ヶ所に穿孔されている。朱彩の痕跡がみとめられる。23 は、深鉢形土器の口縁部片。口縁部文様帯の上下を隆帯で区画し、背面に幅広の沈線を有する隆帯によって渦巻文、一条の隆帯による区画文、各隆帯の側縁には巾広の沈線が施され、縦位の沈線が充填されている。

第63号土坑

A-5 グリッドに位置し、第60号土坑・第64号土坑を切っている。不整形を呈し、底面は平坦であるがやや傾斜し、壁は垂直もしくは若干オーバーハング気味に立ち上がる。径0.74m、深さ0.70mを測る。

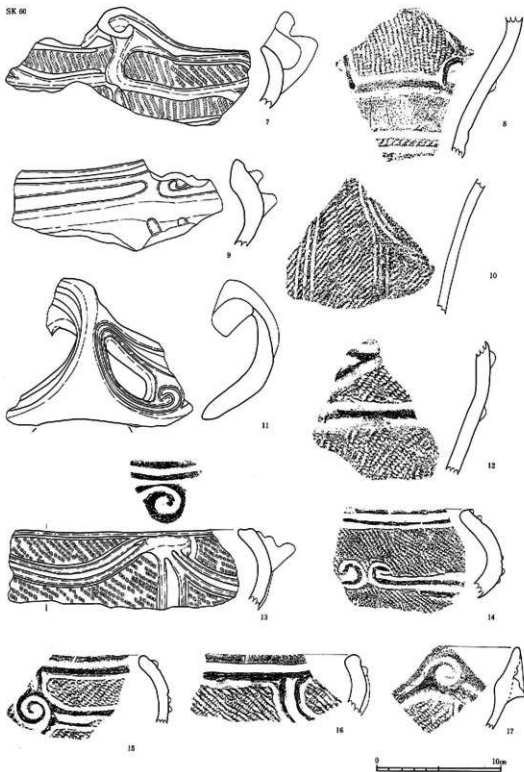
第64号土坑

A-5・A-6 グリッドにまたがっており、第56号土坑・第63号土坑に切られている。開口部、底面ともに不整形を呈し、底面は平坦で、壁は大きく内傾して立ち上がり袋状となる。遺物は底面直上から出土した完形土器（第32図1）を除いて、いずれも底面から30cm以上浮いた状態で出土した。開口部長径1.08m、同短径0.90m、底面長径2.10m、同短径1.56m、深さ1.01mを測る。

出土土器（第32図1・2、第33図3～10）

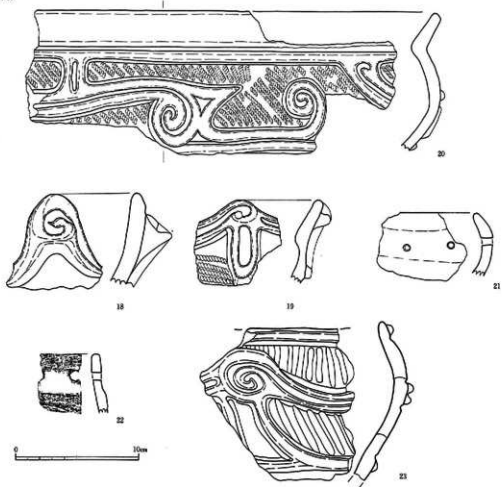
1 は、波状口縁を有する深鉢形土器であり、波頂部を 2ヶ所とも欠損する。口縁部文様帯は上下を隆帯によって区画され、縦位の対をなす隆帯により 3 区に分割され、文様帯内及び、隆帯上には複

SK 60



第31图 第60号土坑出土土器

SK 60



SK 64



第32图 第60号·64号土坑出土土器

列の角押文が施文される。胴部には背部を押圧された「U」字形の隆帯が3ヶ所に貼付されており、刻目が施されている。またその「U」字形の隆帯を連続するように平行沈線で区画された横位の帯状の文様があり、縦位の条線が充填されている。また一方の波頂部下には、3条のキャタピラ文が施される。2は、扇状の把手を有する深鉢形土器の破片である。把手の区画内には隆帯による大きな渦巻文、口縁部には区画文を施し、区画内には半截竹管による爪形文を施文する。口縁部文様帯の下限は隆帯によって画する。3は、口縁部片である。隆帯によって楕円区画文を作り、区画内には隆帯に沿うように半截竹管による押し引き文及び横位の蛇行する平行沈線が施される。4は、波状口縁を有する土器の口縁部片である。口縁部文様帯は隆帯によって楕円区画文をなし、区画内は隆帯に沿うようにキャタピラ文を施す。5は、波頂部の口縁部片である。口唇部分が折り返され、半截竹管による角押文が施されている。6は、口縁部～胴部の破片である。口縁部直下には押圧が加えられる横位の隆帯が付され、口縁部文様帯内は隆帯によって上下三段の沈線状の文様により、区画文を施す。胴部はLR縦位の縄文が施される。7は、口縁部片である。口縁直下に沈線をめぐらし、押圧が加えられた隆帯が付される。地文はLR縦位の縄文。8は、胴部片。LR縦位の縄文を地文とし、押圧が加えられた横位の隆帯、その隆帯に沿う爪形文及び、横位の沈線が施される。9は、胴部片。LR縦位の縄文を地文とし、押し引きによる沈線文が施される。10は、波状口縁を有する浅鉢形土器の破片。無文で口縁部及び、内面に赤彩の痕跡が認められる。

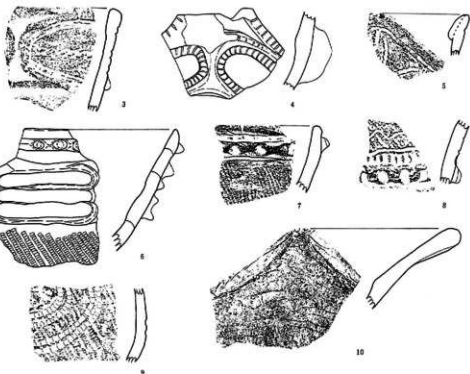
第73号土坑

A-6グリッドに位置し、小ピットを切っている。不整形円形を呈し、底面は起伏を有し、壁はやや外傾して立ち上がる。埋土中に礫を含む。長径1.60m、短径1.41m、深さ0.37mを測る。

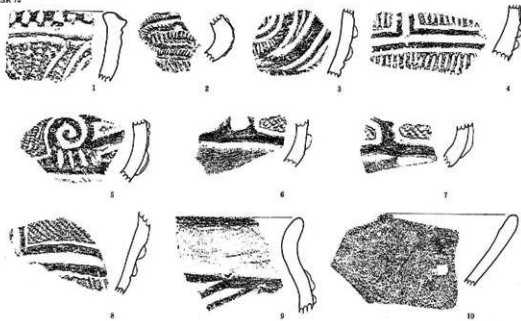
出土土器（第33図1～10）

1は、口縁部片。口縁部直下に隆帯が付され。口唇部及び隆帯上に押圧が加えられる。胴部は角押文を地文として沈線が施される。2は、隆帯によって区画文が施され、刺突文がみられる。3は、胴部片。隆帯と沈線で複弧文を形成し、隆帯上には刻目が施される。4は、口縁部片。隆帯によって区画文を作り、縦位の弧線を充填する。5は、口縁部文様帯の破片。隆帯と沈線により渦巻文を作り、RL縦位の縄文が施される。6は、口縁部文様帯～頸部の破片である。区画文と渦巻文を交互に配し、区画内には、LR隆帯の縄文が充填される。7は、口縁部～頸部の破片。口縁部文様帯は隆帯によって区画文が作られ、区画内にはLR縦位の縄文が施される。8は、胴部片で、RL横位の縄文が施され、2本一組の隆帯が施される。9は、口縁部片。口縁直下は無文帯となり、その下に隆帯による文様が施される。10は、波状口縁の波頂部の破片である。無文で内面には、粗い横位の研磨が施される。

SK 64



SK 73



第33图 第64号·73号土坑出土土器



第80号土坑

A-6グリッドに位置し、第79号土坑、第83号土坑に切られている。調査区外にまたがっているため規模、形状は明確にし難い。深さ0.30mを測る。

第83号土坑

A-6グリッドに位置し、第80号土坑を切っている。調査区外にまたがっているが、楕円形を呈するものと思われる。底面は中央がくぼむ鍋底状をなし、壁は垂直に立ち上がる。短径0.87m、深さ0.22mを測る。

第87号土坑

A-5グリッドに位置している。楕円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長径0.84m、短径0.40m、深さ1.14mを測る。

第88号土坑

A-5グリッドに位置し、ヒョウタン形の平面形をもつ。底面は平坦で壁はやや外傾しつつ立ち上がる。長径0.67m、短径0.41m、深さ0.28mを測る。

第90号土坑

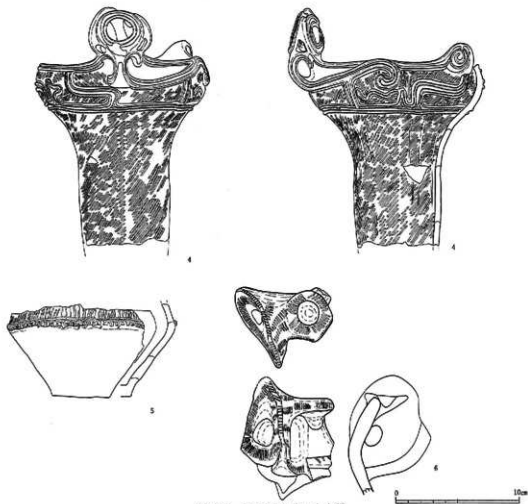
A-5グリッドに位置し、ゆがんだ隅丸方形を呈する。壁は垂直に近く立ち上がる。長径0.52m、短径0.47m、深さ0.74mを測る。

第92号土坑

A-4、A-5グリッドに位置し、第95号土坑に切れ、第104号土坑を切っている。開口部は崩落が著しいが、底面はほぼ円形を呈する。底面は平坦で固く、壁はやや曲線を描きながら、急角度で内傾し、開口部付近ではほぼ直立する。遺物は一部の完形土器（第34図-3）等を除いて底面から0.5～1m程度浮いた状態で出土している。

出土土器（第34図1-6・第35図7-19・第36図20-23）

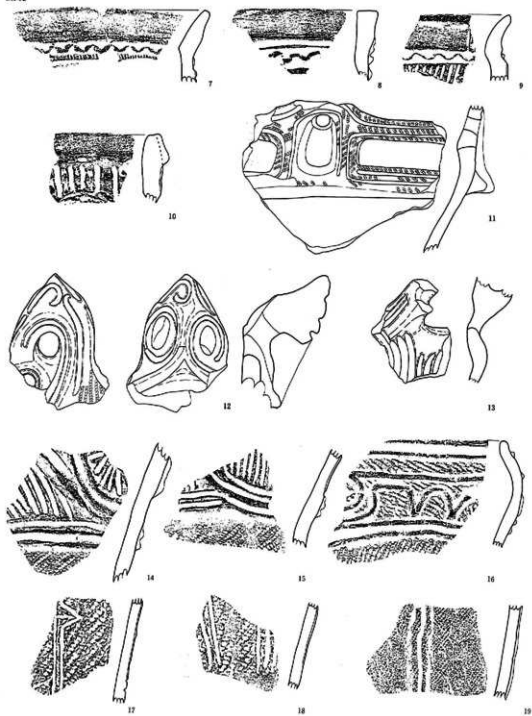
1は、口縁部文様帯が4単位の波状をなし、波頂部下に中央の窪む円盤状把手を付するとともに、隆帯によって口縁部と頸部、胴部の文様帯を区別している。隆帯上には縄文を付すが、区画内については磨り消されている。頸部から胴部については単節RL縦位の縄文が施されるだけの素文帯となっている。胎土に多量の白色不透明粒子及び金雲母片を含み、色調はにぶい橙色を呈している。口径25.5cm、最大径34.5cmを測る。2は、扇状の把手を有する深鉢形土器の波頂部の破片である。口縁部文様帯は上下を隆帯によって区画され、とくに下端の隆帯は高く、背面に沈線が施されている。隆帯から派生するように縦位の橋状把手が付され、波頂部は平らで両端には中空の円筒状の把手を作出しており、橋状把手の直上に穿孔がなされている。区画内には半截竹管による刺突文が施され、隆帯上には刻目が見られる。円筒状の把手の側面には角押文、頂部には沈線による渦巻文が施される。胴部にはRL縦位の単節斜縄文が施される。色調は赤褐色～黒褐色を呈する。器高（現存）12.3cm。3は、口縁部に中空把手が1つ付された深鉢形土器である。口縁部文様帯は、隆帯によって区画され沈線文が施されている。頸部は3本の沈線で区画され、その間に波状線文が描かれて



第34图 第92号土坑出土土器

いる。胴部には単節 LR 縦位の縄文が施され指頭による磨り消しもみられる。また、1条の蛇行沈線及び2条の沈線を1単位とした5単位の懸垂文を施している。色調は橙色を呈し、口径19cm、器高32.7cm、底径10cm、最大径が25cmである。4は、口縁部に隆帯を巡らして、所謂二重口縁を形成し、口縁部文様帯の下端を2条の隆帯で画している。口縁部文様帯には、2条の隆帯によって横「S」字状の渦巻文を1個、クランク文を4個配すとともに3個の剣先文を施している。口縁部には、中空の把手を配し、その反対側には、橋状の把手が配されている。口縁部内面は、隆帯を付けることによって稜が作り出されている。地文は、口縁部の一部を除き、RLの縦位回転による単節斜縄文で、胴部には縦位の指頭による磨り消しが施されている。内面は丁寧に磨かれ、色調はにぶい褐色を呈する。5は、口縁部が内傾する鉢形になると思われる土器であり、口縁部を欠損する。最大径部に隆帯が巡らされ、隆帯上には連続して押圧が加えられる。また、隆帯の直上には断続的に1条の沈線が巡る。口縁部には3～8mmの間隔で縦位の棒状の沈線が施される。内面は横位の研磨が施されている。色調は淡褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。器高(現存)14.8cm、最大径23.8cm、底径9.2cmである。6は立体的な把手の破片である。口縁に直交するように耳状の把手を付し、貫通孔を穿つ。その肩に中央の凹む円盤状の把手を水平に付している。把手には刻目が施される。7は、口縁部片。無文帯の口縁部下に交互刺突文と刻目を巡らしている。8は、口縁部片。無文帯を有しその下には横位の沈線と交互刺突文により文様を配する。9は、口縁部片。無文帯の下に交互刺突文さらに縦位の棒状沈線が見られる。10は、口縁部片。無文帯の口縁部下に縦位の沈線が施される。11は低い波状口縁を有する土器の口縁部～胴部片である。文様帯の上下は隆帯で画され、区画文を作る。隆帯上には2条の沈線が施されRLの縄文がつけられる。12は、外面1孔、内面に2孔の貫通孔を有する立体的な把手である。内外面も沈線によって渦巻文が配される。口縁部にはRL縦位の縄文が施される。13は、口縁部片。沈線が施される橋状把手が付され、沈線による複弧文が施されている。14は、深鉢形土器の頸部の破片である。文様帯下端は背面に沈線を有する隆帯で画し、文様帯内は同様の隆帯を付したのち、沈線を充填する。胴部にはLR縦位の縄文を施す。15は、深鉢形土器の頸部の破片である。口縁部文様帯は2条の沈線を施された隆帯を付し、縦位の沈線を充填する。胴部にはRL縦位の縄文を施す。16は、口縁部片。口縁部文様帯は背を割られた隆帯によって画され、区画内には、隆帯により剣先文、渦巻文を施す。17は、胴部片。RL縦位の縄文を地文とし、縦位の沈線が施文される。沈線には山形の屈曲がもうけられる。18は、底部に近い胴部破片である。LR縦位の縄文を地文とし、2～3条を1単位とする沈線が垂下する。底部近くは無文となり横位の研磨が施される。19は、胴部片である。背面に沈線を有する隆帯を縦位に付し、RL縦位の縄文が施される。20は、地文に、RL縦位の単節斜縄文が施され、3本一対の平行沈線文と、蛇行する沈線文が垂下する。21は、胴部片。LR・RLの縦位回転による羽状縄文が施される。22は、鉢形土器の破片。無文で最大径部にはつば状に隆帯を付し、最大径部より上位には横位に、下位には縦位に研磨を施す。23は、浅鉢形土器の口縁部片。無文で口縁部外面は隆帯状を呈し、内面に稜を有する。

SK 92



第35图 第92号土坑出土土器



第93号土坑

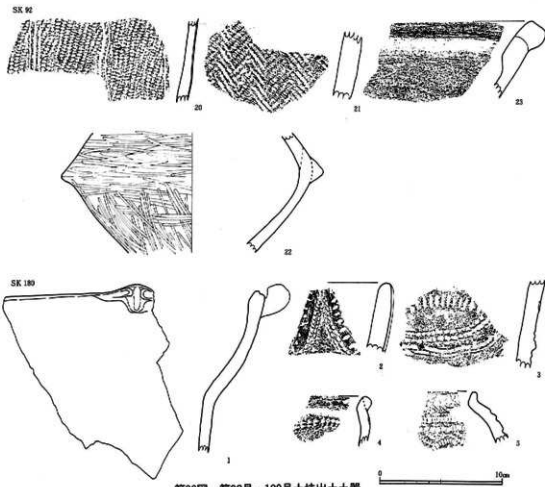
B-5グリッドに位置し、第95号土坑と接しているが切り合い関係は不明である。精円形を呈し、壁はやや外傾しながら立ち上がる。径0.45m、深さ0.32mを測る。

第95号土坑

A-4, A-5, B-4, B-5グリッドにまたがり、第93号土坑と接し、第92号土坑を切っている。不整形形を呈し、底面は起伏が多く、壁面は外傾する。底面に小ピットを1個有する。長径1.34m、短径1.20m、深さ0.37mを測る。

第104号土坑

A-4, A-5グリッドに位置し、第92号土坑、第197号土坑に切られている。きわめて不整な勾玉状の平面形をもつが、本来の形状とは思われない。底面は凹凸が多く、壁の立ち上がりも明瞭



第36図 第92号・180号土坑出土土器

ではない。深さ0.32mを測る。

第180号土坑

B-4、B-5グリッドに位置している。開口部の一部に崩落が見られるが、本来は開口部、底面とも円形を呈するものと思われる。底面は平坦であり、壁はゆるやかに湾曲しながら内傾し、開口部ではほぼ直立して、小形ながらも袋状を呈する。径1.08m、深さ0.69mを測る。

出土土器（第36図1-5）

1は、口縁部～胴部の破片。口縁部に、両側に押圧が加えられたこぶ状の突起が付され、胴部は無文である。2は、波状口縁の波頂部の破片。縁辺には刻目が、縁辺に沿うように半截竹管による角押文が施される。3は、胴部片である。刻目および半截竹管による角押文、平行沈線文が施される。4は、口縁部片である。口唇部に隆帯を付し、口縁直下には刻目が施される。5は、口縁部片。LR縦位の縄文が施され、押し引きによる横位の直線および蛇行する沈線、渦巻文が施される。

第194号土坑

B-5、B-6グリッドにまたがっている。不整な円形を呈し、底面は平坦で壁はやや外傾する。径0.70m、深さ0.22mを測る。

第197号土坑

A-4グリッドに位置し、第104号土坑を切っている。長方形を呈し、壁はやや外傾する。長径0.73m、短径0.46mを測る。

・第9地区

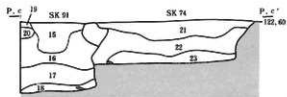
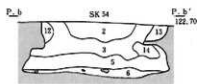
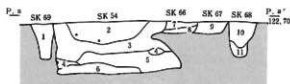
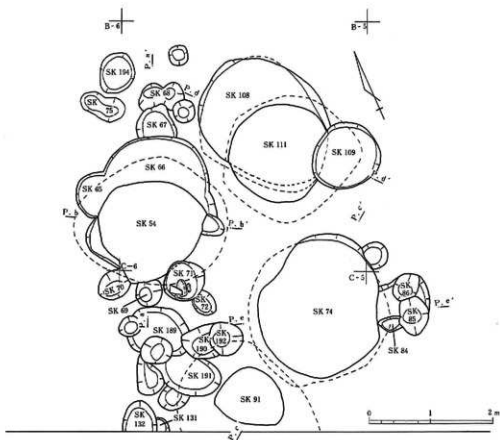
本地区はB-5、C-5を中心にB-3、B-4、B-6、C-6グリッドに及んでおり、南側は調査区外となる。本地区において記載する遺構は土坑23基である。

第54号土坑

B-5、B-6グリッドに位置し、第65号土坑、第66号土坑、第69号土坑、第70号土坑を切っており、第71号土坑に切られている。開口部は崩落が著しく不定形をなし、底面はやや不整な円形を呈す。底面はやや起伏を有し、壁は崩壊が顕著であるが、本来は急角度で内傾しやや湾曲しつつ立ち上がって開口部付近ではほぼ直立する形状であったと見られる。遺物は大半が底面から0.4m以上浮いた状態で出土している。底面長径2.50m、同短径2.04m、深さ0.81mを測る。

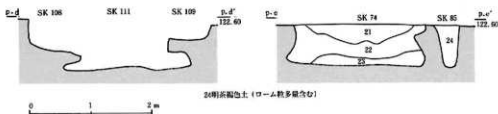
出土土器（第39図1-14）

1は、鉢形土器。胴部の大半を欠損する。口縁部と胴部は「く」の字状に折れ、外面につば状の隆帯が付され、一部に大きな押圧が加えられる。口縁部には沈線による四角形状の区画を作り、その中には両端が渦状となる上下一対の沈線文を施す。口唇部には棒状工具による交互刺突が行われる。内面には横位の粗い研磨が施される。色調は淡褐色を呈し、胎土は金雲母を含む。器高（現存）15.1cmである。2は、口縁部片。中空状の把手をもち、隆帯及びそれに沿う沈線によって主要文様が描れる土器で、口唇部は内面に折り返しがみられる。3は、口縁部片。口縁部文様帯は隆帯によ



- | | | |
|------------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 1. 赤褐色土 (ローム粒少量含む) | 9. 黄褐色土 (ロームB・ローム粒多量含む) | 17. 明茶褐色土 (ローム粒多量含む) |
| 2. 赤褐色土 (ローム粒・炭化物少量含む) | 10. 茶褐色土 (ローム多量含む) | 18. 茶褐色土 |
| 3. 赤褐色土 (ローム粒・IP少量含む、土器片を含む) | 11. 明褐色土 (ローム粒多量含む) | 19. 黒褐色土 |
| 4. 赤褐色土 (焼土多量含む) | 12. 明茶褐色土 (ロームB・ローム粒多量含む) | 20. 茶褐色土 |
| 5. 黄褐色土 (ローム粒多量含む、炭化物少量含む) | 13. 明茶褐色土 (ローム粒多量含む) | 21. 黒褐色土 |
| 6. 暗茶褐色土 (ローム粒少量含む) | 14. 黒色土 | 22. 明茶褐色土 (ローム粒・ロームB多量含む) |
| 7. 赤褐色土 (ローム粒・IP含む) | 15. 黒褐色土 (ローム粒・炭化物少量含む) | 23. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む) |
| 8. 黄褐色土 (ローム粒多量含む) | 16. 茶褐色土 (ローム粒・炭化物少量含む) | |

第37図 第9地区 遺構図(1)



第38図 第9地区 遺構図(2)

て画され、区画内には背を割られた隆帯により渦巻文が施される。口唇部にも隆帯による渦巻文が貼付される。4は、口縁部片。口縁部文様帯は隆帯によって画され、区画内には渦巻文、区画文とそれに沿う形の沈線文が施される。5は、口縁部片。口縁部は隆帯の貼付けによって所謂二重口縁を呈し、縄文地に隆帯によって渦巻文を施している。6は、口縁部片。縄文地に、隆帯及びそれに沿う沈線によって横位にモチーフを展開される。7は、口縁部片。口縁部に隆帯を貼付し、所謂二重口縁を作り出し、縄文地に2条の貼付け隆帯を施してモチーフを展開させている。8は、口縁部片。口縁部文様帯は隆帯によって画され、区画内には、縄文が施された後に斜位の平行沈線文が施される。9は、胴部片。隆帯によって区画文が施され、区画内には縄文地に縦位の沈線が認められる。10は、胴部片。隆帯およびそれに沿う沈線により文様が施される。11は、頸部片。地文にRL縦位の縄文が施され、浅く幅の広い沈線により渦巻文が描かれている。12は、胴部片。縄文地に2本の沈線により渦巻文が施される。13は、胴部片。縄文地に3本の沈線により文様が施されている。14は、胴部片。縄文地に蛇行沈線および平行沈線が垂下する。

第65号土坑

B-6グリッドに位置し、第54号土坑に切られ、第66号とは接しているが前後関係は不明である。切りあいによって形状は大きく失われているが、ほぼ円形を呈するものと思われ、底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。深さ0.17mを測る。

第66号土坑

B-5、B-6グリッドに位置し、第54号土坑に切られている。切り合いにより全体の形状は不明だが、円形を呈するものと見られ、底面はなだらかな起伏を有し、壁は垂直に立ち上がる。深さ0.23mを測る。

第67号土坑

B-5グリッドに位置し、第66号土坑によって切られている。不整な楕円形を呈し、底面はなだらかな起伏を有し、壁はやや外傾しつつ立ち上がる。深さ0.21mを測る。

第68号土坑

B-5グリッドに位置し、小ビットに切られ、第67号土坑と接しているが前後関係は不明である。ヒョウタン形の平面形を有し、底面は平坦で壁は垂直に近く立ち上がるが一部に段を有する。長径

0.74m, 短径0.26m, 深さ0.57mを測る。

第69号土坑

C-5グリッドに位置し, 第54号土坑に切られている。円形を呈し, 壁は外傾する。径0.44m, 深さ0.58mを測る。

第70号土坑

C-5, C-6グリッドに位置し, 第54号土坑によって切られている。紡錘形を呈し, 短径0.44m, 深さ0.62mを測る。

第71号土坑

B-5, C-5グリッドに位置し, 第54号土坑, 第72号土坑を切っている。不整形円形を呈し, 底面は鍋底状で, 壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。径0.70m, 深さ0.19mを測る。

出土土器(第40図1)

1は, 口縁部から胴部にかけての破片で, 縄文地に沈線により菱形状のモチーフが施されている。

第72号土坑

C-5グリッドに位置し, 第71号土坑に切られている。楕円形を呈し, 長径は不明だが, 短径0.34m, 深さ0.23mを測る。

出土土器(第40図1)

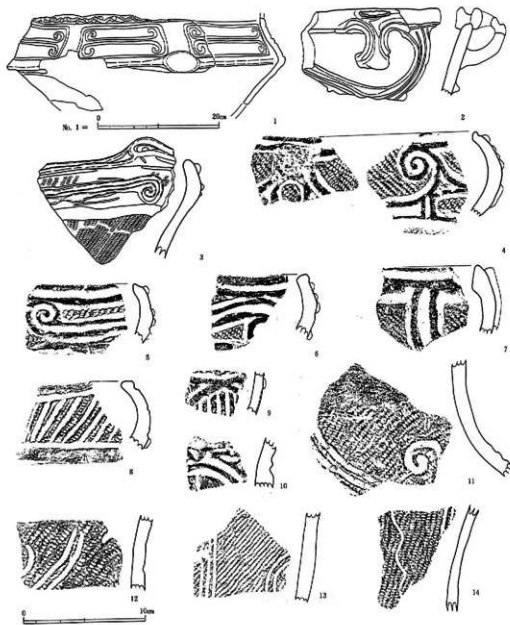
1は胴部片である。

第74号土坑

C-5グリッドに位置し, ほぼ円形を呈する。長径2.20m, 短径1.90m, 深さ0.70mを測る。底面は平坦で, 第91号土坑の壁に切られる。

出土土器(第40図1~7・第41図8~15)

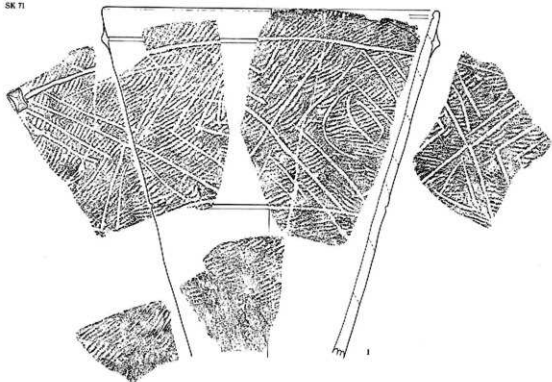
1は, 波状口縁を有する深鉢形土器片である。隆帯とそれに沿う複列の角押文が施されている。2は, 口縁部片。隆帯上にキザミが加えられ, 区画内部には沈線が施されている。3は, 口縁部片。縄文の施された隆帯およびそれに沿う沈線により文様帯が区画され, 区画内には波状の沈線が施されている。4は, 円盤状の把手で, 中央の楕円形の窪み部分および外面全面に縄文が施され, 窪み部分には斜位の沈線が施されている。5は, キザミの加えられた隆帯及びそれに沿う沈線によって文様帯が区画され, 区画内には沈線及び半截竹管を用いた半円形の文様が施されている。6は, 地文がなく, 横位の波状沈線及び連続的な爪形文が施された土器である。7は, 地文がなく, 縦位に半截竹管による角押文が施された胴部片である。8は, 眼鏡状の把手の貼付された口縁部片であり, 隆帯上には複列の角押文が施されている。9は, 口縁部の破片であり, 横位の「S」字文が貼付されている。10は, 口縁部片。短い口縁部無文帯下に交互刺突文を巡らし, 以下LR縦位回転による縄文が施され一部になでが施される。11は, 口縁部の破片であり, 横位に渦巻状沈線及び円筒状の突起が配されている。12は, 胴部片であり, 縄文地に3条の沈線により, クランク文, 曲折文が施されている。13は, 沈線によって背を割られた波状の隆帯が横位に施され, 縄文地に2条



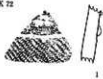
第39図 第54号土坑出土土器

の沈線が波状に施されている。14は、浅鉢形土器の口縁部片であり無文である。15は、浅鉢形土器の口縁部片である。

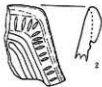
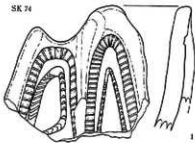
SK 71



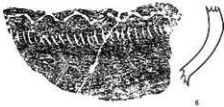
SK 72



SK 74



SK 74



第40图 第71号·72号·74号土坑出土土器

第84号土坑

第74号土坑の東側に接し、やや東西に長いプランを呈する。短径0.24mを測る。

第85号土坑

第74号土坑の東側に位置し、第84号、86号土坑と接する。平面プランは、やや南北に長い円形を呈し、長径0.60m、短径0.48m、深さ0.70mを測る。

出土土器（第41図1～3）

1は、断面三角形を呈する隆帯及びそれに沿う沈線が施された土器片である。2は沈線によって背を割られた隆帯の施された土器片である。3は、胴部片であり、RL縦位の縄文が施されている。

第86号土坑

第85号土坑に接し、やや東西に長い円形を呈する。長径0.50m、短径0.40m、深さ0.76mを測る。

出土土器（第41図1～3）

1は、隆帯間に交互刺突文を巡らし、以下縦位の沈線によってモチーフを施した破片である。2は、隆帯によって区画された中に縦位の沈線が施された破片である。3は、胴部片であり、縄文地に縦位の沈線が施されている。

第91号土坑

C-5グリッド、第74号土坑の西側に位置する。本土坑の南側部分は調査区外であるが、やや南北に長い円形を呈する土坑であると思われる。長径1.10m、短径0.90m、深さ1.10mを測る。底面はほぼ平坦である。

出土土器（第41図1～8）

1は、隆帯によって渦巻文が施された土器で、隆帯下部には角押文が施されている。2は、無文地に、横位の細い波状沈線が施された土器片である。3は、短い口縁部無文帯下に交互刺突文を巡らし、以下、LR縦位回転の縄文が施された後、なで調整が施された破片である。4は、縄文地に横位の波状沈線及び沈線が施された土器である。5は、縄文地に沈線を施した土器である。6は、口縁部に1条の隆帯を張りつけることにより二重口縁を作り出し、隆帯下部に原体圧痕を有している。7は、縄文地に、縦位の沈線が施された土器である。8は、胴部片であり、沈線が施されている。

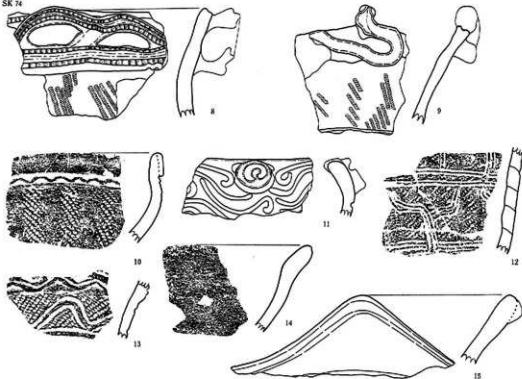
第108号土坑

B-5グリッドに位置し、第111号土坑に切られているため、正確な形状等は不明であるが、残存短径1.10m、長径1.90m、深さ0.54mを測り、北側の壁は垂直に立ち上がる。

出土土器（第42図1～15）

1は、口縁部片。口唇端部に2条の角押文及び爪形文が横位に施されている。2は、波状口縁の波頂部に押圧が施され、頸部には横位の角押文が施された土器片である。3は、刻みの施された微隆帯によって文様帯が区画され、区画内には条線の施された土器片である。4は、刻みをもった隆帯及びそれに沿う沈線により区画された土器片で、区画内には円形の窪み及び角押文が認められる。

SK 74



SK 85



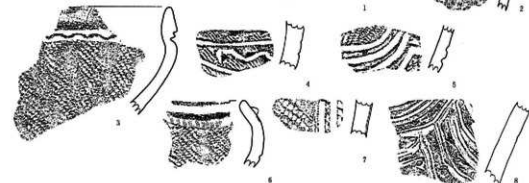
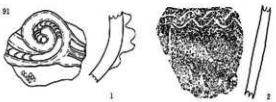
SK 86



SK 86



SK 91



第41图 第74号·85号·86号·91号土坑出土土器

5は、扇状把手部分で、隆帯及びそれに沿う2本の沈線により、口縁部文様帯が区画され区画内には波状の沈線が施される。6は、口縁部片。隆帯及び沈線により、口縁部文様帯を区画し、区画内及び隆帯上には条線が充填される。7は、口縁部無文帯の下に隆帯を巡らした土器で、貫通孔が認められる。8は、キザミをもった隆帯が渦巻状に施された口縁部片で胴部には羽状縄文が施されている。9は、胴部片であり、横位の隆帯及び沈線により画され、縦位の条線が施されている。10は、胴部片であり、縄文地に縦位の細い沈線が施されている。11は、胴部片。縄文地に、背を割られた微隆帯が垂下する。12は、胴部片。縦位の条線を地文とし、3本の沈線が垂下している。13は、羽状縄文の施された土器である。14は、胴部片であり、縦位に燃糸文が施されている。15は、浅鉢形土器の口縁部片であり、無文である。

第109号土坑

B-5グリッドに位置し、平面形は円形を呈する。径1.04m、深さ0.29mを測る。切り合いは本土坑が第111号土坑を切る形で検出されている。

出土土器（第42図1・2）

1は、縄文地に縦位の沈線が施された土器である。2は、深鉢形土器の胴部下位から底部にかけての破片である。縄文地に縦位の3条の沈線が施され、底部周縁は磨り消されている。

第111号土坑

B-5グリッドに位置し、本土坑が第108号土坑を切り、第109号土坑に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、径1.50m、深さ0.39mを測る。

出土土器（第42図1・2）

1は、2条の隆帯により文様帯を区画し、区画内には、LR横位回転による縄文が施されている。2は、浅鉢形土器の胴部下位から底部にかけての破片であり、無文である。

第131号土坑

本地区の南端に位置し、本土坑の西側部分は第132号土坑に切られている。南側は調査区外となるため、形状、規模等は不明であるが、残存部分の深さは、0.13mを測る。

第132号土坑

第131土坑と同じく、調査区の南端に位置し、南側部分は調査区外となるため、形状・規模は不明である。東西径0.54m、深さ0.19mを測り、第131号土坑を切っている。

出土土器（第42図1）

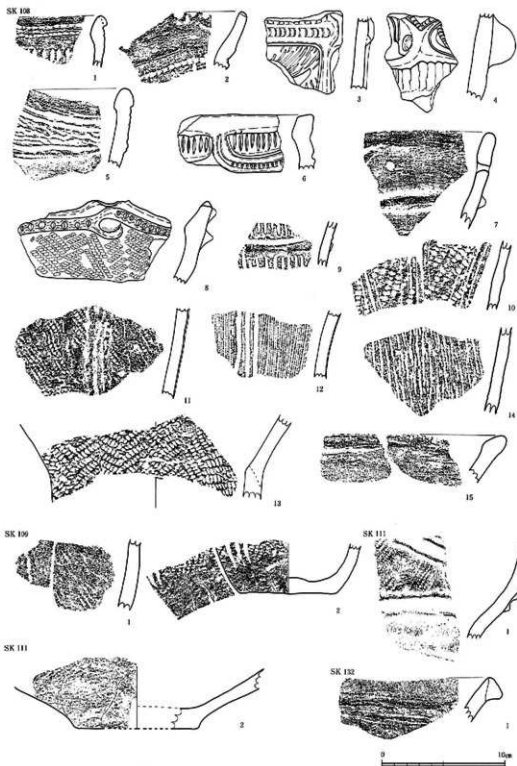
1は、浅鉢形土器の口縁部片である。

第189号土坑

C-6グリッドの東側に位置し、小ピット及び第190号土坑に切られている。やや東西に長い楕円形を呈し、長径1.00m、短径0.72m、深さ0.12mを測る。

第190号土坑

C-5グリッドの西側に位置し、第192号土坑に切られているため、形状は不明である。残存短径



第42图 第108号·109号·111号·132号土坑出土土器

0.50m、深さ0.50mを測る。

第191号土坑

第189号、第190号土坑及び小ピットに切られている。やや東西に長い楕円形を呈し、短径0.64m、深さ0.32mを測る。

第192号土坑

ほぼ円形を呈し、径0.50m、深さ0.94mを測る。第190号土坑を切っている。

・第10地図（第43図）

本地区はA-3、A-4、B-3、B-4グリッドに位置し、北側は調査区外となる。本地区において記載する遺構は土坑14基である。

第96号土坑

A-4グリッドに位置し、調査区外にまたがっている。小ピットに切られ、第125号土坑と接しているが切り合い関係は不明である。平面形は不定形で底面は起伏が多く、壁の傾斜角も一様でない。深さは0.11mを測る。

第101号土坑

A-4グリッドに位置し、第107号土坑、第125号土坑に切られている。不定形を呈し、底面は起伏が多く壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは0.84mを測る。

出土土器（第44図1）

1は、胴部片である。RL横位の縄文が施される。

第102号土坑

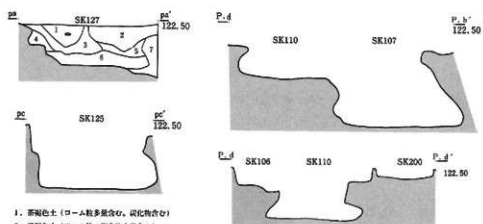
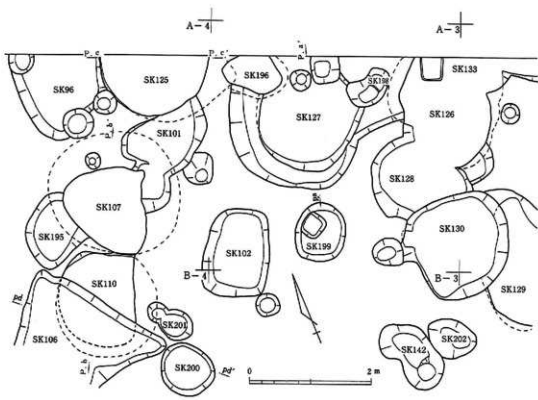
A-3、B-3グリッドに位置し、開丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。長径1.42m、短径1.06m、深さ0.22mを測る。

第107号土坑

A-4グリッドに位置し、第101号土坑、第195号土坑を切っており、第110号土坑との切り合いは微妙であるが第110号土坑が先行するものと思われる。開口部は崩落によって不定形を呈するが、底面はややつぶれた円形をなす。底面は平坦で、壁は急角度かつ直線的に内傾し、開口部付近で直立する。遺物の多くは底面から0.3m以上浮いた状態で出土した。底面長径2.18m、同短径1.98m、深さ0.92mを測る。

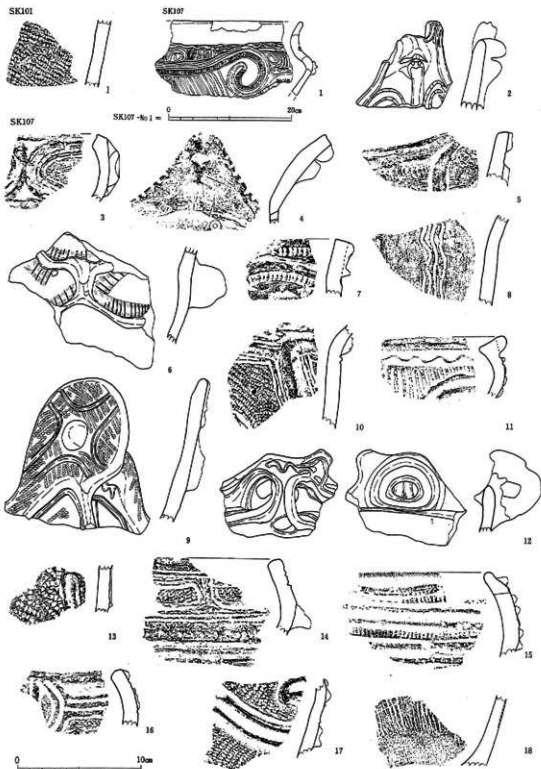
出土土器（第44図1～18、第45図19・20）

1は、口縁部文様帯で「く」の字形に内曲し、口唇部が外湾する深鉢形土器の破片。口縁部文様帯の上端には交互刺突文。背を2条の沈線によって割られた隆帯による渦巻文が作出される。隆帯上には刻目が施され、区画内には渦巻状や、斜位の方向での沈線が充填。2は、波状口縁の破片。隆帯によって区画文を作り、区画内には角押文を施す。波頂部は隆帯の間隙と2個一対の突起で獸頭状の形態となす。3は、口縁部である。隆帯によって区画文が作られ、区画内には隆帯に沿う半



1. 茶褐色土 (ローム粒多量含む, 炭化物含む)
2. 黒褐色土 (ローム粒・炭化物少量含む)
3. 明茶褐色土 (ローム粒多量含む, 炭化物・ロームB少量含む)
4. 茶褐色土 (ローム粒少量・炭化物含む)
5. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・炭化物含む)
6. 灰色土 (ローム粒少量含む, 炭化物含む)
7. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)

第43図 第10地区 遺構図



第44图 第101号·107号土坑出土土器

截竹管による角押文と、横位の沈線が施される。4は、波状口縁の破片である。縁辺に刻目がみられ、頂部には縦位に短い隆帯を施し、深い刻目が加えられる。補修孔が一ヶ所認められる。5は、口縁部片。隆帯による区画文が施され、隆帯に沿ってキャタピラ文がみられる。6は、口縁部一胴部片である。隆帯によって区画文を形成し、隆帯に沿ってキャタピラ文が施される。7は、口縁部片。断面三角形の隆帯が貼付され、隆帯に沿って連続爪形文が施される。8は、胴部片。3～4条の蛇行沈線が垂下する。9は、深鉢形土器の波状口縁の破片。隆帯とそれに沿う半截竹管による沈線によって区画文を施す。頂部には中央が凹凸円盤状把手が貼付され半截竹管による十字形の沈線文を有す。把手及び、隆帯上に RL の縄文が施される。10は、頸部片である。隆帯とそれに沿う平行沈線により、区画文が施され区画内部にも沈線による文様がみられる。地文は LR 縦位の縄文が施される。11は、口縁部片である。口縁部文様帯内には、背面に沈線を有する隆帯によって渦巻文を配したのち縦位の沈線が充填される。12は、口縁部片である。隆帯によって外面3孔、内面1孔をもつ把手が貼付される。貫通孔の周囲には沈線を、把手の縁辺には獣耳状の突起と細い隆帯を配す。13は、胴部片である。LR 縦位の縄文を地文とし、縦位の2条の隆帯とそれに沿い、一部が蛇行するキャタピラ文を有す。14は、口縁部片。口縁部文様帯は沈線によって区画文をつくり、区画内に RL 斜位の縄文を充填する。最大径部には、つば状の隆帯がめぐる。15は、口縁部片。横位の隆帯が貼付され、それに沿う沈線がみられる。隆帯間には縦位に沈線が充填される。16は、口縁部の破片である。LR 縦位の縄文を地文とし、隆帯と沈線によって縦位の紡錘形の文様をあらわす。17は、胴部片である。縄文地に背を割られた隆帯により横位に渦巻状のモチーフが施される。18は、底部に近い胴部破片。一段Rの原体圧痕による縄文が施され、底部近くは無文となる。19は、底部の破片。網代痕がみられる。底径(復元)17.2cm。20は、口縁部片。無文で内面に稜をもつ。

第110号土坑

A-4、B-4グリッドに位置し、第106号土坑に切られている。開口部は崩落がはげしく不定形をなし、底面はほぼ円形を呈する。底面はゆるやかな起伏を有し、壁はまるみを帯びて内傾する。遺物は一部の完形土器(第45図2・4)が底面直上から、その他の土器は若干浮いた状態で出土した。底面径1.66m、深さ0.84mを測る。

出土土器(第45図1～9、第46図10～15)

1は、キャリパー形の深鉢形土器であり、口縁部の約1/4、胴部の約1/2及び、底部を欠損。口唇部と、口縁部下部に隆帯を貼付し、4単位の橋状把手で結んでいる。胴部上半に2段に横位の隆帯、隆帯から弧状及び「Y」字状の隆帯を垂下させ刻目が施文される。2は深鉢形土器の胴部で、胴上部がやや外傾する。口縁部及び、底部の約1/2を欠損。胴上部と下部は隆帯によって、文様帯を区画し、文様帯の上下を隆帯でつないで、楕円区画文を作っている。楕円区画文の数は、上部では、4単位。下部では3単位であり、区画文内には刻目を施す。上下の文様帯間には、波状に隆帯を貼っており、波頭の数は4である。隆帯の両側に刻目を施し、波谷部には原体端部による角押文が施文される。3は、深鉢形土器の破片である。平行する2本の横位の隆帯がめぐりその下に斜行する直

SK107



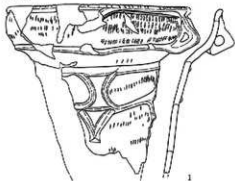
19



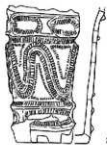
20



SK110



1

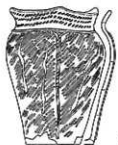


2

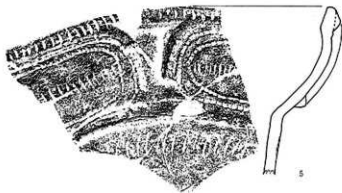


3

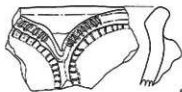
SK110-№1, 2, 3, 4 =



4



5



6



7



8



9



第45图 第107号·110号土坑出土土器

線と渦巻文が隆帯で表現される。ほぼ隆帯に沿って連続刺突文が施される。4は、4単位の小波状口縁を有し、口縁部下がくびれる深鉢形土器である。口縁部には、RLの原体押圧文が横位に3条施され、頸部に低い隆帯が一周し、そこから4単位の「Y」字状の隆帯が垂下する。胴部にはRL縦位の単節斜縄文が施される。内面には横位の研磨が施される。5は、深鉢形土器の口縁部～胴部破片。口縁部文様帯は隆帯によって区画され、区画内には、隆帯に沿うように2本の角押文が横位に、また爪形の刻目が1条横位に施される。なお、口唇外面及び頸部にも同様の刻目が施される。6は、口縁部片である。「Y」字形の隆帯に沿ってキャタピラ文が施される。7は、口縁部片。隆帯による区画文が作られ、区画内には隆帯に沿った刻目と斜位の浅い沈線がみられる。8は、口縁部片。断面三角形の隆帯によって区画文を作り区画内に刻目が施される。9は、底部片。縦位の隆帯と隆帯に沿う4条の沈線が垂下し、横位の角押文がみられる。10は、口縁部～胴部片。口縁部文様帯は隆帯によって区画文を作り、内部は隆帯に沿うように刻目を施す。11は、胴部片。縦位の隆帯が貼付され、押圧が加えられる。12は、鉢形土器の口縁部片。外面は、無文で口唇部に平坦面をもち、内部には複列の角押文が2本施される。13は、口縁部片。口縁部文様帯下端は、2本の角押文で画され、内部には角押による区画文が施される。14は、波状口縁の破片。波頂部には内側を向く2個の取盤状の突起を有し、外面には、沈線による文様を施し口縁直下に刺突文を配する。15は、胴部片である。RL縦位の縄文を地文とし、縦位の蛇行する隆帯が貼付される。

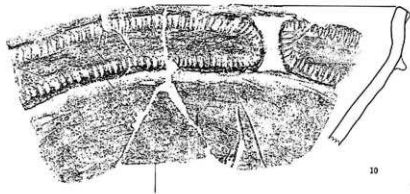
第125号土坑

A-3、A-4グリッドに位置し、調査区外にまたがっている。第101号土坑、第196号土坑を切り、第96号土坑と接している。開口部は崩落がはげしく、底面は東側が突出する円形を呈するものと思われる。壁も剥落しており原状は不明である。遺物は底面から0.2～0.6m浮いた状態で出土した。長径2.22m、深さ0.91mを測る。

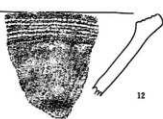
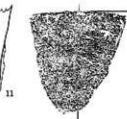
出土土器（第46図1～5、第47図6～17、第48図18～21）

1は、波状口縁を有する深鉢形土器の眼鏡状把手である。波頂部に貫通孔を有し、その下に2段の2個1対の貫通孔をもつ。上段の1対は波頂部の貫通孔に通じている。貫通孔の周囲には、沈線及び刻目による文様が施されている。また波頂部直下から沈線による渦巻文が垂下し、口縁部に沿って交互刺突文が施される。2は、深鉢形土器の破片であり、口縁部・底部の大半と胴部の約1/2を欠損する。口縁部胴部と単節LR縦位の縄文を地文としている。口縁部文様帯は上下を隆帯で区画、2条一単位の隆帯で円形の結節をもつクランク文が施される。胴部には指頭による縦位の磨消しが加えられる。3は、複弧文を有する深鉢形土器である。口縁部の約1/2、胴部下半を欠損する。頸部には3条の平行沈線、口縁部文様帯は隆帯により渦巻文が配され、それに沿って沈線で渦巻文が充填される。胴部文様帯はRL縦位回転による単節斜縄文を地文とし、縦位の3本の沈線と蛇行沈線が交互に4単位配される。4は、2個の把手を有する深鉢形土器であり、波頂部を欠損する。口縁部文様帯は上下を隆帯で画し、隆帯とそれに伴う沈線によって刺先文の付く渦巻文とクランク文が施される。地文はRL縦位の回転による単節斜縄文である。5は、4単位の小波状口縁を有す

SK110



10



11

12

13



14

15

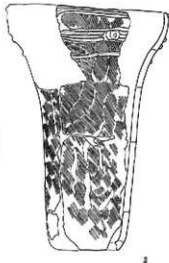
SK125



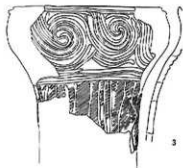
1



4



2



3



5

SK125 - (No. 1. 2. 3. 4. 5)



第46图 第110号·125号土坑出土土器

る深鉢形土器であり、胴部下半と底部を欠損する。口縁部に浅い凹線が一周し胴部には沈線によって「H」字状の区画文を作り、区画文以外にはRLの縦位回転による単節斜縄文が充填される。6は、口縁部片である。口唇部外端には交互刺突文が施され、隆帯によって口縁部文様帯の上下を画す。上下の隆帯をつなぐように橋状把手を付す。隆帯上には沈線と押圧が加えられる。7は、口縁部片である。つば状の隆帯を付し、隆帯上及び、口唇部に刻目をつける。胴部には、横位の沈線を施したのち、縦位の沈線を施す。8は、口縁部片である。文様帯下端にはつば状の隆帯を付し、文様帯内には縦位の湾曲する沈線が施される。口縁直下の隆帯から立ち上がる様に把手が付される。9は、口縁部片。無文帯を有し無文帯下に交互刺突文をめぐらして、口縁部文様帯の上端を画し、文様帯内には、隆帯、刺突文、沈線によって文様を施す。10は、口縁部片である。無文帯を有し、文様帯上端は2本の隆帯で画し、文様帯内には隆帯による文様が施される。11は、口縁部片。隆帯と沈線によって複弧文を作り、隆帯上には刻目が施される。12は、口縁部片である。文様帯上端は1本の隆帯で画し、文様帯内は隆帯と沈線によって、複弧文を作る。隆帯から派生するように橋状把手を付すが欠損している。13は、立体的な把手の破片。外面1孔、内面2孔の貫通孔を有する。縁辺には、刻目が施される。14は、口縁部片。隆帯と沈線によって渦巻文を施し、RL縦位の縄文を充填する。渦巻文には一部剣先文のモチーフが付く。15は、RL縦位の縄文を地文とし沈線による区画文が施される。16は、鉢形土器の破片である。RL縦位の縄文を地文とし、沈線による区画文が施される。17は、口縁部片。RL縦位の縄文を地文として、沈線が施される。18は、胴部片。隆帯が付され、RL縦位の縄文が施される。19は、胴部～底部の破片。2条一対の沈線が垂下し、RLの原体丘痕が施される。20は、鉢形土器の口縁部の破片。肥厚した口唇部に沈線による文様を施し、外面は無文である。内面には稜が見られる。21は、口縁部片である。口唇部は、広い平坦面をなし、外面は無文である。

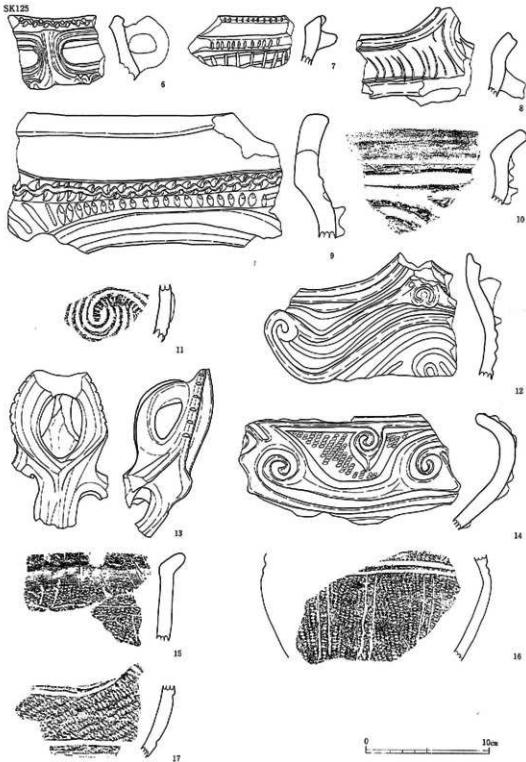
第127号土坑

A-3グリッドに位置し、第196号土坑、第198号土坑および小ピットに切られている。開口部、壁面ともに大きく失われており、現状では底面に段差を有するが本来の形状ではないものと考えられる。遺物はすべて底面から0.2m以上浮いた状態で出土している。深さ0.64mを測る。

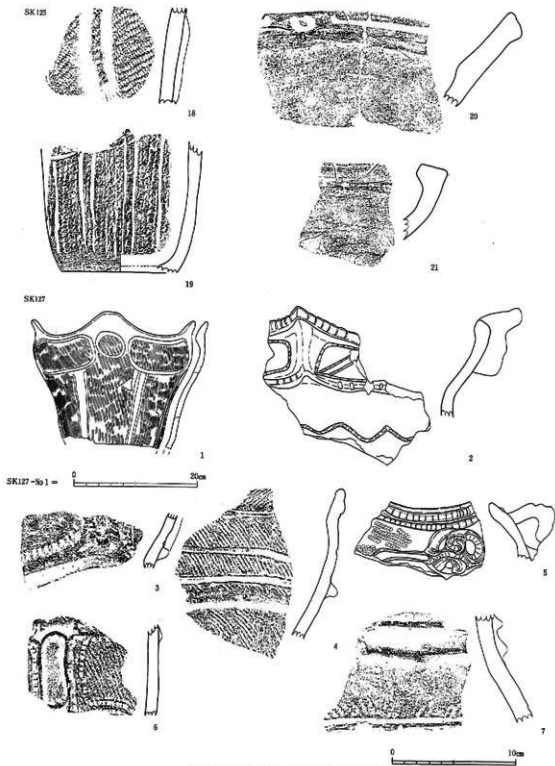
出土土器（第48図1～7、第49図8～20）

1は4単位の小波状口縁を有する深鉢形土器である。胴部下半及び底部を欠損。単節RLの横位の斜縄文を地文とし、波頂部下に沈線による円形区画を置いて、その間には楕円形の区画文、胴部には7単位の平行沈線を垂下させ、平行沈線間は地文を磨消している。2は、口縁部～胴部の破片。隆帯によって区画文をつくり、区画内には隆帯に沿う結節沈線文及び、斜行する半截竹管文が施され、隆帯上には、刻目がつけられる。また胴部にも波状の結節沈線文がみられる。3は、口縁部片である。隆帯によって区画文をつくり、区画内は隆帯に沿ってキャタピラ文を施される。4は、口縁部片である。Lrの縦位回転による無節縄文を地文とし、口縁部文様帯下端は隆帯で画され、横位の沈線が巡る。口唇部はLrの横位回転による無節縄文である。5は、口縁部片である。口縁

SK125



第47图 第125号土坑出土土器



第48图 第125号・127号土坑出土土器

直下に2本のキャタピラ文が回り、LR縦位の縄文を地文とし3孔の貫通孔を有する把手が付され、把手上にもキャタピラ文が施される。6は、胴部片である。断面三角形の微隆帯による区画文が施され、区画内にはLR縦位の縄文の上に、隆帯に沿う結節沈線文が施される。7は、頸部片である。段状に隆帯を付し、胴部はRL縦位、または横位の縄文を地文とし、横位に沈線を巡らす。8は、口縁部片。無文帯を有し背面に沈線を有する大形の隆帯が回り、隆帯下には縦位の沈線を有する。9は、口縁部片。口縁部文様帯上は隆帯で画し、文様帯内にはRL横位の縄文が施される。また上下両面に渦巻文をもつ突起を有する。10は、口縁部片である。隆帯と沈線によって複弧文を施す。11は、口縁部片である。RL縦位の縄文を地文とし、隆帯により区画文をつくる。12は、口縁部片。LR縦位の縄文を地文とし、隆帯による渦巻文が施される。13は、口縁部文様帯はRL横位の縄文を地文とし、隆帯とそれに沿う沈線によって渦巻文が施される。14は、隆帯によって区画文をつくり、区画内にはRL横位の縄文が充填される。15は、胴部片である。RL縦位縄文を地文とし、2本一対の隆帯が横位に巡る。16は胴部片。RL横位の縄文を地文とし、2条一対の沈線が垂下する。17は、胴部片。RL縦位の縄文を地文とし3条一対の沈線が垂下する。18は、胴部片で、RL縦位の縄文が施される。19は、底部の破片である。胴部はLR横位の縄文を地文とし、9単位の2～3条からなる沈線が垂下する。20は、底部の破片。網代痕が、わずかに残る。

第142号土坑

B-3グリッドに位置し、不定形を呈する。底面は段差を有し、壁はやや外傾して立ち上がる。長径1.25m、深さ0.63mを測る。

出土土器（第49図1）

1は、口縁部文様帯に隆帯によって連続した渦巻文を施した中空の把手を付す。隆帯上には、2-4条の角押文が連続して施される。頸部には4条の縦位の沈線文が残る。

第195号土坑

A-4グリッドに位置し、第107号土坑に切られている。切りあいによって原状は大きくこわされているが、楕円形を呈するものと思われる。長径1.23m、深さ0.48mを測る。

第196号土坑

A-3グリッドに位置し、第127号土坑を切り、第125号土坑に切られている。開口部、底面とも不定形をなし、底面は起伏を有し、壁は直線的に内傾する。一部が調査区外にまたがっているが、開口部長径0.97m、深さ0.98mを測る。

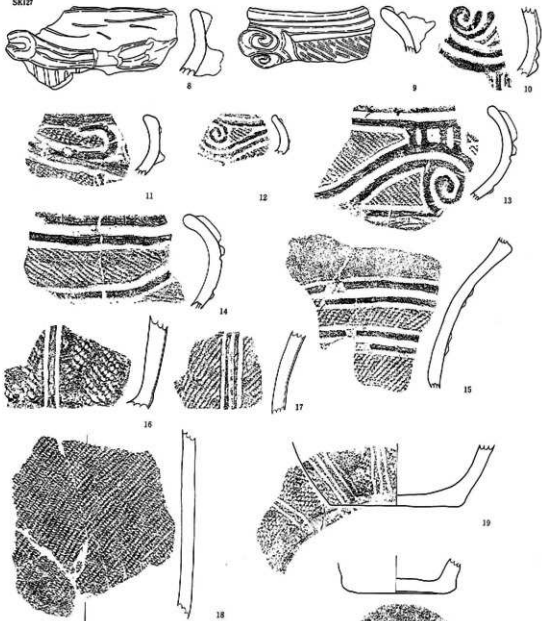
第198号土坑

A-3グリッドに位置し、第127号土坑を切っている。湾曲した楕円形を呈し、底面は段差をもち、壁はやや外傾する。長径0.75m、短径0.41m、深さ0.61mを測る。

第199号土坑

A-3グリッドに位置し、円形を呈する。底面は平坦で小ピットを有し、壁面は直立する。長径0.93m、深さ0.30mを測る。

SK127



SK142



SK142-No1=



0 20cm

第49图 第127号·142号土坑出土土器

第201号土坑

B-4グリッドに位置し、円形を呈する。小ピットと切り合っているが、前後関係は不明である。長径0.48m、深さ0.21mを測る。

第202号土坑

B-2、B-3グリッドに位置し、第142号土坑と接しているが前後関係は不明である。不定形を呈し、長径0.80m、深さ0.28mを測る。

・第11地区（第50回）

本地区はB-3、B-4、C-3、C-4グリッドに位置しており、両側は調査区外となる。本地区において記載する遺構は土坑11基である。その中で特に第118号土坑からは多量の土器の出土を見た。

第105号土坑

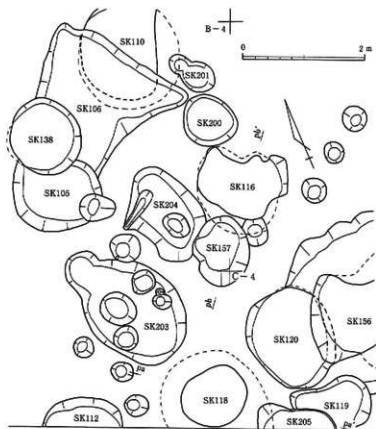
B-4グリッドに位置し、第138号土坑、小ピットによって切られ、第106号土坑を切っている。不整な円形を呈し、底面は若干起伏を有し、壁はなだらかに外傾して立ち上がる。遺物は底面直上から出土している。長径1.43m、深さ0.34mを測る。

出土土器（第51図1～7）

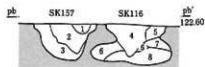
1は、甕形土器の破片である。口縁部には背面に沈線を有する隆帯による区画文、4孔が開く箱状の把手が付され、把手上には渦巻文が施される。LRの単節斜縄文が、口縁部は横位、胴部は縦位に施され、3条の沈線による「唐草文」状の渦巻文を施す。地文には指頭により磨消しが加えられる。2は、口縁部片。口縁部に隆帯によって楕円形区画文を配し、区画内には連続刺突文が施され、隆帯に沿う形で、複列の角押文が横位に、また波状に施されている。3は、頸部片。隆帯によって画された中に半截竹管による角押文が斜位に施されている。4は、頸部片。地文に単節LRの縦位回転による縄文が施され、横位に数本の平行沈線が施される。5は、胴部片。縄文地に沈線により渦巻文が描かれ、渦巻には剣先文が伴う。6は、胴部片。地文には縦位の条線が施され、沈線によりモチーフが描かれている。7は、縄文地に隆帯およびそれに沿う沈線により渦巻状のモチーフが施された土器片である。

第106号土坑

B-4グリッドに位置し、第110号土坑を切り、第105号土坑、第138号土坑に切られている。



1. 赤褐色土 (ローム粒少量・IP含む)
2. 明茶褐色土 (ロームB多量含む)
3. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・炭化物含む)
4. 黒褐色土 (ローム粒・ローム少量含む)
5. 黄褐色土 (ロームB多量含む)
6. 黒褐色土 (ローム粒少量含む)
7. 明茶褐色土 (ローム粒多量・ロームB少量含む)
8. 黒褐色土 (ローム粒少量・IP含む)

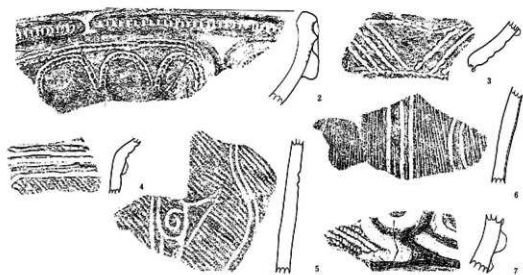


第50図 第11地区 遺構図

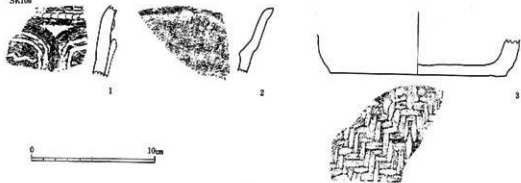
切り合いによって平面形は明確でないが、現状では扇形もしくは台形を呈する。底面は起伏を有し、壁は傾斜が一様ではないがおおむね直立する。遺物は底面より0.10～0.30m程度浮いた状態で確認された。最大幅2.38m、深さ0.34mを測る。出土土器(第51図1～3・第52図4～6)

1は、やや外反する口縁で、横位の楕円形文があり、区画内には縁の2本の角押文が巡り、横位の波状沈線がみられる。2は、外傾する無文を呈する口縁である。3は、底部片。編物圧痕がみられる。4は、胴部片で、地文にRL縦位の縄文を施し縦位の平行沈線と蛇行する沈線が施される。5は、胴部片。地文にLR縦位の縄文が施され、後に縦の指ナデがされている。横位の平行した角押文が施される。6は、口縁部片である。外反する無文を呈する口縁である。

SK105



SK106



第51图 第105号·106号土坑出土土器

第112号土坑

C-4 グリッドに位置し、調査区外にまたがっている。全体の形状・規模は明確でないが、楕円形を呈するものと思われ、現状で径1.26m、深さ0.26mを測る。

出土土器（第52図1～4）

1は、口縁部片。器面は粗い。貼付された平坦面を有する口縁端部に、沈線文と刻目が施される。2は、口縁部片。波状口縁部片である。口唇部には、角ばった原体による押圧が加えられる。口縁に沿って、平行沈線文が施される。3は、外反する無文を呈する口縁部片。外面の器面は粗い。4は、胴部片。地文にLR縦位の縄文の後、縦方向に指ナデされている。逆「く」の字状の沈線が施される。

第116号土坑

B-3、B-4 グリッドに位置する。開口部、底面ともに不定形を呈し、開口部は崩落もあってとくにそれが著しい。底面は起伏をもち、壁は大きく内湾して立ち上がり、開口部付近は外傾する。遺物は底面より0.1～0.2m程度浮いた状態で出土した。長径1.46m、短径1.34m、深さ0.63mを測る。

出土土器（第52図1～4）

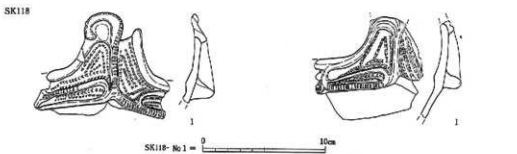
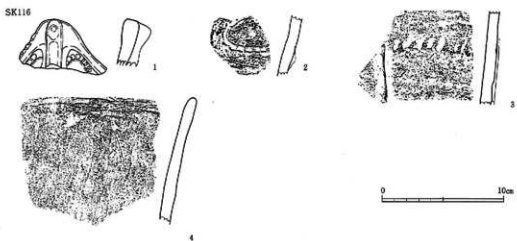
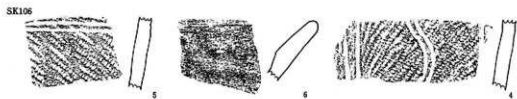
1は、波状口縁部の波頂部片である。口唇部に刻目が施される。波状中央に、端部押圧された隆帯を貼付。隆帯の両側には、角押文が施される。2は、隆帯によって横位の楕円文を有し、区画内には、角押文が1条廻る。3は、胴部片である。縦位に細い粘土紐の隆帯が貼付され、1cm幅位の板状の原体による角押文が横位に施される。4は、深鉢形土器の口縁部片である。直立する無文を呈する口縁。

第118号土坑

C-3、C-4 グリッドに位置し、調査区外にまたがっている。開口部、底面ともやや不整な円形を呈し、底面は平坦で壁は急角度で内傾して立ち上がり、直線的に開口部下にいたったのち直立する。遺物は底面直上からおり重なって多量に出土した。開口部径1.09m、底面径1.90m、深さ1.01mを測る。

出土土器（第52図1～4、第53図5～16、第54図17～21、第55図22～24）

1は、胴状の把手を有する深鉢形土器の破片である。波頂部は中央がくぼむ円盤状をなし、区画内はクランク状の隆帯でさらに分割し、ペン先状工具による角押文を施しており、隆帯の一部には刻目を施す。頸部は鈎状の隆帯で区画している。2は、胴部片である。RL縦位の縄文を地文とし、刻目の施される隆帯と沈線及び、角押文が施される。3は、口縁部片。直線もしくは、波状の沈線を縦位又は、横位に施して区画文を作る。4は、胴部片である。沈線を施し、沈線間には爪形文を充填する。5は、胴部片。隆帯によって逆「U」字状のモチーフをあらわし、縦位の条線を施している。6は、底部の破片である。縦位に隆帯が付され、角押文が垂下する。底面には網代痕がみられる。7は、胴部下半～底部の破片である。胴部はLR縦位の縄文を地文とし、波状に隆帯が貼付



第52图 第106号·112号·116号·118号土坑出土土器

される。8は、口縁部片である。隆帯によって内外面とも渦巻状のモチーフをあらわす。口縁部文様帯下端は、隆帯で画し、胴部にはLR縦位の縄文が施される。9は、深鉢形土器の口縁部から頸部にかけての土器である。口縁部内面には稜を有し、口唇部外面には「S」字状の貼付文が施される。「S」字状の貼付文の下端及び、頸部にあたる部分には角押文が施される。貼付文には、LR横位の縄文が、また頸部にはLR縦位の縄文が施されている。10は、口縁部片。隆帯を貼付し、隆帯上には刻目を、隆帯に沿うように角押文を施している。11は、口縁部片。RLの原体を縦位・横位に回転させて羽状縄文を施す。12は、胴部片。羽状縄文が施される。13は、口縁部片である。口縁部文様帯の上下を隆帯で画し、それを鵜状把手でつないでいる。文様帯内には、縦位の沈線を施す。14は、胴部片である。RL縦位の縄文を地文とし、沈線により渦巻状の文様を施す。15は、胴部片である。RL横位の縄文が施される。16は、RL横位による縄文を地文とし、沈線によって円形文と区画文を施している。17は、口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は内湾しつつ底部へむかってすばまる深鉢形土器である。胴部下半及び、底部を欠損する。口唇部外側の傾斜面には、2条の沈線がめぐり、上方の沈線内には角押文が施される。口唇外端部には、約 $\frac{1}{2}$ 周に指による押圧が、約 $\frac{1}{4}$ 周に刻目が施され、刻目間には刺突が行われる。口唇部直下から胴部全体に縦位の条線が施され、頸部には3条の横位の沈線と、その下に2条の波状沈線が一周する。内面は粗く研磨され、削り痕が残る。18は、4単位の波状の口縁部を有する大形深鉢形土器である。口縁部文様帯は、厚手の隆帯及び突起状の隆帯又は、隆帯に沿った沈線により区画され、口縁部の隆帯上には刻目を有す。頸部は、無文帯を形成し、胴部は中央部に円孔を有する円形突起及び、クランク状の隆帯による区画文が施され、隆帯の区画内には2本の平行沈線が施される。地文は、口縁部がRL横位回転による単節斜縄文、胴部にはRL縦位の回転による単節斜縄文が施される。19は、口縁部が、ラッパ状に開く深鉢形土器で、3単位で「V」字状の隆帯を貼付。口唇部にはRL横位の縄文が施されている。頸部以下については地文にRL縦位の縄文が施され、胴部には、平行に結節部の回転圧痕が6ヶ所みられる。また、指ナデによる磨り消しが認められる。20は、波状口縁を有する土器の口縁部の破片である。断面三角形の隆帯による区画文と、隆帯に沿うように角押文が施される。21は、波状口縁を有する土器の口縁部片。波頂部付近には縦位に隆帯が付され、隆帯上には押圧が加えられる。22は、底部片である。RL縦位の縄文を地文とし、縦位の隆帯が貼付。底径は12.7cm。23は、底部片で、胴部はRL縦位の縄文を地文とし、3条1組の沈線が垂下する。底径は7.6cm。24は、鉢形土器の口縁部片。外面は無文で内面に稜を有す。

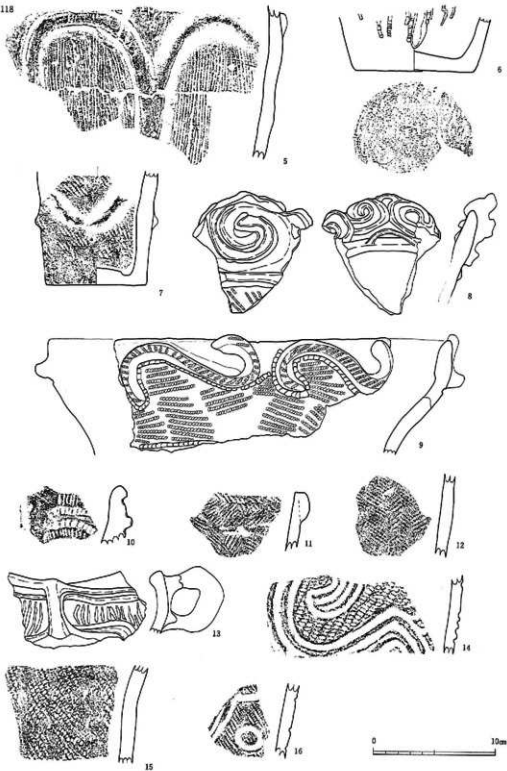
第138号土坑

B-4、B-5グリッドに位置し、第105号土坑、第106号土坑を切っている。円形を呈し、底面は平坦で、壁は一部分がオーバハングするもの、おおむね直立する。径1.25m、深さ0.48mを測る。

出土土器(第55図1)

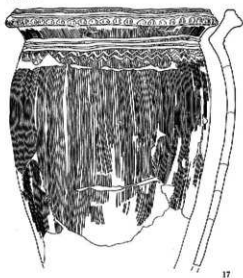
1は、地文に、LRの縦位縄文が施され、縦位の沈線文がみられる。

SK118

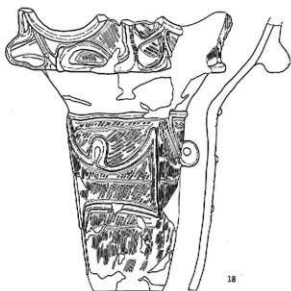


第53图 第118号土坑出土土器

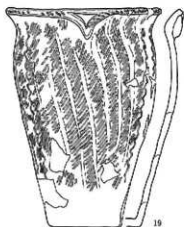
SK118



17



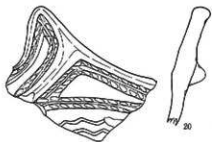
18



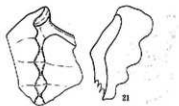
19

SK118-№17, 18, 19

0 20cm



20



21

0 10cm

第54图 第118号土坑出土土器

第157号土坑

B-3, B-4 グリッドに位置し, 第204号土坑を切っている。不定形を呈し, 底面は若干起伏を有し, 壁は外傾しつつ立ち上がる。長径1.14m, 短径0.93m, 深さ0.68mを測る。

出土土器(第55図1~3)

1は, 器面が粗く剥離している部分がある。隆帯が弧を描く様に貼付。2は, 胴部片である。地文にはRL縦位の縄文が施されている。平行する隆帯が貼付され, 一方は途中で分岐する。3は, 他文にLR横位縄文が施され, 縦位の3本の平行沈線文が施される。

第200号土坑

B-3, B-4 グリッドに位置し, ややつぶれた円形を呈する。底面は平坦で壁はやや外傾する。径0.91m, 深さ0.15mを測る。

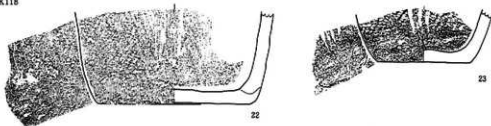
第203号土坑

C-4 グリッドに位置し, 小ピットと切り合っており, 大半が本土坑を切っているが一個は前後関係が不明である。楕円形を呈し, 底面はゆるい凹面をなし, 壁は外傾して立ち上がる。長径1.93m, 短径1.42m, 深さ0.32mを測る。

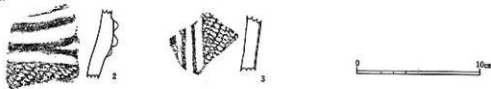
第204号土坑

B-4 グリッドに位置し, 第157号土坑と接しているが前後関係は不明である。不定形を呈し,

SK118



SK157



第55図 第118号・138号・157号土坑出土土器

底面は平坦で小ピットと溝を有し、壁はゆるやかに外傾する。長径1.62m、短径1.02m、深さ0.25mを測る。

第205号土坑

C-3グリッドに位置し、第119号土坑を切っている。調査区外にまたがるため全体の形状は不明だが、楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で、壁の立ち上がりは西側が緩く東側が急である。現状で長径1.25m、深さ0.42mを測る。

・第12地区（第56、57図）

本地区はB-2、B-3、C-2、C-3グリッドに位置し、南側は調査区外である。本地区において記載する遺構は土坑7基である。

第117号土坑

C-2グリッドに位置し、第124号土坑を切っている。不整円形を呈し、底面は平坦で壁はやや外傾する。長径0.96m、短径0.81m、深さ0.13mを測る。

出土土器（第58図1～4）

1は、胴部片である。斜位の隆帯が貼付される。2は、口縁部片。口縁端部は幅広の平坦面で隆帯によって胴部と区分する。胴部にはRL縦位の縄文が施される。3は、胴部片。直立する胴部は、微隆帯によってLR横位の縄文と無文帯とを区分する。4は、口縁部片である。口唇部に面をもち渦巻状の沈線が施される。丁度接合部分で剥離している。

第119号土坑

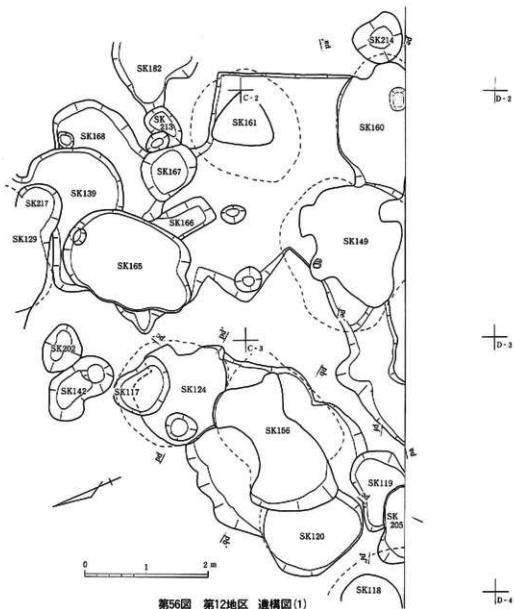
C-3グリッドに位置し、一部が調査区外へまたがるほか、第205号土坑に切られている。全体の形状は不明だが、やや形のくずれた将棋の駒形を呈するものと思われる。底面は起伏が多く壁はゆるやかに外傾する。長径1.25m、深さ0.11mを測る。

出土土器（第58図1～8）

1は、平縁の深鉢形土器である。口唇部は内傾し、内面は、凹線状となる。地文は無文であり胴部上半に沈線による多重の三角形区画文を施している。内面は丁寧な研磨がされている。2は口縁部片である。口縁には、無文帯をもち、沈線による三角形のモチーフをあらわし、沈線間を磨消している。3は、地文に縄文を施し、その上を、幾何学模様状の沈線が施される。4は、胴部片。横位の沈線が3本不等間隔で施されている。5は、胴部片。細かい縄文を縦横位に施文し、同心円状の沈線が充填される。沈線外は磨消されている。6は、口縁部片で、「8」の字状の隆帯が貼付され、その下位に沈線文が施される。7は、深鉢形土器の胴部片で、地文に、LR横位の縄文が施される。その後、研磨を施しているため部分的に消されている。縦位の沈線が、数本施される。8は、外反する無文を呈する口縁部片である。

第120号土坑

C-3グリッドに位置し、第156号土坑により切られている。不整な円形を呈し、底面は平坦で、

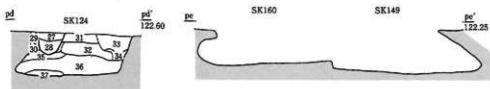
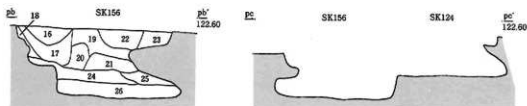
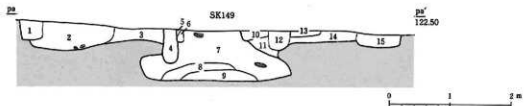


第56図 第12地区 遺構図(1)

壁は部分的にオーバーハングするが大部分は直立する。径1.64m、深さ0.45mを測る。

出土土器(第59図1-12)

1は、深鉢形土器である。口縁部は、横位の「S」字状の隆帯が貼付されている。胴部には、LR縦位の縄文が研磨によって縦位に磨消されている。2は、口縁部片である。「く」の字状に屈曲する口縁部で、幅広の板状の原体によるキャタピラ文によって楕円形区画文が施される。区画内



1. 明茶褐色土 (ローム粒少量・IP含む)
2. 明茶褐色土 (ローム粒多量・ロームB・IP含む)
3. 茶褐色土 (ローム多量・ロームB少量含む)
4. 暗褐色土 (ローム粒少量・炭化物含む)
5. 茶褐色土 (ローム粒多量・ロームB少量含む)
6. 黄茶褐色土 (ローム粒・ロームB多量含む)
7. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・IP含む)
8. 明茶褐色土 (ローム粒少量・ロームB・IP含む)
9. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)
10. 明茶褐色土 (ローム粒少量含む)
11. 黄褐色土 (ローム粒・ロームB多量含む)
12. 明茶褐色土 (ローム粒少量含む)
13. 茶褐色土 (ローム粒少量・IP含む)
14. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)

15. 明茶褐色土 (ローム粒多量・ロームB含む)
16. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・炭化物・IP含む)
17. 明茶褐色土 (ローム粒多量・ロームB・炭化物・IP含む)
18. 明茶褐色土 (ローム粒多量含む)
19. 明茶褐色土 (ローム粒多量・IP含む)
20. 明茶褐色土 (ローム粒含む)
21. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・ロームB少量含む)

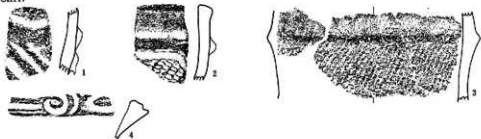
22. 明茶褐色土 (ローム粒少量・IP・炭化物含む)
23. 黒褐色土 (炭化物含む)
24. 黄褐色土 (ローム粒少量・ロームB少量含む)
25. 茶褐色土 (ローム粒少量含む)
26. 茶褐色土 (ローム粒・IP含む)
27. 明茶褐色土 (ローム粒少量・炭化物含む)
28. 明茶褐色土 (ローム粒少量・IP・炭化物含む)
29. 明茶褐色土 (ローム粒多量含む)

30. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)
31. 明茶褐色土 (ローム粒少量・IP含む)
32. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)
33. 明茶褐色土 (ローム粒少量・IP・炭化物含む)
34. 明茶褐色土 (ローム粒多量含む)
35. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・IP含む)
36. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・IP含む)
37. 明茶褐色土 (ローム粒多量含む)

第57図 第12地区 遺構図(2)

には、角押文、沈線による波状文が充填されている。3は、波状口縁部の波頂部片であり、端部にRL斜位の縄文が施された隆帯が貼付される。区画内には、平行沈線文が巡らされている。口唇部内面には、押圧したくぼみがみられる。4は、口縁部片。端部は無文帯で地文に単節RLの横位回転による縄文が施され、頸部には背を割られた隆帯が「V」字状に貼付されている。5は、微隆帯により文様帯が区画され、以下、結節沈線文が施された土器である。微隆帯上にも縄文が施されている。6は胴部片。平行して結節沈線文が施されている。7は胴部片。縄文地に横位の隆帯が貼付

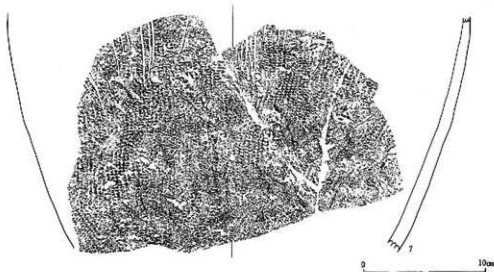
SK117



SK119

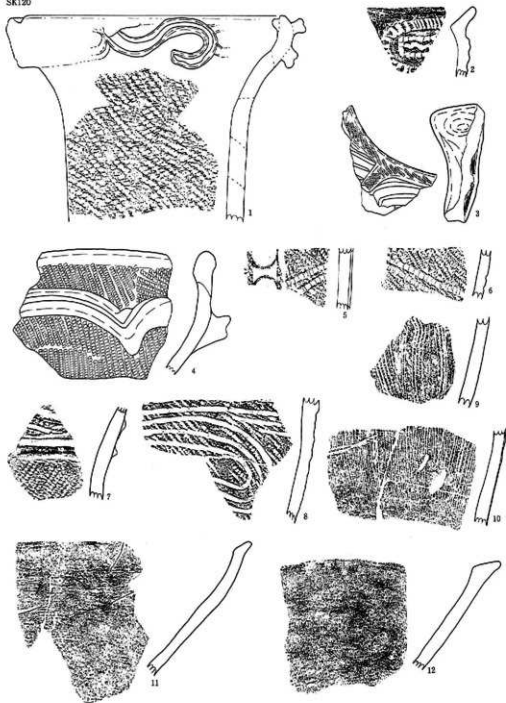


SK119-
No 1 = 0 20cm



第58图 第117号·119号土坑出土土器

SK120



第59图 第120号土坑出土土器

0 10cm

されるとともに沈線文が施されている。8は胴部片。縄文地に、数本の沈線によりモチーフを施したものである。9は、胴部片で、斜位に交差する条線文が施される。10は、胴部片である。ゆるやかな縦位の弧線を描く条線文が施される。11・12は、外反する無文を呈する口線部片である。

第121号土坑

B-3, C-3グリッドに位置し、第119号土坑、第120号土坑、第124号土坑、第156号土坑に切られている。全体の形状、規模は不明だが、現状では不定形を呈し、底面はなだらかな起伏をもち、壁の立ち上がりはゆるやかである。深さは0.26mを測る。

出土土器（第60図1-4）

1は、隆帯が、弧線を描く様に貼付される。2は、口線部片。横位の隆帯が平行して貼付される。胴部にかけては、縄文が施される。3は、胴部片であり、縦位の数本の沈線が施される。4は、地文に縄文が施され、隆帯が弧線を描く様に貼付されている。

第124号土坑

B-2グリッドに位置し、第117号土坑、第124号土坑によって切られている。開口部は崩落によって不定形を呈し、底面はややゆがんだ円形を呈する。底面は平坦で、壁は剝落して原形を失っているが袋状を呈する。底面径1.84m、深さ0.65mを測る。

出土土器（第60図1）

1は、口縁から頸部にかけての破片である。隆帯によって渦巻文が施される。その両側に、沈線による渦巻文をもつ区画文を呈する。区画内には、縄文が充填される。頸部には横位平行沈線文。等間隔で、2条の隆帯が巡らされている。地文には、RL縦位の縄文が施される。

第149号土坑

C-2グリッドに位置し、第160号土坑を切っている。開口部は崩落により原形をとどめず、底面は不整形円形を呈する。底面は平坦であり、壁は急角度で内傾して袋状を呈する。遺物はいずれも底面から0.1~0.4m浮いた状態で出土した。底面径1.48m、深さ0.64mを測る。

出土土器（第60図1-4、第61図5-24、第62図25-29）

1は、深鉢形土器の破片である。口縁部は肥厚して「く」の字形に外傾し、頸部はくびれて厚さを減じつつ胴部にいたる。口唇部に外傾する面をもち、沈線による区画文が施される。頸部には、横位に3条の沈線が巡る。2は、口縁部破片で、隆帯及びそれに沿う沈線により、文様帯が区画され、区画内には縄文が施されている。3は、波状口縁を呈する深鉢形土器の破片である。口縁部文様帯は、隆帯によって区画文を施し、区画の接点は突出し、沈線によってモチーフを施し、円形の盲孔がある。区画内には平行沈線が波状に施されている。4は、扇状把手の破片であり、刻目及び燃糸文が施された隆帯によって区画された中には、半截竹管による角押文が施されている。5は、波状口縁を呈する深鉢形土器の破片である。口縁部文様帯は刻目の加えられた隆帯及び、それに沿う沈線によって区画文を施し、区画の接点は突出する。区画内には沈線が施される。6は、口縁部片であり、櫛歯状工具による条線文が施されている。7は、渦巻文を呈する隆帯及び、沈線により

モチーフが、施された土器である。8は、胴部片で縄文地に隆帯及び、それに沿う沈線が、施されている。9は、1条の隆帯及び、それに沿う2条の沈線が施された土器である。10は、隆帯及び、それに沿う沈線によって、文様帯が区画され隆帯上には縄文が施されている。11は、口縁部片であり、交互刺突文及び、刻目が施された微隆帯によりモチーフが、つくられる。12は、口縁部片で、横位及び、波状の角押文が施されている。13は、深鉢形土器の破片であり、縄文地に渦巻状の隆帯及び、沈線により背を割られた隆帯が施されている。また隆帯上には、一部押圧が加えられる。14は、隆帯及び、それに沿う沈線により文様帯が区画され、区画内には縦位の沈線が施されている。また隆帯上には、縄文が施されている。15は、口縁部片であり、沈線を有する隆帯により、渦巻文が施され、口唇部には鶏冠状の突起が認められる。また内面には、貼付が施されている。16は、眼鏡状把手部分の破片であり隆帯上には沈線が施されている。17は、口縁部片であり、口縁部文様帯は、隆帯及びそれに沿う沈線により区画され、区画内には縄文及び、1本の隆帯を沈線により分割する手法を用いて、クランク文が施されている。18・19は、胴部片であり、縄文地に波状沈線及び、3条の沈線が垂下する。20は、縄文地に沈線によりモチーフが施されている。21は、胴部片であり、地文は、RL縦位の回転による縄文が施され、3本の沈線が垂下する。22は、胴部片である。磨消縄文が施される。23は、胴部片であり、捺糸文が施される。24は、胴部片であり、縦位の沈線が施されている。25は、口縁部の破片であり、沈線による渦巻文が施される。26は、口縁部片であり、沈線により「S」字状の文様が施される。27は、浅鉢形土器の口縁部片である。無文を呈する。28は、小形の土器の破片で、外面は丁寧に研磨されている。29は、口唇部に沈線の施された浅鉢形土器の破片である。

第156号土坑

B-3, C-3グリッドに位置し、第120号土坑、第124号土坑を切っている。開口部は崩落が著しく原形をとどめておらず、底面は不定形を呈する。底面は平坦で、壁は大きく内湾して袋状を呈している。底面長径2.46m、同短径1.61m、深さ0.80mを測る。

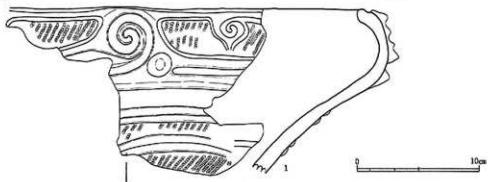
出土土器（第62図1～7）

1は、口縁部には、横位の「S」字文を主体にした、一部は鶏冠状を呈する中空の把手を配し、内面に1条の隆帯、また、口唇部には、隆帯を1条付すことにより、狭い口唇部文様帯を形成している。口唇部については、口縁部平坦面に半截竹管による縦位の刺突文、さらに1条の隆帯を貼付しており、頸部は、2条の沈線によるクランク文、また3条の隆帯で区画され、下位の区画内には、半截竹管「C」字状の連続刺突文が施される。また胴部に至る隆帯間には単節L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ の原体圧痕が付されている。2は、胴部片である。地文にRL縄文が施される。巾広の隆帯によって区画文が施され、隆帯下には2本の沈線が通る。3は、口縁部片。口縁部から胴部まで、波状縄文が施されている。4は、口縁部片であり、胴部は縦位の条線文を施した後に、交互刺突文を施す。5は、胴部片である。地文にLR縦位の縄文が施される。縦位の沈線文が施される。6は、胴部片。隆帯が区画文をつくり、LR縦位縄文が充填される。7は、縦位の条線文が施される胴部片である。

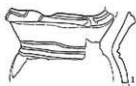
SK121



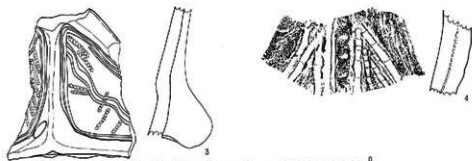
SK124



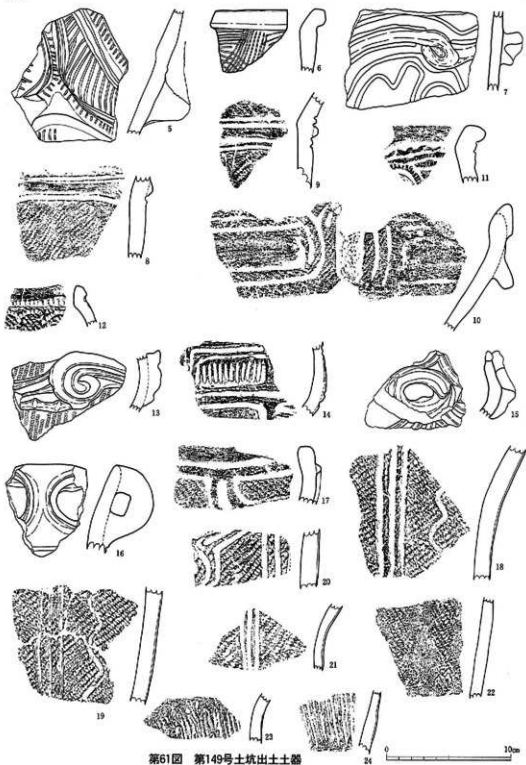
SK149



SK149- No 1 = 0 20cm



第60图 第121号·124号·149号土坑出土土器 0 10cm

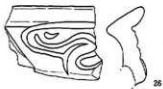


第61图 第149号土坑出土土器

SK149



25



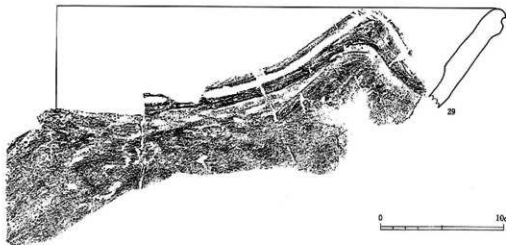
26



27



28



29



SK156

1



2



3



4



5



SK 156-0
No.1 =



6



7



第62图 第149号·156号土坑出土土器

・第13地区（第63, 64図）

本地区はA-2, A-3, B-2, B-3グリッドに位置し、北側は調査区外となる。本地区において記載する遺構は土坑17基である。

第126号土坑

A-2, A-3グリッドに位置し、第133号土坑を切り、第128号土坑に切られている。開口部、底面ともに円形を呈し、底面は平坦で、壁面は剥落しているが若干オーバーハングしている。開口部径1.44m、底面径1.57m、深さ0.70mを測る。

出土土器（第65図1～11）

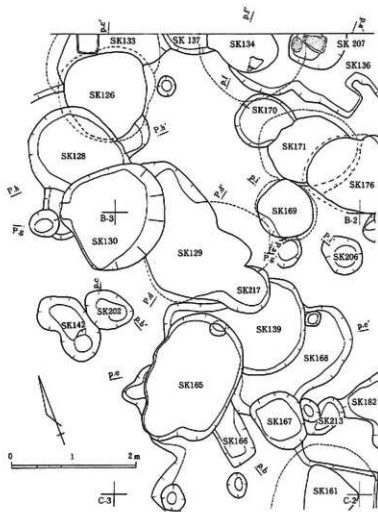
1は、頸部片である。隆帯によって区画文をつくり、区画内には、沈線文によって充填される。隆帯上側面には、平行沈線が施される。胴部には、RL縦位の縄文。2は、把手片。貫通口を有し周囲に交互刺突文を施文。縁辺に刺目がある。3は、口縁部片で、蛇行するものと、縦横位の沈線が施される。4は、交互刺突文及び、背を割られた隆帯より口縁部文様帯が区画され、区画内には、条線とともに2本の沈線により、渦巻状の微隆帯が重下する。5は、口縁部片である。端部は弧を描く条線文と胴部にかけての縦位の条線文との間に、背を割られた隆帯が巡らされる。6は、胴部片である。弧線を描く様にRL縄文が施された隆帯が巡らされている。7は、口縁部片。隆帯によって区分される口縁は、幅広の無文を呈する。胴部はLR縦位の縄文が縦位の研磨によって磨り消される。8は、口縁部片。横位の平行した隆帯が数本貼付される。9は、他文に縄文が施され、数本の斜位の平行沈線が施される。10は、口縁部片であり、斜位の平行した隆帯を貼付。円形の突起が施されている。11は、胴部片で、地文にRL横位の縄文。ナデによって縦位に磨り消される部分がある。縦横位に沈線が施される。

第128号土坑

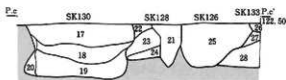
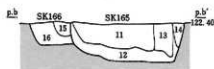
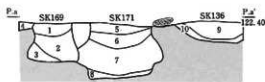
A-2, A-3グリッドに位置し、第126号土坑を切り、第130号土坑に切られている。切り合いによって本来の形状は不明だが、ややゆがんだ円形を呈するものと思われる。底面は起伏を有し、壁は内湾気味に少し外傾する。現存で径1.38m、深さ1.02mを測る。

出土土器（第65図1～8, 第66図7）

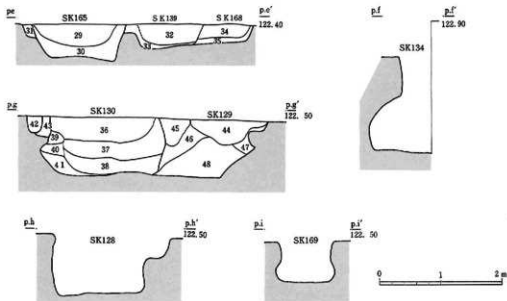
1は、口縁部片である。文様帯の上下を隆帯と沈線で画し、文様帯内にはRL横位の縄文を施す。2は、口縁部下端の破片である。隆帯によって区画文をつくり、区画内には沈線が充填される。3は、口縁部文様帯下端付近の破片。文様帯下端は背面に沈線を有する隆帯で画され、文様帯内には、沈線が充填される。4は、胴部片。LR縦位の縄文を地文とし、2条1組の沈線が垂下し沈線間には、磨消が加えられる。5は、口縁部片である。口縁には、波状の突起を有し、口縁部から胴部にかけてRL縦位の縄文が地文として施される。口縁部文様帯の上下は2条の沈線で画し、横位の波状沈線が配される。6は、口縁部片。口唇端部に平坦面をもち、そこに交互刺突文を施している。7は、胴部片。RL横位の縄文が施される。8は、底部片である。底面に網代痕が残る。復元底径8.5cm。



1. 茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)
2. 明茶褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)
3. 黄褐色土 (ローム粒多量・炭化物粒少量含む)
4. 明茶褐色土 (ローム粒・少量含む)
5. 明茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒含む)
6. 暗茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)
7. 暗茶褐色土 (ローム粒・IP少量含む)
8. 茶褐色土 (ローム粒多量含む)
9. 茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)
10. 黄褐色土 (ロームB多量含む)
11. 茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)
12. 黄褐色土 (ローム粒・ロームB多量含む)
13. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームB・炭化物粒含む)
14. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)
15. 暗茶褐色土 (ローム粒含む)
16. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)
17. 茶褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)
18. 明茶褐色土 (ローム粒多量・ロームB少量含む)
19. 暗茶褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)
20. 黄褐色土 (ローム粒多量含む)
21. 茶褐色土 (ローム粒・IP少量)
22. 茶褐色土 (ローム粒・IP少量含む)
23. 黄褐色土 (ローム粒・ロームB多量含む)
24. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームB多量含む)
25. 茶褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)
26. 黄褐色土 (ローム粒少量含む)
27. 黄褐色土 (ロームB多量含む)
28. 黄褐色土 (ロームB・IP含む)



第63図 第13地区 遺構図(1)



- | | |
|--|---|
| <p>29. 赤褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)</p> <p>30. 黄褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)</p> <p>31. 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)</p> <p>32. 暗黄褐色土 (ローム粒・IP・炭化物粒含む)</p> <p>33. 黄褐色土 (ローム粒少量含む)</p> <p>34. 暗茶褐色土 (ローム粒少量含む)</p> <p>35. 暗黄褐色土 (ローム粒少量含む)</p> <p>36. 赤褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含む)</p> <p>37. 明茶褐色土 (ローム粒少量・ロームB・炭化物粒少量含む)</p> <p>38. 暗茶褐色土 (ローム粒少量・ロームB少量含む)</p> | <p>39. 黄褐色土 (ロームB少量含む)</p> <p>40. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームB・炭化物粒少量含む)</p> <p>41. 黄褐色土 (ローム粒少量含む)</p> <p>42. 暗茶褐色土 (ローム粒少量含む)</p> <p>43. 暗茶褐色土 (ローム粒・IP少量含む)</p> <p>44. 暗茶褐色土 (ローム粒・砂粒・炭化物粒少量含む)</p> <p>45. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)</p> <p>46. 黄褐色土 (ロームB少量含む)</p> <p>47. 黄褐色土 (ローム粒・ロームB少量含む)</p> <p>48. 黄褐色土 (ローム粒・砂粒・炭化物粒少量含む)</p> |
|--|---|

第64図 第13地区 遺構図(2)

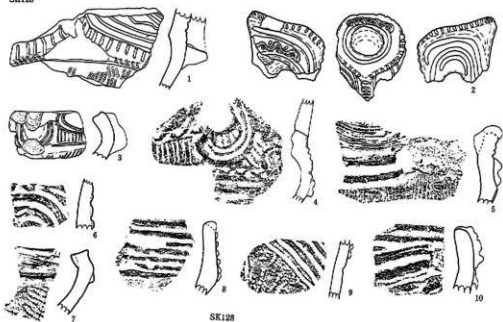
第129号土坑

A-2, B-2グリッドに位置し, 第217号土坑と切り合っているが前後関係は不明である。開口部, 壁面ともに崩落が顕著で原形をとどめる部分は少ないが, おおむね楕円形を呈し, 壁面が急角度で内傾する袋状土坑と思われる。底面は凹面をなしている。遺物は大半が底面から0.1~0.5m浮いた状態で出土した。現状で径2.08m, 深さ1.00mを測る。

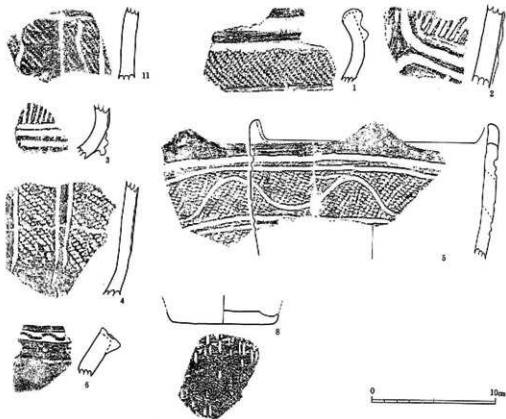
出土土器 (第66図1~7, 第67図8~16, 第68図17)

1は, 底部から口縁部へほぼ直線的に開く深鉢形土器で底部を欠損する。口縁部には, 隆帯を貼って肥厚。そこから2単位の縦位の隆帯が垂下。また胴部には, 3本指をモチーフとした文様が隆帯によって1対施されている。隆帯に沿って角押文が施され, 口縁部隆帯上にもみられる。胴部はLR縦位の縄文を地文とするが, 磨り消しに加えられている。2は, 深鉢形土器で底部の約3/4と口縁部を欠損する。胴部は角押文を有し, そこから4単位の部分的に蛇行する隆帯が垂下する。地文はRL縦位の単節斜縄文で, 隆帯上にも縄文がみられる。3は, 波状口縁を有する深鉢形土器の破片。

SK126

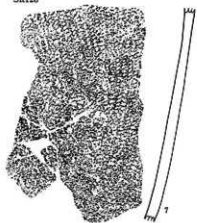


SK128



第65图 第126号·128号土坑出土土器

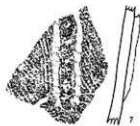
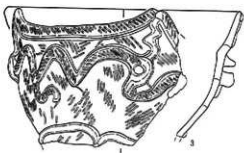
SK128



SK129



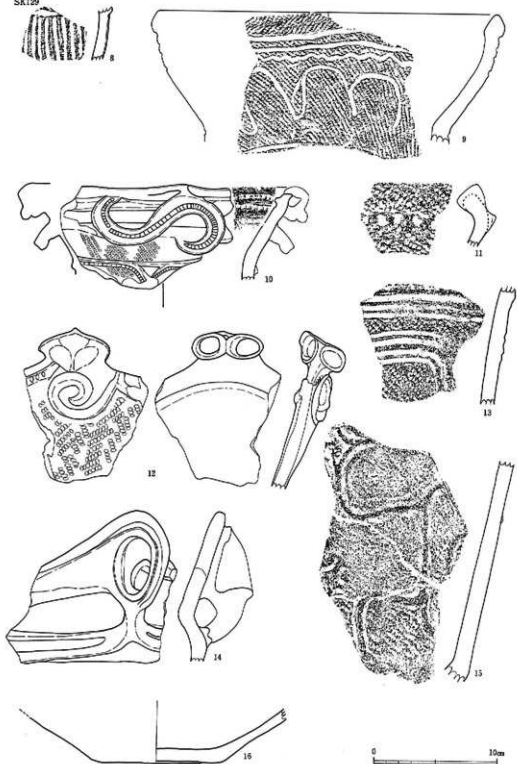
SK129-No 1 · 2 · 3 cm



0 10cm

第66图 第128号·129号土坑出土土器

SK129



第67图 第129号土坑出土土器

口縁部文様帯は上下を隆帯で画し、波状を呈する隆帯による文様が横位に展開する。波頂からは隆帯が垂下し、横位の隆帯と連結するところに円孔を有する突起を貼付。ほぼ隆帯に沿って沈線が施されている。地文はRLの単脚斜縄文が粗く施され、隆帯上にも縄文がみられる。4は、胴部片。横位の平行角押文が施される。5は、波状口縁部の波頂部の破片。縦長の粘土を貼付した隆帯がある。隆帯と口唇に沿って角押文が施される。6は、波状口縁の波頂部の破片。波頂部下に、縄文が施された隆帯による縦長の楕円形の文様と、口唇に沿って沈線がめぐらされている。7は、胴部片で、地文は不明瞭。平行角押文の施された縦位の隆帯が貼付される。8は、胴部片。縦位の条線文が施される。9は、口縁～頸部片である。地文にLR縄文の羽状縄文が施されている。平行沈線・振巾の大小の波状文がみられる。10は、口縁部片。横位の角押文が施された「S」字状の隆帯が貼付。頸部には、隆帯によって楕円区画文が施され、角押文がめぐらされている。地文には、LR縦位の縄文。内面口唇部に2条の角押文が施されている。11は、口縁部片であり、口縁端部まで、LR縦位の縄文が施され、押圧がくわえられた隆帯が横位に貼付される。12は、口縁部片で、内面は眼鏡状突起がみられ、外面には押圧が加えられた突起を有する。断面三角形の隆帯が渦巻文を施す。地文はLR縄文の羽状縄文。13は胴部片。縄文地に、やや幅広の沈線によりモチーフを施されたものである。14は、波状口縁部片である。波頂部に2個の貫通口がある。15は胴部片。器面は粗く地文にRL横位の縄文。隆帯によってモチーフが施される。16は、底部片。胴部は外反して開くもので、器面は研磨が施されている。17は、底部片。底部には網状痕が残る。

第130号土坑

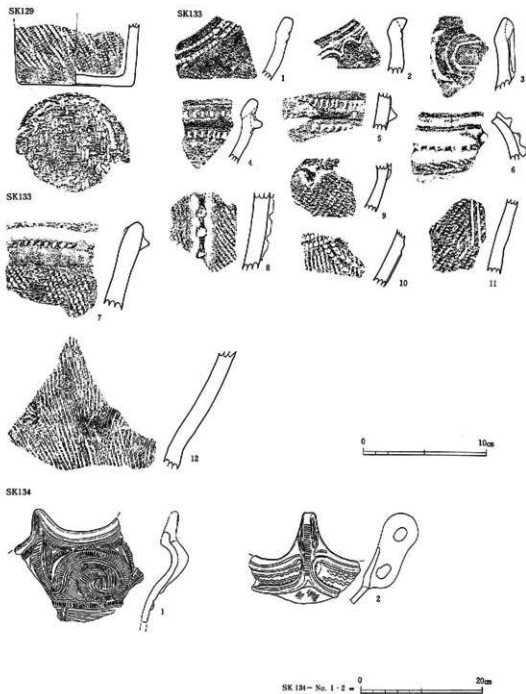
A-2, A-3, B-2, B-3の4グリッドにまたがっており、第128号土坑、第129号土坑を切っている。不整な円形を呈し、西側に突出部をもつ。底面は若干起伏を有し、壁面は内湾しつつほぼ直立する。長径1.81m、短径1.65m、深さ0.85mを測る。

第133号土坑

A-2, A-3グリッドに位置し、第126号土坑、第137号土坑に切られており、調査区外にまたがっている。全体の形状は明確ではないが、おおむね円形を呈するものと思われ、底面は平坦で、壁は大きく内傾して立ち上る。深さは0.71mを測る。

出土土器（第68図1～12）

1は、波状口縁を有する土器の口縁部の破片である。口縁に沿って半截竹管による角押文が施される。2は、口縁部片である。口唇には隆帯が付され、それに沿うように波状が施される。補修片がみられる。3は、口縁部片である。隆帯によって区画文をつくり、区画内には角押文がみられる。4は、口縁部片である。口唇直下に断面三角形の隆帯が付され、隆帯に沿ってキャピラ文が施される。5は、口縁部片。断面三角形の隆帯が付され、隆帯に沿うようにキャピラ文が見られる。6は、口縁部片。口縁部文様帯は上下を隆帯で画し、「Y」字状を呈する隆帯によって区画文を施す。文様帯内は、刻目を有する隆帯が横位に付される。文様帯下端の隆帯上には、RL横位の縄文が施される。7は、口縁部片である。LR縦位の縄文を地文とし、口唇直下に断面三角形の隆帯が付



第68图 第129号·133号·134号土坑出土土器

され、刻目が施される。8は、胴部片である。押圧が加えられた隆帯が垂下しRL縦位の縄文が施される。9は、口縁部片。RL縦位の縄文を地文とし、「Y」字形の隆帯を付す。10は、口縁部片である。無節Lの縄文を地文とし、角押文を施す。11は、胴部片。RL縦位の縄文を地文とし、2条1組の沈線が垂下する。12は、胴部片で、RLの燃糸文が施されている。

第134号土坑

A-2グリッドに位置し、調査区外にまたがっており、第137号土坑を切っている。開口部は西洋ナシ形を呈するが崩落によるものと思われ、底面はほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は大きく湾曲してドーム状を呈しながら立ち上がり開口部付近で直立する。遺物はいずれも底面から0.2m以上浮いた状態で出土した。全体の規模は不明だが、現状では底径1.72m、深さ1.54mを測る。

出土土器（第68図1・2、第69図3～7）

1は、波状口縁を有する深鉢形土器の破片である。口縁部文様帯は上下を隆帯で画し、内部に隆帯による渦巻文を配する。隆帯に沿って1～2条の沈線を施し、空白部には三叉文と沈線文を充填している。また隆帯上には刻目が施される。胴部は隆帯文を垂下させ、横位の沈線文が充填される。色調は暗褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。器高（現存）17.5cmである。2は、深鉢形土器の把手の破片である。狭い口縁部文様帯は、上下を背面に沈線を有する隆帯文で区画し、隆帯に沿って沈線または半截竹管による連続刺突が施される。また、隆帯から派生するように、橋状把手と有孔の円盤状把手を作出している。橋状把手と円盤状把手をつなぐ隆帯に刻目が施され、円盤状把手の孔の周囲に沈線による同心円がみられる。文様帯内には2条の蛇行沈線が施され、胴部にはRLの単節斜縄文が施される。色調は暗赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。器高は現存長14.4cmである。3は、背を割られた隆帯及び、それに沿う沈線によってモチーフが施された土器で、地文には縦位の条線が施されている。4は、深鉢形土器の破片であり、横位の沈線により口縁部文様帯を区画し、区画内には沈線による渦巻文、又は胴部には波状沈線が垂下する。口唇部には押圧が加えられている。5は、胴部片であり、くし歯状の数本の条線文と交互刺突文との間に、横位の1条の沈線が施される。6は、断面四角形の隆帯が渦巻文が施される。7は、胴部片であり、数本の条線文を施した後、背を割られた隆帯を貼付。

第137号土坑

A-2グリッドに位置し、第133号土坑を切り、第134号土坑に切られている。大半が調査区外に出ているため規模・形状ともに不明である。底面はほぼ平坦で、壁は直立する。深さ0.98mを測る。

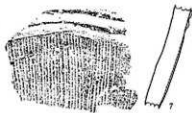
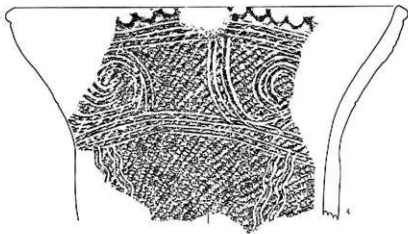
出土土器（第69図1～3）

1は、口唇部内外面に隆帯を貼付し、外面には交互刺突文及び、縄文が施されている。2は、縄文地に微隆帯によりモチーフの施された土器である。3は、胴部片であり縄文地に、背を割られた隆帯が垂下する。

第139号土坑

B-2グリッドに位置し、第165号土坑、第216号土坑に切られ、第168号土坑を切っている。不

SK134



SK137



0 10cm

第69圖 第134号・137号土坑出土土器

定形を呈し、底面は起伏を有しており、壁はやや外傾する。重複により規模は明確ではないが、長径2.26m深さ0.15mを測る。

第165号土坑

B-2グリッドに位置し、第139号土坑、第166号土坑、第168号土坑を切っている。南西側が突出する楕円形を呈し、底面は中央部がやや盛り上がる凸面となり小ピットを有す。壁は丸みを帯びてやや外傾する。長径2.19m、短径1.44m、深さ0.58mを測る。

出土土器（第701～4）

1は、口縁部片である。隆帯による区画文がつくられ、区画内には、RL縦位の縄文が施される。2は、口縁部下位から胴部にかけて残る。RLの縄文が、横位または、縦位に施されており、沈線による区画文、S字文が配され、また、沈線によって区画された無文帯が垂下する。3は、口縁部片である。口縁部文様帯下端は隆帯で画され、文様帯内には、RL横位の縄文が見られる。4は、沈線を施された幅広の隆帯が横位にめぐり、LR縦位の縄文が施される。5は、口縁部片。口唇部付近は無文で、口唇直下から、無節Lrの縄文が施される。6は、胴部片である。LR縦位の縄文を地文とし、沈線により区画された無文帯が垂下する。7は、胴部片。RL縦位の縄文が施され、沈線によって区画された無文帯が垂下する。8は、胴部片である。Lrの燃糸文が施される。9は、胴部片である。縦位の条線が施される。

第166号土坑

B-2グリッドに位置し、第165号土坑に切られ、第168号土坑とは接しているが前後関係は不明である。長方形もしくは溝状を呈するものと思われ、底面は平坦で壁は外傾しつつ立ち上がる。幅0.49m深さ0.35mを測る。

出土土器（第701～4）

1は、口縁部片である。口縁直下に、隆帯が付され交互刺突文が施される。その下には、沈線による区画文が配される。2は、口縁部片で、沈線による区画文がつくられ、縦位の沈線が施される。3は、胴部片。RL縦位の縄文が施され、3条の沈線が垂下する。4は、胴部片。RL縦位の縄文が施される。

第167号土坑

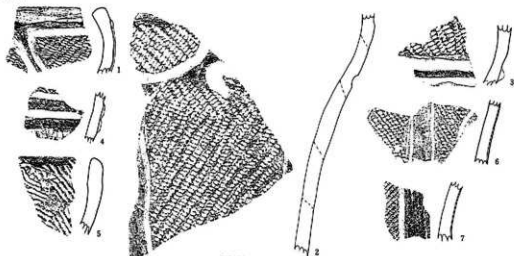
B-2グリッドに位置し、第168号土坑を切っている。不整形長方形を呈し、底面は凹凸が多く壁はほぼ直立する。長径0.96m、短径0.75mを測る。

出土土器（第701～7）

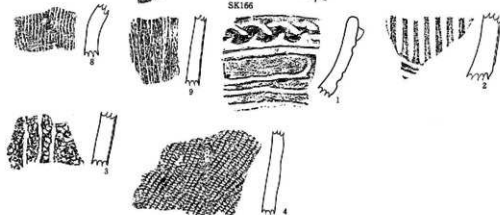
1は、口縁部片。口縁直下に隆帯が走り、胴部にはRL縦位の縄文が施される。2は、口縁部片。口縁直下に隆帯が付され、円形の刺突が行われる。刺突のある部分から、2条の沈線が垂下する。3は、口縁部片であり、口唇部に沈線が施文され、無文帯を介してLR横位の縄文が施される。4は、胴部片。LR横位の縄文を地文とし、沈線が施される。5は、胴部片。LR斜位の縄文を地文とし、沈線文を施す。6は、胴部片。原体の異なる2種類のRL縦位の縄文を地文とし、縦位の沈線が施

される。7は、口縁部片。無文帯を有し縦位の条線が施され、横位の沈線がみられる。

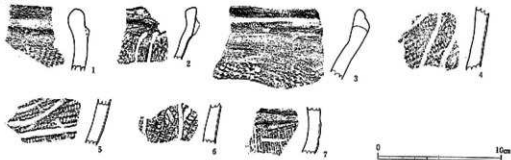
SK165



SK166



SK167



第70図 第165号・166号・167号土坑出土土器

第168号土坑

B-2グリッドに位置し、第139号土坑、第167号土坑に切られている。不定形を呈し、底面はゆるい起伏をもつとともに小ビットが穿たれる。壁はやや外傾して立ち上がる。長径2.28m、深さ0.29mを測る。

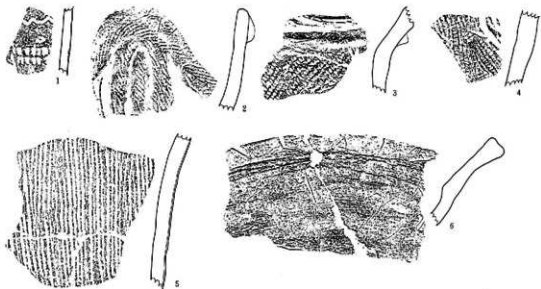
第169号土坑

A-2、B-2グリッドに位置し、第171号を切り、小ビットに切られている。開口部は円形を呈し、底面は南西側がゆるい凹形を呈する。底面は平坦で、壁面はゆるやかに内傾する。開口部径0.93m、底面径1.04m、深さ0.61mを測る。

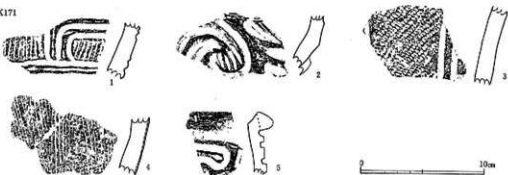
出土土器（第71図1～6）

1は、胴部片。横位の蛇行沈線とキャタピラ文が施される。2は、波状口線を有する土器の波頂

SK 169



SK171



第71図 第169号・171号土坑出土土器

部付近の破片。隆帯によって縦位の楕円形区画文をつくり、RLの縄文を施している。3は、胴部片。口縁部文様帯は下端を隆帯で画し、文様帯内には隆帯と沈線により施文する。胴部は、RL縦位の縄文を地文とする。4は、胴部片。LR縦位の縄文を地文とし沈線が施される。5は、胴部片。縦位の条線が施されている。6は、浅鉢形土器の破片。外面は、無文で内面には陵を有する。

第170号土坑

A-2グリッドに位置し、第171号土坑に切られている。ややゆがんだ円形を呈し、底面は平坦で壁は直立する。径0.86m深さ0.32mを測る。

第171号土坑

A-2グリッドに位置し、第170号土坑を切り、第169号土坑、第176号土坑に切られている。東西に長軸をもつ卵形の平面形を呈し、底面は段差を有し、壁は内湾気味に内傾する。開口部長径1.34m、開口部短径1.04m、底面長径1.60m、底面短径1.21m、深さ0.90mを測る。

出土土器（第71図1～5）

1は、口縁部片である。沈線により区画された文様帯。区画内には沈線が充填される。地文はRL縦位の縄文が施される。2は、隆帯によりモチーフを施す。3は、胴部片。RL縦位の縄文が施されている。幅広の平行沈線文が施される。4は、胴部片。縦位の条線文が施される。5は、口縁部片である。蛇行した沈線が施されている。

第206号土坑

B-2グリッドに位置し、ダルマ形の平面形を有する。底面は陥凹状で壁は直立する。長径0.76m、短径0.60m、深さ0.91mを測る。

第207号土坑

A-2グリッドに位置し、調査区外にまたがっている。そのため形状、規模は明確にし難い。底面はゆるやかな凹面をなし、壁の立ち上がりは南東側が緩く、北西側が急である。深さ0.21mを測る。

第217号土坑

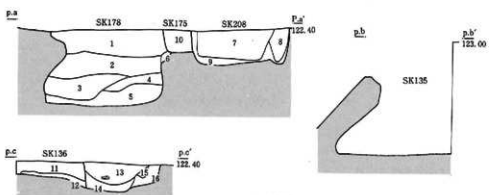
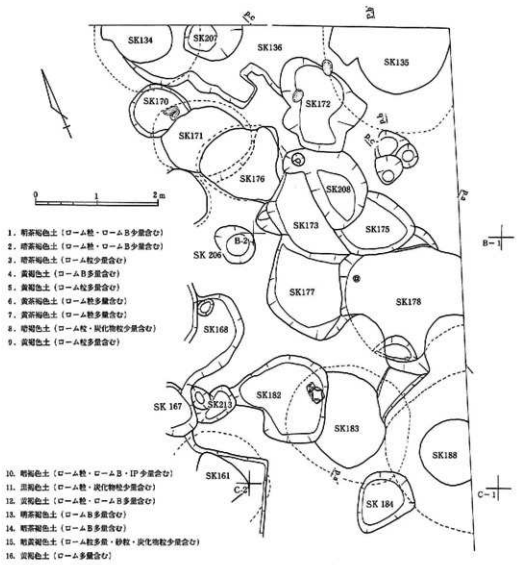
B-2グリッドに位置し、第129号土坑と切り合うが前後関係は不明である。円形を呈するものと思われ、底面は平坦で壁面は直立する。径0.79m、深さ0.93mを測る。

・第14地区（第72図）

本地区は調査区の北東部にあたるA-1、A-2、B-1、B-2グリッドに位置し、北側および東側は調査区外となる。本地区において記載する遺構は土坑10基である。

第135号土坑

調査区北東隅のA-1グリッドに位置し、調査区外にまたがっている。開口部は崩落によって不定形を呈するが本来は円形であるものと思われ、底面はやや不整な円形を呈する。底面は平坦で、壁は約45度の角度で内傾し、開口部下0.45mから上はほぼ直立する。遺物は底面から0.3～1.0



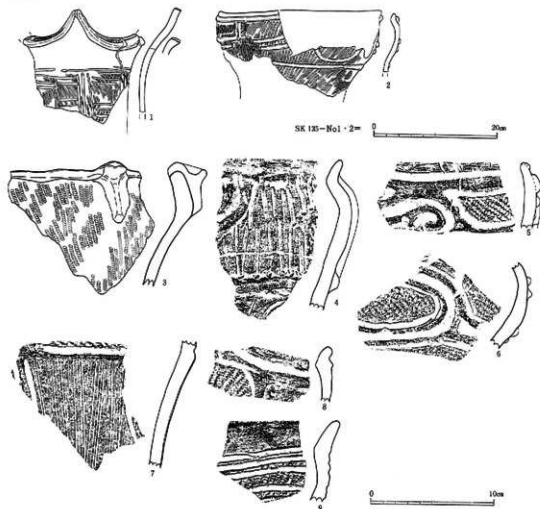
第72図 第14地区 遺構図

m 浮いた状態で出土した。推定開口部径1.55m, 同底面径2.40mであり, 深さは1.24mを測る。

出土土器 (第73図1-9・第74図10-14)

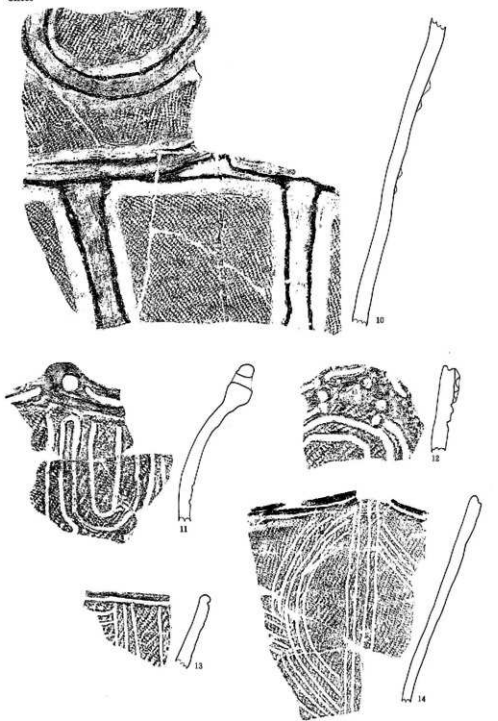
1は, 波状口縁を有する深鉢形土器の破片。口縁部・胴部上半の約1/4, 底部・胴部下半の全部を欠損する。口縁部は4単位の波頂部をもつと考えられ, 口唇の平坦面には沈線を2条平行に, もしくは楕円形に施文し, その内部に刻目を施す。胴部はRL横位の単節斜縄文を地文とし, 2~3条の縦位及び, 横位の沈線を用いて方形状に区画する。2は, キャリバー形を呈する深鉢形土器の破片。口縁部文様帯の上下を隆帯で画し, 上の隆帯から懸垂されるように隆帯による区画文を施し, その下に一部「十」字状を呈する横位の蛇行する隆帯を貼る。地文はRL斜位の単節斜縄文である。3は, 口縁部~胴部の破片。隆帯によっていわゆる二重口縁を作出し, 上面に吸盤状の凹みを有す

SK135



第73図 第135号土坑出土土器(1)

SK135



第74图 第135号土坑出土土器(2)



る縦位の隆帯が付される。地文は、LR縦位による単節斜縄文が施される。4は、口縁部片。口縁部文様帯下端は隆帯で画され、文様帯内には、隆帯によるクランク文を付して、縦位の沈線を充填する。5は、口縁部片。口縁部文様帯は上下を隆帯で画し、文様帯内はRL横位の縄文を地文とし隆帯とそれに沿う沈線によって渦巻文が配される。6は、口縁部片。2条の隆帯によって区画文を作り、RL横位の縄文が充填される。7は、胴部上半の破片。口縁部文様帯は沈線による区画文をつくり、LR縦位の縄文が見られる。胴部は縦位の条線を地文として沈線が施される。8は、口縁部片。沈線によって区画文を作り、区画内にはRL縦位の縄文を充填する。9は、口縁部片である。口縁に無文帯を有し、RL縦位の縄文を地文とし、横位の沈線が施される。10は、胴部片。RL縦位及び、横位の縄文を地文とし、微隆帯により区画文を施す。11は、波状口縁を有する深鉢形土器の口縁部～胴部の破片。口唇直下には沈線が巡り、波頂部下には貫通孔を有する。胴部はLR縦位の縄文を地文として沈線による「U」字形の文様が展開する。12は、口縁部片。口唇部に沈線が施され、外面は、LR横位の縄文を地文とし、円形の刺突文と沈線文がみられる。13は、口縁部片である。LR横位の縄文を地文とし口唇直下に沈線がめぐると沈線による区画文がみられる。14は、深鉢形土器の口縁部～胴部の破片。LRの単節斜縄文が縦位又は、横位に施され、モチーフ間を連結させる垂線が施される。

第136号土坑

A-1、A-2グリッドに位置し、第134号土坑、第172号土坑、第207号土坑に切られている。まったくの不定形であり、おそらく後世のかく乱等によるものと考えられるが土坑本体と識別することができず、また東壁の位置も検出することができなかった。深さは0.19～0.33mを測る。

出土土器（第75図1～6）

1は、口縁部片。端部に無文帯を有する口縁。胴部には、RL横位の縄文が施される。2は、胴部片。沈線によって区画される。端部は欠損。3は、胴部片。RL横位の縄文が施され、沈線文が配される。円形の粘土に押圧が加えられたものが貼付される。4は、口縁部片。端部には、円孔が施され、口唇に沿って1条の幅広の沈線がみられる。5は、幅広い無文を呈する口縁部である。6は、胴部片。地文に単節LR横位の縄文。沈線によって横位の楕円形文が並行して施される。

第172号土坑

A-1グリッドにあり、第136号土坑、第208号土坑を切っている。不定形であり、底面は凹凸を有し、壁の立ち上がりも緩急一様でない。長径1.68m、短径1.38m、深さ0.33mを測る。

出土土器（第75図1～8）

1は、口縁部片。口唇直下に沈線が巡り、胴部には沈線により文様が施される。2は、口縁部片。口唇直下に沈線がめぐり、RL横位の縄文が施される。3は、口縁部片。LR横位の縄文を地文とし、沈線が施され沈線の上端には円形の刺突が配される。4は、胴部片。沈線が施され沈線間には、RL横位の文様が充填される。5は、胴部片である。LR横位の縄文を地文とし、縦位の沈線がみられる。6は、胴部片である。7は、胴部片で、地文をもち沈線による文様を施す。8は、斜

位の条線が施される胴部片。

第173号土坑

A-1, B-1 グリッドに位置し, 第177号土坑を切り, 第175号土坑, 第208号土坑に切られている。全体の規模, 形状は不明であり, 底面は平坦で, 壁はゆるやかに外傾して立ち上がる。深さは0.19mを測る。

出土土器 (第75図1~5)

1は, 口縁部片。研摩された後に, ゆるやかに曲がる数条の沈線が施される。2は, 地文にRL単節斜縄文を施し, 背を割られた隆帯が弧を描く様に貼付される。3は, 隆帯によって区画文が施され, 区画文にはRL縦位の縄文が充填される。4は, 胴部片で, 地文に斜位の沈線が施され, 一部円形の押圧痕がのこる。5は, 地文に条線文が施され, 線上に押圧痕がのこる。

第175号土坑

A-1, B-1 グリッドに位置し, 第173号土坑, 第178号土坑を切り, 第208号に切られている。形状, 規模は明確にし難いが, ゆがんだ三角形を呈するものと思われる。底面は起伏を有し, 壁はやや外傾しつつ立ち上がる。最大幅1.06m, 深さ0.30mを測る。

第176号土坑

A-1, A-2 グリッドに位置し, 第171号土坑を切っている。開口部は崩落によって原形をとどめず, 底面は不整な楕円形を呈する。底面は平坦で壁はわずかに内傾する。底面長径1.45m, 同短径1.26m, 深さ0.60mを測る。

出土土器 (第75図1~4)

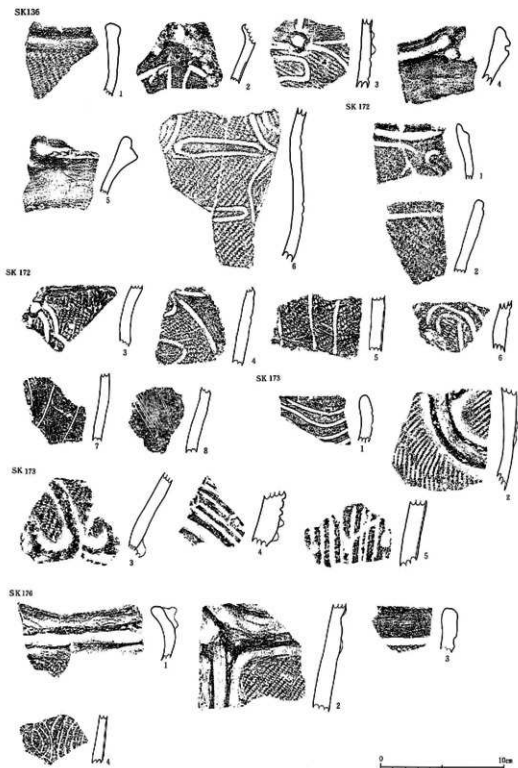
1は, 波状口縁部の一部であり, 背を割られた隆帯がめぐり, 胴部にはRL横位の縄文が施される。2は, 隆帯によって区画文が施され, 区画内には, RL縦位の縄文が充填される。3は, 口縁部片。幅広の無文を呈する口縁。沈線により, 胴部と区分し, LR縦位の縄文が施される。4は, 胴部片。沈線の幅がやや広く, 弧を描くように施され, 一部交差するところもみられる。

第177号土坑

A-1, B-1 グリッドに位置し, 第173号土坑, 第178号土坑に切られており, 形状, 規模とも不明である。底面は平坦で, 壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは0.48mを測る。

出土土器 (第76図1~3)

1は, 中空状の把手を有する口縁部片。把手部分及び, 口縁部文様帯は沈線により背を割られた隆帯により画され, 渦巻文あるいは「S」字状的に文様が展開する。地文はRLの横位回転による単節斜縄文が施される。2は, 口縁部片である。隆帯及び, それに沿う沈線により, 渦巻状の文様が展開され, 地文にRL縦位の縄文が施されている。3は, 口縁部片である。地文に, 羽状縄文が施され, やや幅広の波状沈線文が垂下する。



第75图 第136号·172号·173号·176号土坑出土土器

第178号土坑

B-1グリッドに位置し、一部が調査区外にまたがっている。第177号土坑を切り、第175号土坑に切られている。開口部は崩落が顕著で、底面は不整な円形を呈し、三角形の掘りこみを有する。壁は大部分が落下しているが、本来は袋状を呈するものと思われる。本土坑からは小型の完型土器が二点出土し、そのうちの一点(第76図-1)は底面から0.05m浮いた状態で、もう一点(第76図-2)は底面から0.70m浮いた状態で出土した。底面径1.41m、深さ1.15mを測る。

出土土器(第76図1-9)

1は、小形の鉢形土器である。口縁部は、直線的にやや外傾し、胴部との境は「く」の字形を呈する。胴部中位にも屈曲をもつ。口縁部側面には、対向する位置に2個の小孔を穿つ。文様は、胴部上位と中位をめぐる隆帯とそれを上下に連結する1~2条の4単位の隆帯である。内外面とも丁寧な研磨が加えられる。2は、小形の有孔土器で、口縁部には2つの穿孔された穴が、4単位施されている。色調は一面に朱が塗られていた痕跡が認められ、赤褐色を呈する。地文には、口縁部がLR横位、胴部がLR縦位の縄文が施される。3は、口縁部片。無文を呈する口唇。1条の隆帯が貼付され胴部と区分される。地文は、RL横位の縄文が施される。4は、横位の沈線が1条めぐる。地文にLR横位の縄文が施される。5は、胴部片であり、磨消し縄文による懸垂文が施され、地文には、RL縦位の縄文が充填される。6は、RL横位の縄文が施される胴部片である。沈線が施される。7は、胴部片。LR縦位の単節斜縄文を地文とし、3本一組とする沈線が施される。8は、縦位の条線文が施される胴部片である。9は、ヘラ状の工具で縦位の研磨がみられる。

第208号土坑

A-1グリッドに位置し、第173号土坑、第175号土坑を切り、第172号土坑に切られている。半円形を呈し、底面は凹面をなし、壁はやや外傾する。長径1.44m、短径0.85m、深さ0.60mを測る。

第213号土坑

B-2グリッドに位置し、第182号土坑と接しているが前後関係は不明である。不定形を呈し、底面は凹面をなし、壁は直線的に立ち上がる。長径0.71m、深さ0.23mを測る。

・第15地区(第77図)

本地区は調査区の南東隅、B-1、B-2、C-1、C-2グリッドに位置し、東側および南側は調査区外となる。本地区において記載する遺構は土坑9基である。

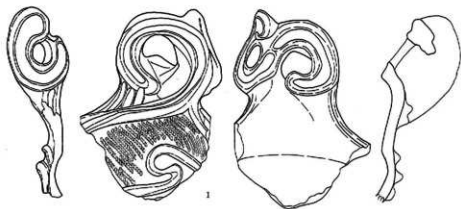
第160号土坑

C-1、C-2グリッドに位置し、調査区外にまたがっており、第149号土坑に切られている。全体の形状と規模は不明であり、底面は平坦で、壁は大部分落下しているが袋状を呈するものと思われる。深さ0.49mを測る。

第161号土坑

B-1、B-2、C-1、C-2グリッドに位置している。開口部はふくらんだ三角形を呈する

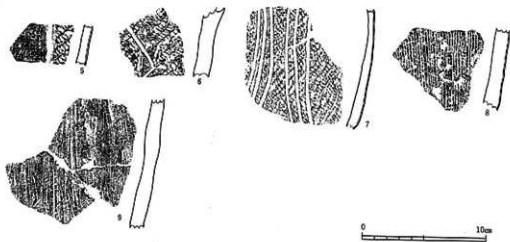
SK177



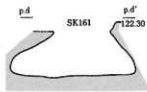
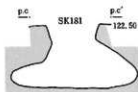
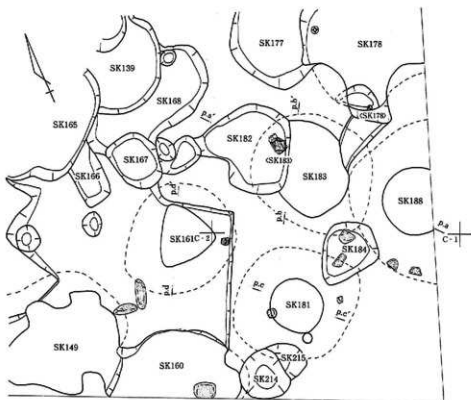
SK178



SK 178-No1 · 2 = 0 20cm



第76图 第177号·178号土坑出土土器



1. 赤褐色土 (ローム粒・凝灰岩粒少量含む)
2. 黄褐色土 (ロームB多量含む)
3. 暗灰褐色土 (ロームB・凝灰岩粒少量含む)
4. 暗灰褐色土 (ロームB・ローム粒多量含む)
5. 暗赤褐色土 (ローム粒・IP少量含む)

第77図 第15地区 遺構図

が崩落のため旧状は不明であり、底面はややゆがんだ円形となる。底面は平坦であり、壁は急角度で内傾する袋状である。遺物はいずれも底面から0.20~0.60m浮いた状態で出土した。開口部径0.95m、底面長径1.89m、同短径1.65m、深さ0.81mを測る。

出土土器（第78図1~4）

1は、深鉢形土器の口縁部片である。RL横位の縄文を施文された隆帯によって区画された楕円形区画文を有する。区画内は、隆帯下に、波状沈線が巡らされ縄文が充填されている。2は、貼付した隆帯下に、2条の角押文が施される。3は、地文に縄文が施される。外面1孔、内面2孔を有する。縦位・横位の沈線文、波状・渦巻の沈線文が施される。4は、波状口縁部の波頂部であり、地文はRL横位の縄文、隆帯によって区画文が施され、斜位の条線文で充填される。

第181号土坑

C-1グリッドに位置し、開口部は円形、底面はややゆがんだ円形を呈する。壁は急角度で内傾して立ち上がり、開口部下で直立もしくはやや外傾する。開口部径0.88m、底面長径2.17m、同短径1.86m、深さ1.00mを測る。遺物は底面から0.05~0.30m浮いた状態で出土した。

出土土器（第78図1~5・第79図6~11）

1は、浅鉢形土器の口縁部片である。端部には無文の隆帯が貼付。頸部に交互刺突文が施された幅広の隆帯が、波状に貼付される。2は、口縁部片で逆「T」字形に隆帯が貼付。隆帯上には、刻目が施される。RL縦位の縄文が施される。3は胴部片。地文にRL縄文が施される。縦位の3本単位の平行沈線文が施される。4は、地文にLRの縄文が施される。背を割られた隆帯がゆるやかなカーブをもちながら貼付する。5は、胴部片である。胴部に縦位の数本の条線文と、縦位の数本の波状文が施された後に、横位の隆帯が貼付。6は、胴部片。地文にRL横位の縄文が施され、直線・波状沈線文がみられる。7は、口縁部片。無文を呈する隆帯が貼付。隆帯下には、2条の沈線による波状文が施される。8は、胴部片であり、地文にLR縦位の縄文が施され、縦位のナデによって磨消しされる。9は、地文にRL横位の縄文。2条の沈線による渦巻文が施される。10は、口縁部片である。端部は、幅広の無文を呈する。地文にRL縦位の縄文が施され、ゆるやかなカーブをもち隆帯が貼付。11は、波状口縁部の破片。地文に羽状縄文。隆帯によって区画文が施され、隆帯下に角押文がみられる。

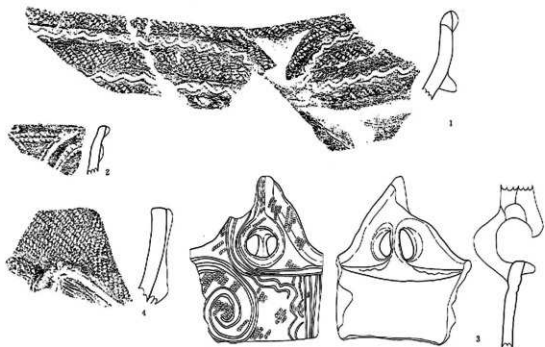
第182号土坑

B-1、B-2に位置し、第183号土坑を切っている。不定形を呈し、底面は平坦で壁は直立する。長径1.48m、短径1.41m、深さ0.38mを測る。

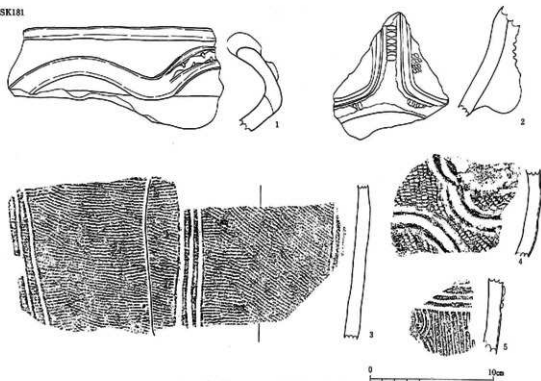
第183号土坑

B-1グリッドに位置し、第188号土坑を切り、第182号土坑に切られている。開口部、底面ともに不整な円形を呈し、底面は平坦で壁は急角度で内傾する。底面直上から完形の深鉢形土器（第79図-1）が出土している。開口部長径1.58m、同短径1.22m、底面長径2.14m、同短径1.74m、深さ0.72mを測る。

SK161



SK181



第78图 第161·181号土坑出土土器

0 10cm

出土土器（第79図1～6）

1は、頸部上半及び、口縁部を大きく欠損する阿玉台式の深鉢形土器である。胴部文様は「X」字状文が交差し、その交差部分が、貫通した小突起となる。隆帯に沿って沈線文が施され、区画内には波状沈線が施文される。胴部下端にも1条の隆帯が巡らされ、以下は、研磨され、無文である。2は、端部に横位の平行沈線が施された口縁部片である。3は、地文にRL縦位の縄文。縦位の波状沈線文が施される。4は、縄文が施された隆帯が貼付。それによって、無文帯と縄文とを区分される。5は、地文にRL横位の縄文が施され、横位の平行沈線文間に、波状の沈線文を有する胴部片である。6は、地文にRL縦位の縄文が施され、ナデによって磨消されている。

第184号土坑

B-1, C-1グリッドに位置し、不整四角形を呈す。底面は鍋底状、壁は外傾しつつ立ち上がる。長径1.12m、短径0.99m、深さ0.21mを測る。

出土土器（第80図1）

1は、把手を有する土器。LRの縄文が施された隆帯が、区画された楕円形文と、貫通口を有する把手が貼付する。隆帯下を沈線が走り、波状沈線文と縄文が充填されている。

第188号土坑

B-1, C-1グリッドに位置し、第138号土坑に切られている。一部が調査区外に出ているが、開口部、底面ともに円形を呈するものと思われる。底面は微少な起伏を有し、壁は非常に急角度で内傾しており、断面は扁平な袋状を呈する。開口部径1.08m、底面径2.62m、深さ0.84mを測る。

出土土器（第80図1～3）

1・2は、無文を呈する口縁部片である。3は、無文を呈する底部近辺の破片である。

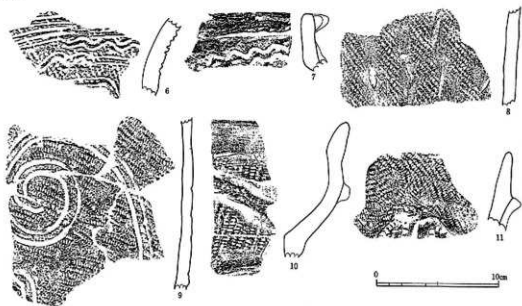
第214号土坑

C-1グリッドに位置し、第215号土坑を切っている。第160号土坑とは接しているが前後関係は不明である。不整な円形を呈し、底面は凹面をなし壁は外傾して立ち上がる。径0.82m深さ0.36mを測る。

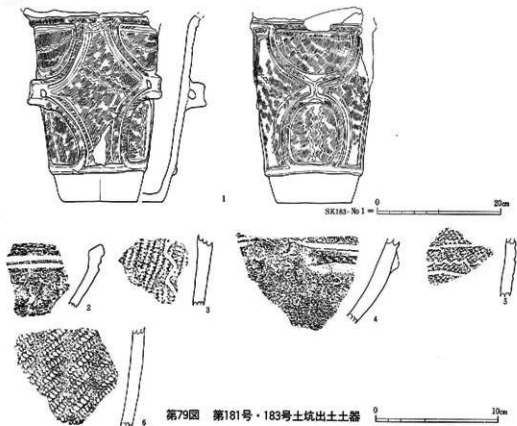
第215号土坑

C-1グリッドに位置し、第214号土坑に切られている。切り合いによって本来の形状は不明であるが、不整円形を呈するものと思われ、底面は凹面をなし壁は外傾して立ち上がる。深さは0.21mを測る。

SK181

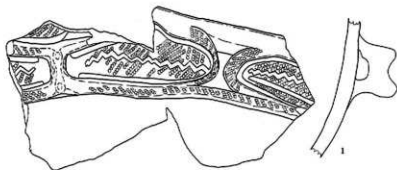


SK183

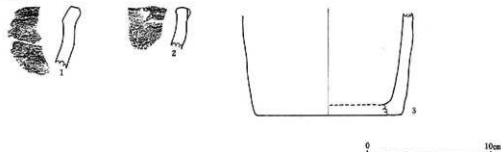


第79图 第181号·183号土坑出土土器

SK184



SK188



第80図 第184号・188号土坑出土土器

2 その他の出土遺物（土製円盤・線刻土版・石器・表土中出土の遺物）

・土製円盤・線刻土版

土製円盤は、遺構内より6点、遺構外（表土・グリッド出土）から10点、合計16点、また、線刻土版は、遺構内（第54号土坑）より2点出土した。出土地点及び形状等については、第3表に示したとおりである。

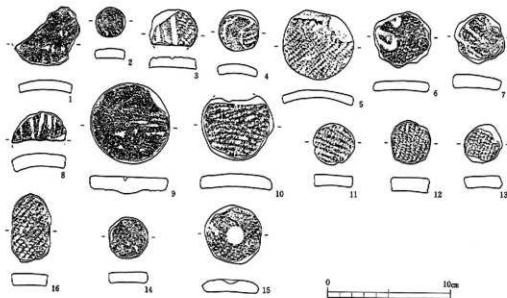
・土製円盤（第81図1～16）

土製円盤については、いずれも土器の破片を整形したものであり、中には赤色塗彩したもの、また、中央部に円形盲孔を有するもの等も認められる。周縁部は粗く調整剝離を加えたものや更に研磨を加えたものがあり、平面形から2種に分類できる。すなわちⅠ類・縦横の長さがほぼ等しく、角のとれた円形を呈するもの。Ⅱ類・縦横の長さをかえ、いずれかを長くすることにより楕円形状を呈するもの。である。文様から阿玉台式期のもの及び粗之内Ⅰ式期にかけての所産と思われるものが認められる。

・線刻土版（第82図1・2）

本調査地区の第9地区第54号土坑より、両面に線刻の施された土版が2点出土した。そのうちの1点はほぼ完形品で一部火を受けた痕跡が認められる。何を描いたかは不明（動物か？）であるが、

先の尖ったものでしっかりと（約1mmの深さで）描かれている。



第81図 土製円盤拓影図



第82図 線刻土版実測図

図番	出土層位	形	径	厚	最大径	最大厚	重量	時期	文様	備考
81-1	第7層	円形	14.7	0.7	15.2	0.7	17.3	縄文	無文	土色多し
2	SK 179	円形	3.3	0.5	3.5	0.5	3.5	*	点刻文	
3	SK 112	円形	13.0	0.5	14.5	0.5	14.5	中徳期	縄文系、 点刻文	
4	SK 141	円形	3.3	0.5	3.5	0.5	3.5	*	縄文系、 点刻文	
5	第1層	円形	3.3	0.7	3.5	0.7	25.7	中徳期	縄文系	土色多し
6	*	*	4.5	0.7	4.8	0.7	15.1	縄文	縄文系、 点刻文	
7	*	*	4.1	0.8	4.4	0.8	11.5	*	縄文系、 点刻文	
8	*	*	2.0	0.2	2.2	0.2	12.3	*	点刻文	
9	*	*	4.5	0.4	4.8	0.4	10.1	*	無文	土色多し
10	第2層	透孔板	14.0	1.0	14.0	1.0	26.4	中徳期	縄文系、 透孔	
11	第1層	円形	3.3	0.5	3.5	0.5	11.8	*	縄文系、 点刻文	
12	SK 134	円形	2.5	0.2	2.7	0.2	15.1	*	縄文系、 点刻文	
13	SK 20	円形	3.1	0.1	3.3	0.1	9.8	*	縄文系、 点刻文	
14	第1層	円形	3.3	0.2	3.5	0.2	22.0	*	縄文系、 点刻文	
15	SK 152	円形	4.7	0.4	5.0	0.4	13.3	*	縄文系、 点刻文	内面透孔
16	第1層	円形	5.5	0.3	6.0	0.3	23.5	中徳期	縄文系、 点刻文	
82-1	SK 14	円形	5.8	0.7	6.3	0.7	47.8	中徳期	*	線刻文
2	*	*	15.5	1.6	16.5	1.6	38.0	*	(?)	

第3表 土製円盤・線刻土版一覧表

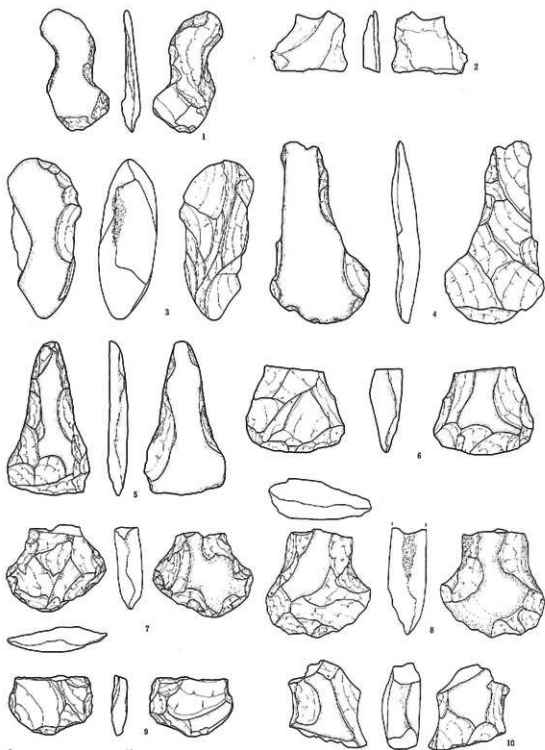
・石器

・打製石斧（第83図1～10・第84図11～18・第85図19・20）

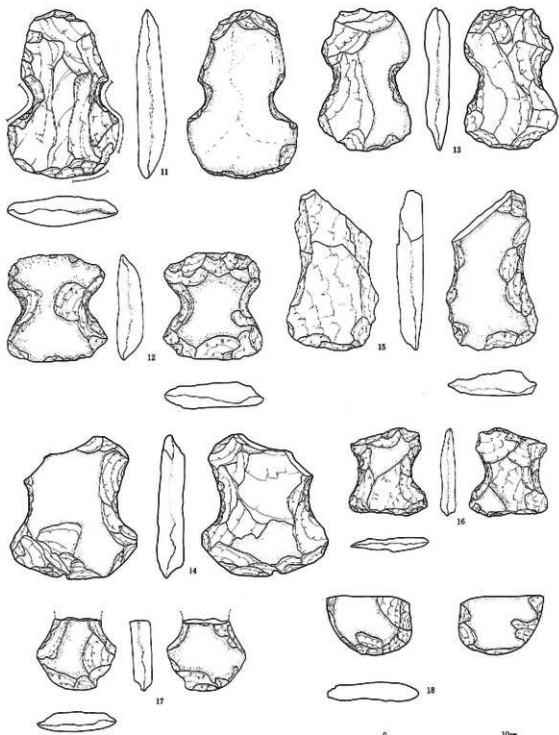
打製石斧は、完形品・破損品・未製品を併せて計20点出土した。本調査地区の東側部分から主に出土し、これらは、その片面に自然面を残すものが多い。形状は、いわゆる分銅形を呈するもの（A類）が多く、撥形を呈するもの（B類）もわずかだが認められる。また、比較的厚手でこれらに属さないもの（C類）も2点出土している（第4表）。打製石斧に用いられた石質は、流紋岩が多く、次いで安山岩・ホルンフェルスが挙げられる。

第4表 打製石斧一覧表

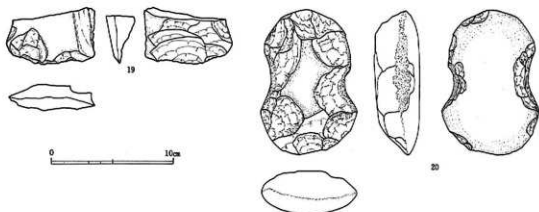
No	出土地区	層位	形式	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	図版番号
1	SK29	埋土1層	A	100	48	12	59.3	ホルンフェルス	83-1
2	SK29	埋土1層	A	(49)	(61)	12	(37.7)	安山岩	83-2
3	SK118	埋土	C	(129)	(58)	42	(372.08)	砂岩(ホルンフェルス)	83-3
4	SK129	⊕	A	(151)	80	25	(260.5)	ホルンフェルス	83-4
5	SK133	⊕	B	123	66	15	126.0	流紋岩	83-5
6	SK152	埋土上層	A	(68)	83	25	(174.7)	⊕	83-6
7	SK172	埋土	A	(69)	81	22	(128.3)	⊕	83-7
8	SK173	⊕	A	(87)	85	32	(251.7)	石英覆岩	83-8
9	SK183	⊕	A	(48)	67	10	(42.4)	流紋岩	83-9
10	SK185	⊕	A	(69)	(62)	30	(153.6)	砂岩(ホルンフェルス)	83-10
11		表土	A	135	87	24	319.9	ホルンフェルス	84-11
12		⊕	A	86	89	21	(208.7)	安山岩	84-12
13		⊕	A	113	74	22	155.7	⊕	84-13
14		⊕	A	(116)	102	23	(292.6)	⊕	84-14
15		⊕	A	(128)	83	21	(230.8)	ホルンフェルス	84-15
16		⊕	A	(70)	62	12	(61.4)	流紋岩	84-16
17		⊕	A	(58)	63	16	(72.5)	⊕	84-17
18		⊕	A	(52)	64	15	(73.9)	⊕	84-18
19		⊕	A	(48)	(71)	22	(66.7)	ホルンフェルス	85-19
20		⊕	C-II	117	77	36	435.8	安山岩	85-20



第83圖 打製石斧實測圖(1)



第84圖 打製石斧實測圖(2)



第85図 打製石斧実測図(3)

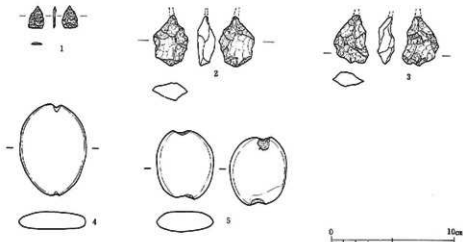
・石鏃・石錐・切目石錐・礫石錐 (第86図1～5)

調査地区内より、石鏃1点、石錐2点、切目石錐1点、礫石錐1点が出土した。いずれも表土中より見つかったものである。石鏃については、平面形が二等辺三角形形状を呈し、基部が平坦なもので石質は黒曜石である。石錐は、2点とも先端部を欠損しているが、錐部の調整剝離は、比較的粗く両側から施されている。切目石錐は、長軸の両端に切目を有し、礫石錐も長軸に対して垂直方向から軽く打撃を加えられている。

石 鏃										切目石錐									
No.	出土層位	種別	形状	長さ	幅	厚さ	重量	石質	調査番号	No.	出土層位	種別	形状	長さ	幅	厚さ	重量	石質	調査番号
1	表土	鏃	三角	22	22	2	0.28	黒曜	石 80-1	1	表土	錐	卵	50	25	10	100.9	砂	石 80-4

石 錐										礫石錐									
No.	出土層位	種別	形状	長さ	幅	厚さ	重量	石質	調査番号	No.	出土層位	種別	形状	長さ	幅	厚さ	重量	石質	調査番号
1	表土	錐	三角	38	23	11.8	71.0	打製	石 80-2	1	表土	錐	卵	45	17	22.8	100.0	礫	石 80-3

第5表 石鏃・石錐・切目石錐・礫石錐一覧表



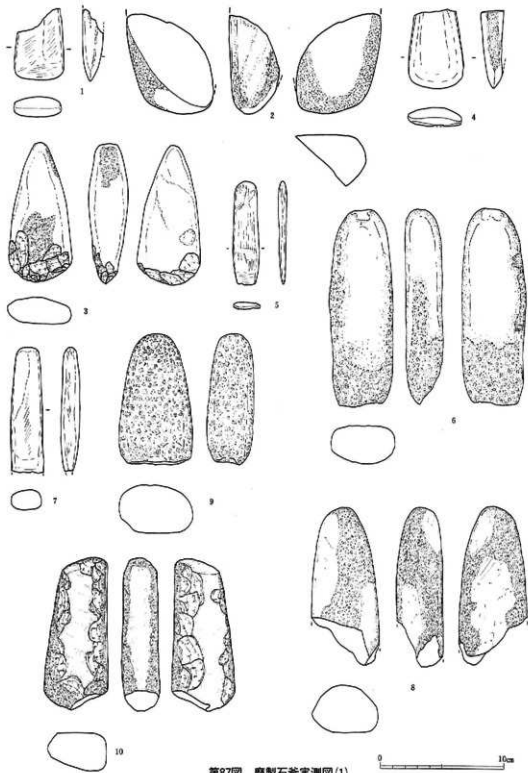
第86図 石鏃・石錐・切目石錐・礫石錐実測図

・磨製石斧（第87図1～8・第88図9～20）

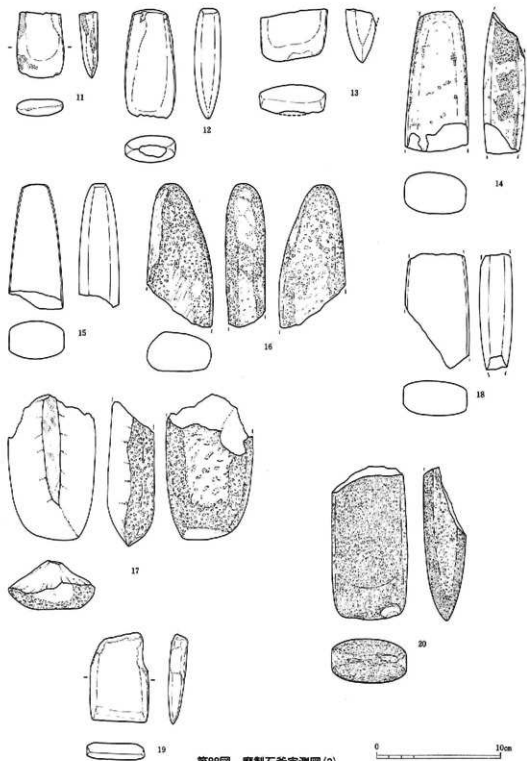
磨製石斧は、遺構内より17点、遺構外（表土）から3点、合計20点が出土した。石質は、ホルンフェルスが最も多く、次いで閃緑岩、安山岩、玢岩等の他、アルビタイトも認められる。形状は、側面が明瞭な稜線によって画され、断面が長方形に近く中央部が凸レンズ状に緩く膨らむ「定角石器」の大形のもの、小形のもの他、断面形が楕円形状を呈し、刃部が蛤刃をなす、いわゆる乳棒状磨製石斧も認められる。遺存状態は残存する磨製石斧の部位により、刃部欠損（4点）、基部欠損（8点）刃部、基部両方欠損（2点）に分けられる。出土地点及び大きさ、重量等は第6表に示したとおりである。

第6表 磨製石斧一覽表

No	出土地区	層位	形式	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	図版番号
1	SK 54	下層		(57)	40	16	(48.3)	ホルンフェルス	87-1
2	SK 74	埋土		(96)	61	39	(211.2)	閃緑玢岩	87-2
3	SK 74	◇		112	50	32	219.6	ホルンフェルス	87-3
4	SK 91	埋土 1層		(62)	44	19	(76.9)	緑泥片岩	87-4
5	SK 92	埋土		83	21	8	17.7	ホルンフェルス	87-5
6	SK 106	◇		157	51	32	421.9	玢岩	87-6
7	SK 118	◇		(100)	26	16	(71.4)	ホルンフェルス	87-7
8	SK 129	◇		(132)	54	39	(351.7)	閃緑玢岩	87-8
9	SK 148	◇		(105)	59	40	(381.6)	凝灰岩	88-9
10	SK 149	◇		(123)	50	34	(326.9)	ホルンフェルス	88-10
11	SK 149	◇		(51)	39	16	(50.0)	閃緑玢岩	88-11
12	SK 150	◇		(86)	42	22	(134.8)	蛇紋岩	88-12
13	SK 153	◇		(41)	(52)	(27)	(74.9)	輝緑岩	88-13
14	SK 160	◇		(113)	51	35	(326.8)	玢岩	88-15
15	SK 173	◇		(100)	(44)	32	(201.2)	ホルンフェルス	88-15
16	SK 179	◇		(117)	52	33	(265.3)	安山岩	88-16
17	SK 188	◇		(118)	69	39	(425.6)	安山岩	88-17
18		表土		(92)	(51)	29	(198.6)	ホルンフェルス	88-18
19		◇		(71)	49	15	(87.5)	アルビタイト	88-19
20		◇		(123)	61	38	(375.8)	ホルンフェルス	88-20



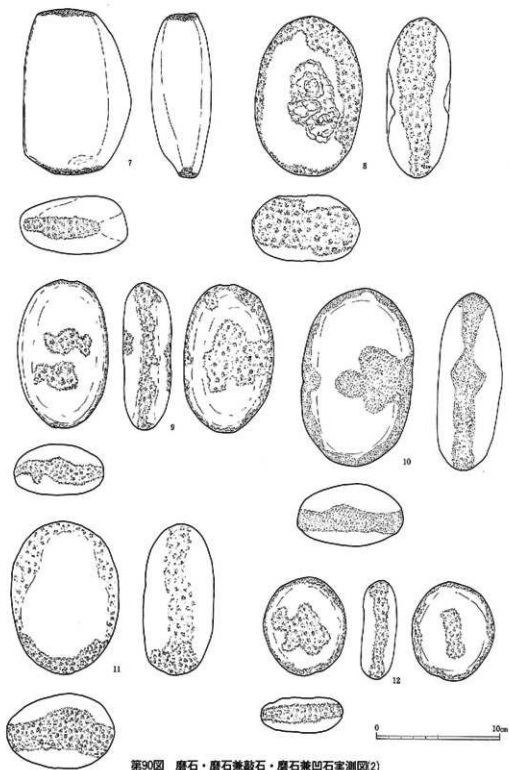
第87圖 磨製石斧実測図(1)



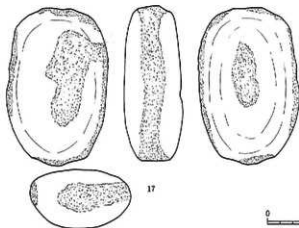
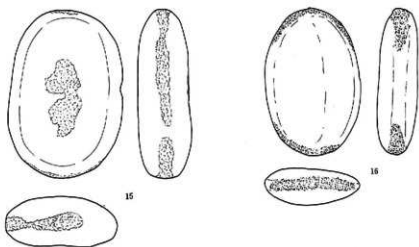
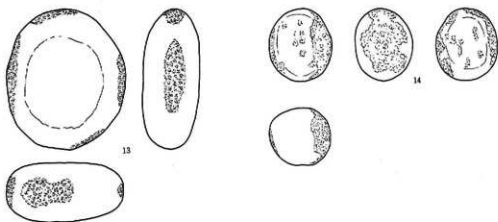
第88图 磨製石斧实测图(2)



第89圖 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石実測圖(1)



第90圖 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石実測図(2)



第91圖 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石実測圖(3)

・磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹み石（第89図1～6・第90図7～12・第91図13～17）

これらには、磨痕跡及び敲き痕跡が認められ、さらに凹み部を有するものも認められる。また平面形及び断面形の特徴により、・平面形が楕円形に近く、断面形が扁平な楕円形に近いもの。・平面形が円形に近く、断面が扁平な楕円形に近いもの。・球形に近い形状のもの等に分けられる。石質は、第153号出土（第90図7）が玢岩の他は何れも安山岩である。

第7表 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石一覧表

No	出土地区	層位	形式	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石質	図版番号
1	SK 6	埋土1層		82	73	63	470.4	安山岩系	89-1
2	SK 54	埋土		153	94	45	876.7	◇	89-2
3	SK 110	床面直上		97	85	41	489.6	◇	89-3
4	SK 110	床面直上		(73)	92	35	(314.4)	◇	89-4
5	SK 147			149	89	41	861.6	◇	89-5
6	SK 149	埋土		86	72	33	295.3	◇	89-6
7	SK 153	◇		134	88	46	877.7	玢岩	90-7
8	SK 153			130	85	52	564.3	安山岩	90-8
9	SK 153			118	71	41	495.1	◇	90-9
10	B-7 G	表土		143	90	51	930.6	◇	90-10
11	B-7 G	◇		124	86	58	785.7	◇	90-11
12	C-2 G	◇		79	65	28	193.7	◇	90-12
13	C-8 G	◇		113	93	46	808.4	◇	91-13
14		◇		57	50	48	154.0	◇	91-14
15		◇		136	90	42	592.9	◇	91-15
16		◇		117	76	33	456.3	◇	91-16
17		◇		77	80	46	725.2	◇	91-17

・特殊敲石（第92図1～7）

棒状あるいは、大形扁平な形をして、その胴部や端部に加工痕・使用痕跡が認められるものが7点出土した。これらは、次の3類に分けることができる。A類・刃部を削出し、そこに細かい敲痕跡が観察できるもの。B類・側縁部に敲痕跡のみ観察できるもの。C類・大形扁平で側縁部に敲痕跡を有するもの。石質は、安山岩2点、ホルンフェルス2点、砂岩2点、玢岩1点である。



第92图 特殊敲石实测图

第8表 特殊敵石一覽表

No	出土地区	層位	形式	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	図版番号
1	SK 28	土	B	132	34	29	216.5	安山岩	92-1
2	SK 54	*	A	150	48	29	344.8	ホルンフェルス	92-2
3	SK 74	*	B (66)	25	17	(51.6)	砂	岩	92-3
4	SK 110	*	A	116	58	23	214.5	安山岩	92-4
5	SK 110	*	C (162)	110	37	(107.7)	ホルンフェルス		92-5
6	SK 118	*	A (83)	(35)	17	(75.4)	砂	岩?	92-6
7	SK 161	*	A (112)	37	20	(151.5)	砂	岩?	92-7

・石皿・台石 (第93図1～3・第94図4～6)

石皿, 台石は第9表に示すように計6点が出土した。このうち第94図のNo 4に関しては, 表面が石皿, 裏面には蜂の巣状の凹みが認められ, また, 第93図のNo 3に関しては, 一部欠損しているものの4つの脚を有している。石質は第71号土坑出土のものが珩岩の他は, いずれも安山岩である。大形, 小型のものがあり, 形状も・幅の広い平坦な縁を有し, 磨面の横断面が扁平な「U」字状を呈するもの。・ほとんど縁にあたる部分を有さず, 磨面の横断面が浅く凹むか, ほとんど平坦なもの。等に分けられる。

第9表 石皿・台石一覽表

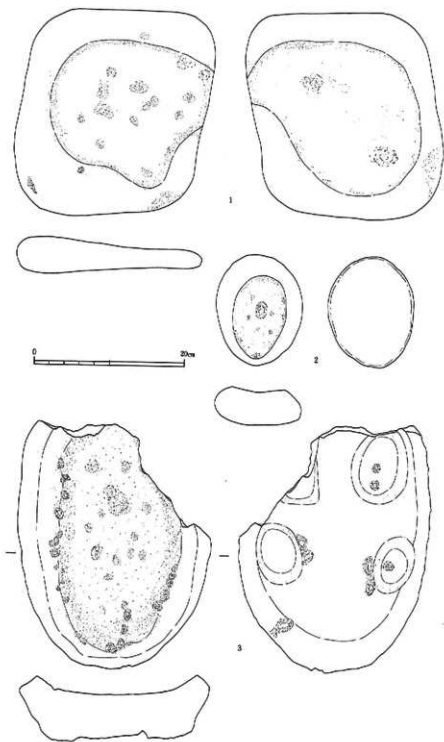
No	出土地区	層位	形式	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	図版番号
1	SK 71			276	239	54	6.76	珩岩	93-1
2	C-2			145	115	52	1.14	安山岩	93-2
3		表土		(329)	(257)	89	7.14	+	93-3
4		表土		(255)	(187)	(98)	4.36	+	94-4
5		表土		(297)	(80)	66	1.95	+	94-5
6		表土		331	268	100.2	12.91	+	94-6

・蜂の巣石 (第95図1～5)

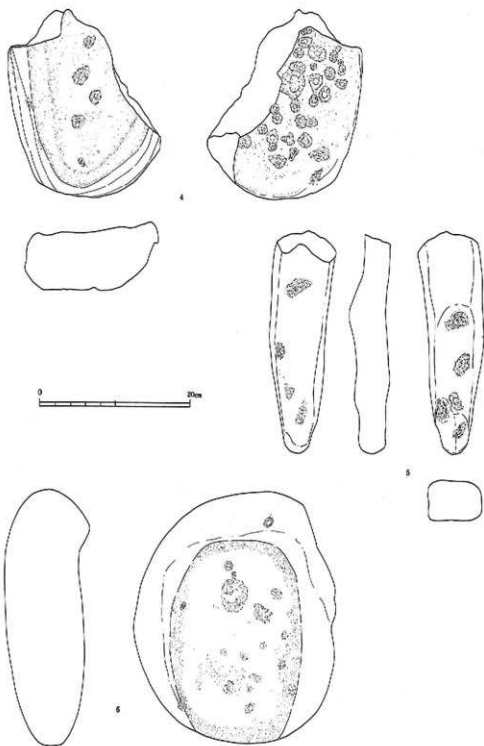
本調査区から5点出土している。完形品1点, 破損品4点である。表裏に多数の凹みを有するもの, 表面だけのものとがあり, 凹みも深いもの, 浅いものとがみうけられる。石質はいずれも安山岩である。

第10表 蜂巣石一覽表

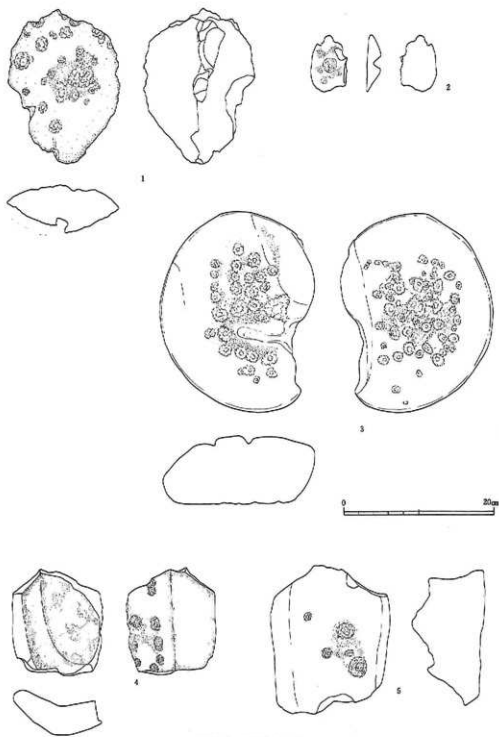
No	出土地区	層位	形式	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	図版番号
1	SK 137	土		(203)	(145)	(67)	1.17	安山岩系	95-1
2	C-8			(74)	(48)	(21)	0.6	+	95-2
3		表土		270	209	92	4.19	+	95-3
4		*		(143)	(110)	(66)	4.36	+	95-4
5		*		(195)	(152)	(88)	3.36	+	95-5



第93圖 石皿実測図(1)



第94图 石皿・台石実測图(2)



第95图 蜂巢石实测图

・磨斧原石・砥石

本調査区の遺構内、外より磨斧の原石と思われるもの2点、また、砥石が3点出土した。出土地点及び大きさ等は第11表に示したとおりである。石質は、磨斧原石が玢岩及び安山岩、砥石が砂岩及び玢岩である。

第11表 磨斧原石一覧表

No	出土地区	層位	形式	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	図版番号
1	SK 129			169	64	31	561.5	玢岩	
2		表土		152	72	42	716.2	安山岩	

第11表 砥石一覧表

No	出土地区	層位	形式	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	図版番号
1	SK 129	埋土		(95)	57	38	(105.1)	砂岩	
2		表土		(77)	66	16	(132.4)		
3		*		(83)	83	33	(300.4)	玢岩	

・表土中出土の土器

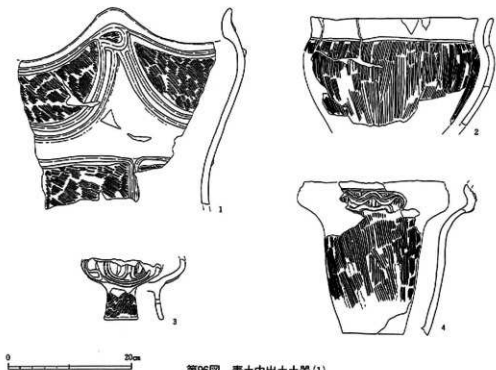
ここで記述する土器は、現地地表下0.3~0.7mの黒褐色土層中から表土除去の過程で出土したものを中心に、一部耕作土(黒色土)中から出土したものも含めており、いずれも遺構として認定できない場所から出土している。紙数の関係もあり、表土中の遺物すべてを掲載することが不可能であったため、完形に近い大形破片4点を除くその他の小破片については、遺構よりの出土が少ない後期の土器を記載している。

第96図1は波状口縁を有する深鉢形土器の破片である。胴部から外傾気味に立ち上がり、口縁部付近は内湾し、波頂部はほぼ直立する。口縁に沿って断面三角形の隆帯が付され、波頂部では隆帯と凹線とで円形文を作る。円形文から「八」の字状に2条1対の隆帯が派生して区画文をなしており、LRの縦位回転による単節斜縄文が充填される。胴部は縦横の隆帯によって区画され、やはりLR縦位の単節斜縄文が施文される。色調は淡橙色を呈し、胎土に白色砂粒を含む。現存高30.3cmを測る。

第96図2は口縁部が外反気味にほぼ直立する鉢形土器である。口縁部は無文で横位の研磨が施され、下端は浅い凹線状をなしている。胴部は球形となって、縦位の櫛歯状の条線が施される。条線は原体幅約2.5cm、2~3mmの間隔で、上下2~3段に施文されている。内面には丁寧な横位の研磨が加えられる。口縁部の約1/3、胴部の約1/3および底部を欠損する。色調は暗赤褐色を呈し、肥土に少量の砂粒を含む。口径(復元)26.8cm、器高(現存)17.0cm、最大径(復元)28.2cmを測る。

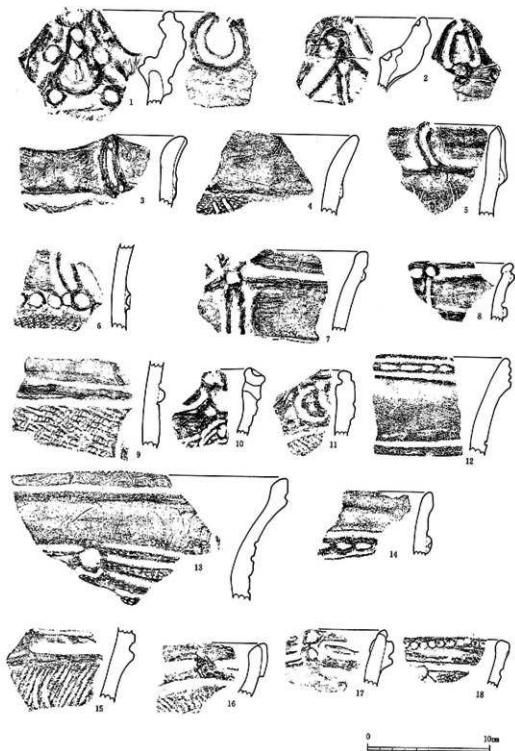
第96図3は台付浅鉢形土器で口縁部を欠損する。鉢部は3単位の弧状の隆帯とそれに沿う沈線によって半円形の区画文を作り、その内部に沈線による「U」字状の文様を2単位ずつ充填する。区画文間には沈線によって逆「J」の字状の文様を配する。台部にはRL縦位回転による単節斜縄文を施し、2個の対向する小孔を穿っている。色調は赤褐色を呈する。器高(現存)9.8cm、底径5.3cmを測る。

第96図4は深鉢形土器で、残存率は約1/4である。口縁部文様帯は縦位の沈線が多数施され、波状の隆帯が2段に付され上位の隆帯は背面に沈線を有する。胴部には縄文が施される。色調は暗灰褐色～淡橙色を呈し、胎土に少量の白色砂粒、金雲母を含む。器高(現存)24.2cmを測る。

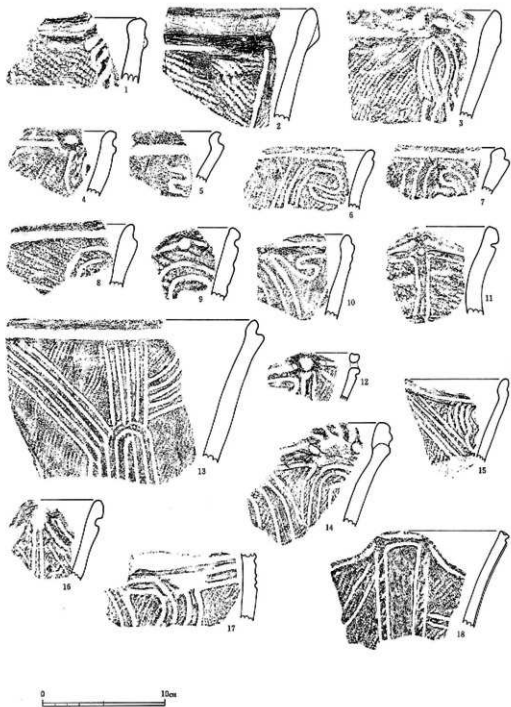


第96図 表土中出土土器(1)

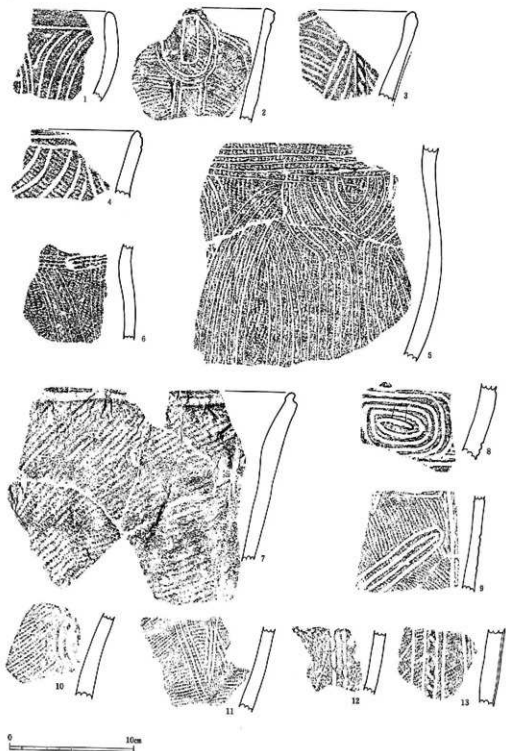
第97図1～第100図4は堀之内I式に属すると思われる土器である。そのうち第97図1～4は、口縁部に無文帯を有し「ノ」の字状貼付文や円形刺突文が施され、口縁部区画線が隆帯で、波頂下に単位区画文をもつと考えられる。また第97図5～6は「ノ」の字状貼付文や円形刺突文をもつものの、単位区画文が見られない粗製土器である。第97図7～9は口縁部区画線が隆帯と沈線によるものである。第97図10～14は口縁部区画線から隆帯が失われ、沈線のみが施されているものである。第97図15～第98図1は肥厚した無文の口縁部に幅広の沈線を有する。そのうち18は口縁部無文帯の上に刺突が施され、1は口縁に1条の太い沈線を有す。第98図2～3は断面三角形に肥厚した土器である。また第98図4～12は口縁部に1条の沈線と区切刺突文をもち、その下に単位区画文が施される一群である。第98図13～17は口縁が肥厚せず、単位区画文間に連結文を施す土器である。また



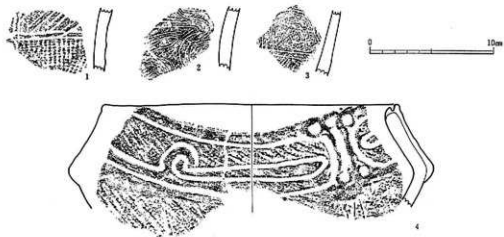
第97圖 表土中出土土器(2)



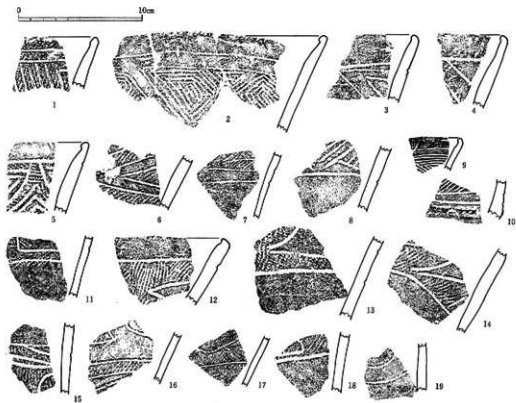
第98圖 表土中出土土器(3)



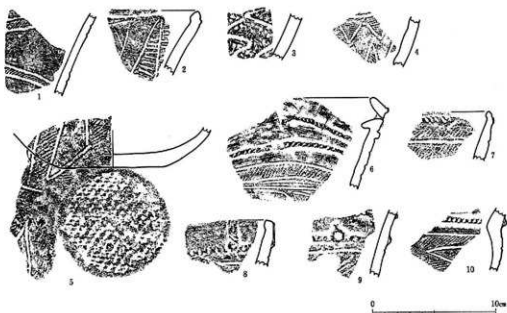
第99图 表土中出土土器(4)



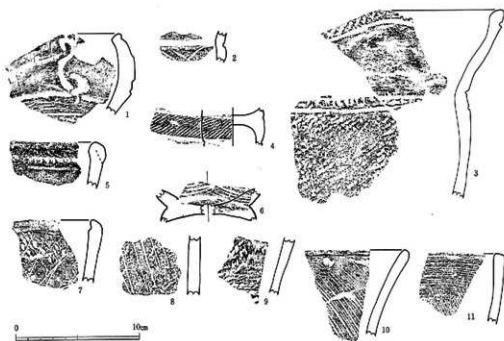
第100圖 表土中出土土器(5)



第101圖 表土中出土土器(6)



第102圖 表土中出土土器(7)



第103圖 表土中出土土器(8)

第98図18～第99図4は単位区画文間に連結文を施すが、39のように沈線を充填するものもあり、37は口縁部がやや内湾する。第99図5～6は胴部が球形を呈する深鉢形土器の胴部片で、集合沈線文で区画文をつくる。第99図7～第100図3はいずれも堀之内Ⅰ式期の粗製土器片および胴部片である。第100図4は浅鉢形土器の口縁部片である。復元口径24.2cmを測る。

第101図1～第102図10は堀之内Ⅱ式期のものと考えられる土器片である。第101図1～第102図4は、ラッパ状に開く深鉢形土器で、第101図1～10は三角形区画文を有するもの、第101図11～第102図4は幾何学形の文様を有するものである。第102図5は胴部に丸みを帯びる深鉢形土器の底部片で、胴部には幾何学形の文様をもつ。また第102図6～10は刻目を有する細い隆帯文が施されるもので、6～9は胴部がラッパ状に開くもの、10は胴部に丸みをもつ深鉢形土器の破片と思われる。

第103図1～11は加曾利BⅡ～安行Ⅰ式期のものと考えられる土器片である。1～8は精製土器で、1～2は加曾利BⅡ式期、3～4は加曾利BⅢ式期、5～6は安行Ⅰ式期の所産と考えられる。6は台部、8は底部、その他は深鉢形土器の口縁部と思われる。7～11は粗製土器の口縁部および胴部の破片であり、11は安行Ⅰ式併行の東北系の粗製土器と考えられる。

V. ま と め

以上のように、今回の竹下遺跡の発掘調査は、本調査490㎡、確認調査550㎡という限られた範囲の調査ではあったが、住居跡1軒、土坑217基を検出することができた。以下にその概要を述べてまとめたい。

土器について

昭和28年の宇都宮大学による調査の際には、縄文時代中期の所産である大形の完形土器とともに、後期に属すると考えられる多量の土器片が出土している^(註1)。今回の調査地区は宇都宮大学調査地のすぐ北側に隣接するという点で大いに興味が持たれるところであったが、結果として出土土器の大半は中期のものであった。

今回の調査では、東地区から検出された遺構（住居跡・土坑）の総数は218を数え、そのうち136から遺物の出土を見ており、また表土除去の過程でも若干の遺物の出土があった。

量的な面を別にすれば、それらの出土遺物の時期はおおむね縄文時代中期前葉から後期後葉にまたがっている。だが量的な中心は中期中葉にあるものと考えられ、遺構内出土遺物の大部分も中期の所産と考えられる。しかし遺構内出土土器もその多くは異なる時期の土器の混入を指摘することができ、一括資料として取り扱うことには困難な場合が多い。とはいうものの、なかには当地域の縄文時代を考えるうえで、ある程度の資料となり得るものも存在する。

たとえば阿玉台Ⅱ～Ⅲ式と大木7b式の伴出例として第110号土坑出土土器をあげることができ、この一群の土器は、白河市南堀切5号住居跡（大形住居）とほぼ時期を同じくし^(註2)、大田原市湯坂遺跡TⅠ～Vに先行するものと考えられる。また一部に混入はあるものの、阿玉台Ⅳ式期の共伴関係を示すものとして、第149号土坑・第162号土坑の出土土器を指摘することができよう。さらに阿玉台Ⅳ式と大木8式の伴出する例として、第118号土坑・第129号土坑出土土器がある。そして破片資料ではあるが、口縁部の区画内に縦位の沈線を充填する一群と東関東系と考えられる縄文を充填する一群の伴出が見られるものとして第22号土坑・第60号土坑の出土土器がある。また阿玉台Ⅳ式に後続する時期でいわゆる中峠式が伴出しており、高根沢町上の原遺跡JD-12とほぼ同時期の資料として第92号土坑出土土器を、それに後続し上の原遺跡JD-19とほぼ同時期で複文の最盛期であるとともに剣先文出現直前の例として第125号土坑出土土器をあげることができる。

後期の土器については、堀之内Ⅰ式期の後半から堀之内Ⅱ式期にかけての良好な資料を得ることができた。とくに第119号土坑出土土器は、少量ではあるものの堀之内Ⅱ式期の一括出土例としてあげることができよう。しかし概して堀之内Ⅰ式期についての資料は少なく、後期の集落の中心は遺跡内の別な地点、とくに今回の調査地区よりも台地の斜面をやや下った部分に求め得る可能性がある。また今回の調査では明確に後期のものと考えられる遺構の検出が少なく、住居跡にいたっては

皆無であったため、遺物の大半は表土中出土の破片資料として採集されている。今後の調査によって遺構の検出を含めて研究の進展が期待される。

特殊な遺物として第54号土坑の埋土中から出土した線刻土版二点をあげることができる。描かれた線刻の内容については不明とするしかないが、同様の線刻が南那須町朝風遺跡採集の石製品に見られることを指摘しておく。

土器の出土状況に関しては、その大半が遺構埋土中に破片として含まれており、いずれも底面からは浮いた状態で出土している。完形に近い土器の一部は土坑底面から検出される例もあり、それらは本文中に特記した。また第118号土坑からは多量の土器片とともに完形に近い形の深鉢形土器が3点出土したが（第54図No17, 18, 19）、中でもNo17の土器は、つぶれた状態ではあるが、口縁部を土坑の底面に密着させ、さかさまになった形状で出土した。口縁部はかなり強く土坑の底面につけられており、底面のローム面にめり込んでいた。他の2点は、それよりもやや上からつぶれて確認されている。

石器について

今回の調査では、下表のように各種の石器が総数80点出土した。遺物の出土状態としては、完形品、破損品の割合がほぼ同じで、層位的には、埋土下層からの出土が多く認められる。組成的には、本遺跡が鬼怒川の左岸丘陵状台地に立地しているにもかかわらず、網漁に関係の深い石器の出土量が極めて少ない他、全体的にも石器の出土量は土器の出土量に比べると少ないと言える。これは、今回の調査範囲内における住居跡の検出が1軒と少なく、検出された遺構のほとんどが土坑であったということにも起因するものと思われる。今後、本地区付近における住居跡群の調査が行われたならば、より具体的な組成等の研究ができるものと思われる。今後の調査に期待したい。なお、本遺跡では、特殊礫石の範囲に入れたが、径が約2～3cmで、その胴部等に加工痕が認められる石製品が出土している。用途は不明であるが、類似するものが、古宿遺跡にも認められる。

器 種	点数	状 態		遺構内・各グリッド出土(出土層位)				表 土
		完形	破損	埋土1層	床面直上	埋 土	その他	
打 製 石 斧	20	10	10	3		7		10
磨 製 石 斧	20	4	16	1		14	2	3
石 鏃	1	1						1
石 錐	2		2					2
切 目 石 錘	1	1						1
礫 石 錘	1	1						1
磨石兼高文石・凹石	17	16	1	1	2	3	7	4
石 風 台 石	6	4	2					2 4
蜂 巣 石	5	1	4			1	1	3
特 殊 礫 石	7	4	3			7		
計	80	42	38	5	2	32	12	29

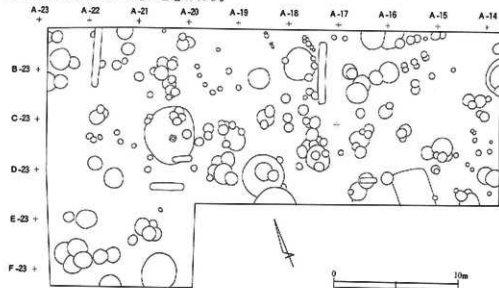
竹下遺跡出土石器組成表

遺跡について

本調査によって確認された遺構は、住居跡1軒、土坑217基、小ピット等である。住居跡は調査地区のほぼ中央部やや西寄りから検出され、土坑、小ピット等は、ほぼ全域から検出されている。特に土坑に関しては、西寄りの部分において単独で存在するものや切り合いも2〜3基のものが存在するが、東へ行くに従い、土坑の数及び土坑の切り合いも著しく増加する傾向が認められる。土坑の形状については、平面形がほぼ円形を呈し、底面がほぼ平坦で、壁が内湾あるいは内傾して立ち上がるものが比較的多く見られた。なお当然のことでもあるが、本調査によって良好な土器資料を得ることのできた土坑については、袋状及びこれに類する形状を呈するものが多く、また遺存状態も良好であるといえる。第22号、60号、92号、110号、118号、129号土坑等がこれに該当する。

集落・土坑の拡がり

今回の調査においては、緊急に建設工事が開始される東側部分について本調査を、また、将来的に建設が予定されている西側部分については遺構確認調査を行なっている。この結果、西側部分についても東側部分同様、多数の土坑の存在、切り合い、及び石囲い炉を有する住居跡等の存在を確認している。(下図)これにより、集落、土坑の拡がり西に延びることは確実となった。また、地形的に、本遺跡が南流する鬼怒川の左岸にあたり、独立丘陵状台地の南側、緩傾斜面上に立地しており、東西がともに崖状をなすという制約を受けることを考えると、拡がりはおもに本調査地区の北側、南側にも延びていくものと思われる。



竹下遺跡西地区遺構配置図

おわりに

竹下遺跡周辺は、古く縄文時代の集落より、目前に広がる飛山城跡に至るまで、数多くの遺跡が存在する地区であるとともに、現在では、宇都宮テクノポリス構想に代表されるように、開発が急速に進行しつつある地区であると言える。ここに、竹下遺跡の調査及び調査報告書を完了するにあたり、これが微力ではあるが、今後の開発に対する、文化財保護を考える上の一助となれば、幸いである。

註1. 堀静夫 1953 『栃木県清原村竹下遺跡発掘調査報告』宇都宮大学郷土史研究班

註2. 根本信孝編 1984 『南堀切Ⅳ—高山・南堀切地区発掘調査報告Ⅳ—』白河市教育委員会

註3. 青木健二 1981 『上の原遺跡発掘調査報告』日本産業史研究所

註4. 木下実氏（南那須町教育委員会）の御教示による。

参考文献

上野修一他 1984 『はなひろく縄文文化』栃木県立博物館

岩淵一夫他 1985 『栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第69集 上欠遺跡』栃木県教育委員会

芹澤清八他 1987 『栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第68集 御城田（本文編）』栃木県教育委員会

写 真 图 版

PL 1



① 竹下遺跡東地区全景（東から）



② 竹下遺跡航空写真（調査前・東から）



③ 竹下遺跡東地区航空写真（完掘状況）



④ 調査前状況（南東から）



⑤ 東地区遺構確認作業（西から）



⑥ 第1・2・3地区遺構調査状況（東から）



⑦ 第4地区付近遺構完掘状況（北から）

PL.5



⑧ 第1・2・3・4・5・6・7地区遺構完掘状況（東から）



⑨ 第2地区遺構完掘状況（北東から）



⑩ 第3地区北東部付近遺構完掘状況（南東から）



⑪ 第3地区南東部付近遺構完掘状況（東から）



⑫ 第6・7地区遺構完掘状況（東から）



⑬ 第8・9・10・11地区遺構完掘状況（東から）



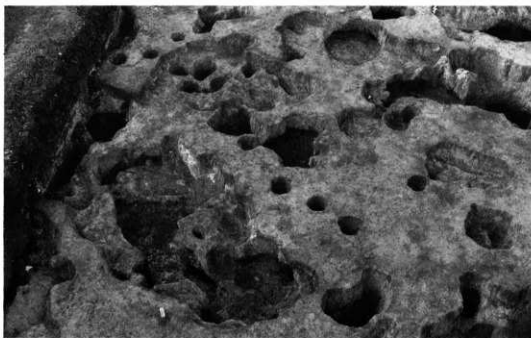
⑭ 第8・9・10・11地区遺構完掘状況（東から）



⑮ 第8・9地区遺構完掘状況（東から）



⑩ 第10地区遺構完掘状況（南東から）



⑪ 第11地区遺構完掘状況（東から）



⑭ 第11地区・第12地区西半部遺構完掘状況（東から）



⑮ 第13地区北半部遺構完掘状況（南東から）

PL11



㊸ 第15地区遺構完掘状況（東から）



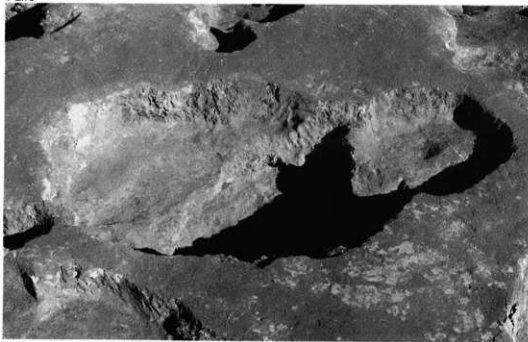
㊹ 第22号土坑完掘状況（東から）



㊦ 第54号土坑完掘状況（西から）



㊦ 第74・91号土坑完掘状況（西から）



㊸ 第108・109・111号土坑完掘状況（南から）



㊹ 第129・130号土坑完掘状況（西から）



⑯ 第147号土坑完掘状況（西から）



⑰ 第162号土坑完掘状況（北東から）



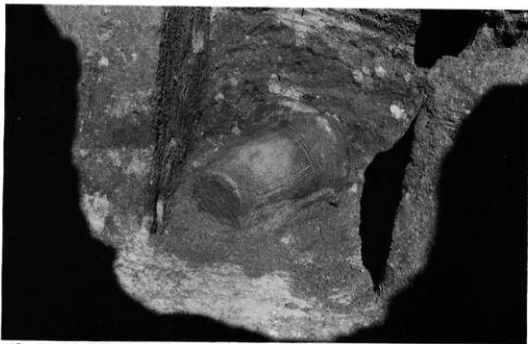
㊦ 第60号土坑遺物出土状況（南から）



㊧ 第64号土坑遺物出土状況（東から）



㊦ 第92号土坑遺物出土状況(1) (南から)



㊧ 第92号土坑遺物出土状況(2) (南から)

PL17



㊸ 第110号土坑遺物出土状況(1) (北から)



㊹ 第110号土坑遺物出土状況(2) (西から)



㊦ 第118号土坑遺物出土状況（東から）



㊧ 第119号土坑遺物出土状況（南から）



㊦ 第152号土坑遺物出土状況(1) (南東から)



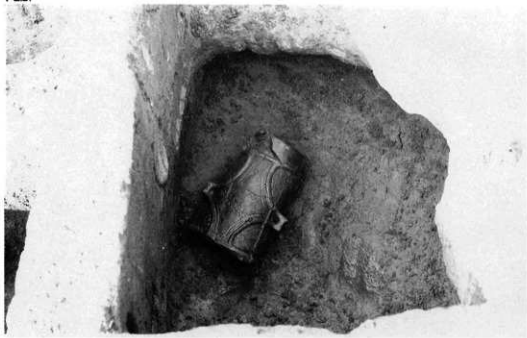
㊧ 第152号土坑遺物出土状況(2) (東から)



㊦ 第178号土坑遺物出土状況(1) (南東から)



㊧ 第178号土坑遺物出土状況(2) (北から)



④ 第183号土坑遺物出土状況（東から）



④ 西地区表土除去状況（東から）



④ 第54号土坑出土土器

39-1



④ 第64号土坑出土土器

32-1



④ 第92号土坑出土土器

34-1



⑬ 第92号土坑出土土器

34-3



34-5

⑭ 第92号土坑出土土器



⑮ 第92号土坑出土土器

34-4



51-1

④ 第105号土坑出土土器



45-2

⑤ 第110号土坑出土土器



45-4

⑥ 第110号土坑出土土器



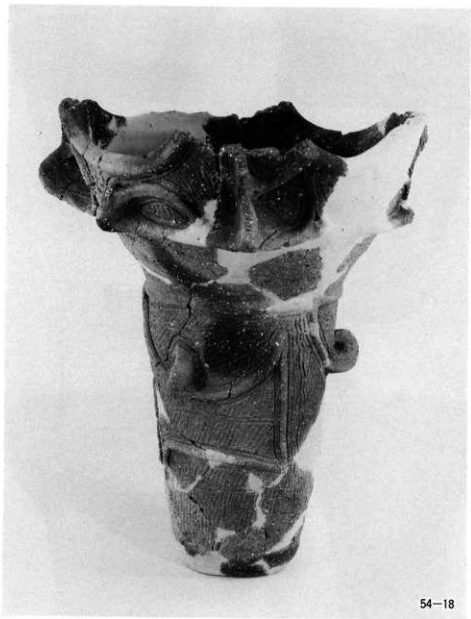
45-1

⑦ 第110号土坑出土土器



54-17

⑤ 第118号土坑出土土器



54-18

⑤ 第118号土坑出土土器



⑤ 第119号土坑出土土器

⑤ 第118号土坑出土土器



⑤ 第125号土坑出土土器



⑤ 第125号土坑出土土器



66-1

④ 第129号土坑出土土器



66-1

⑤ 第129号土坑出土土器



26-4

⑥ 第150号土坑出土土器

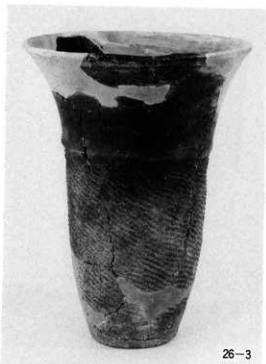


26-1

⑦ 第152号土坑出土土器



⑫ 第152号土坑出土土器



⑬ 第152号土坑出土土器



⑭ 第156号土坑出土土器



⑮ 第162号土坑出土土器



76-1

⑤ 第178号土坑出土土器



76-2

⑥ 第178号土坑出土土器



96-3

⑦ 表土中出土土器



79-1

⑧ 第183号土坑出土土器



96-4

⑨ 表土中出土土器



81-1



81-2



81-3



81-4



81-5



81-6



81-7



81-8



81-9

㊸ 土製円盤(1)



81-10



81-11



81-12



81-13



81-16



81-14



81-15

㊸ 土製円盤(2)



㊸ 線刻土版(1)



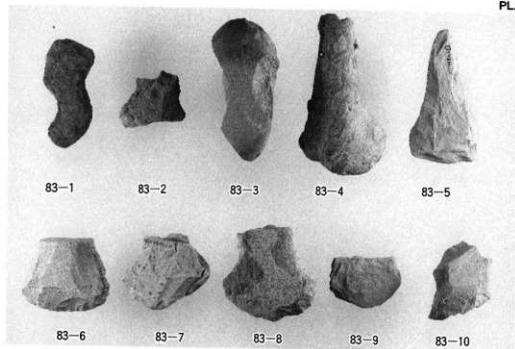
82-1



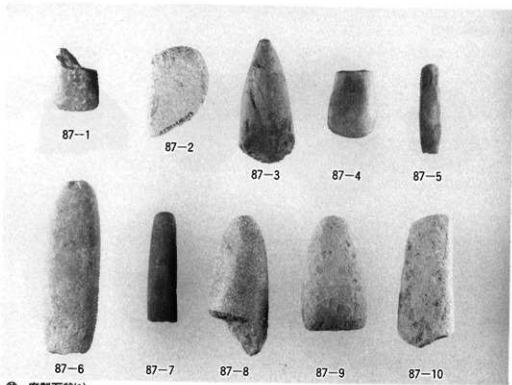
㊸ 線刻土版(2)



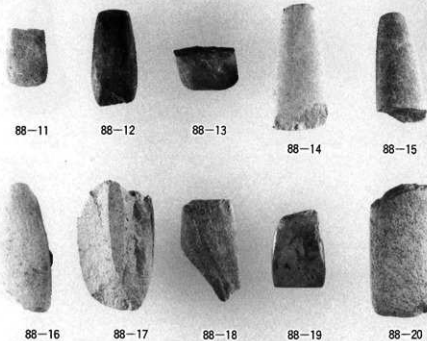
82-2



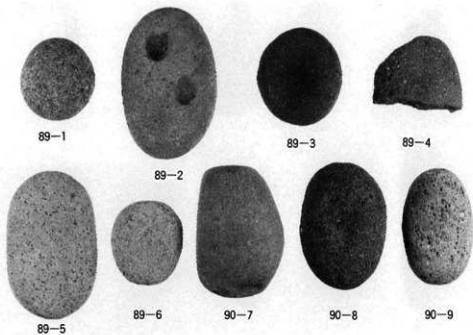
⑮ 打製石斧



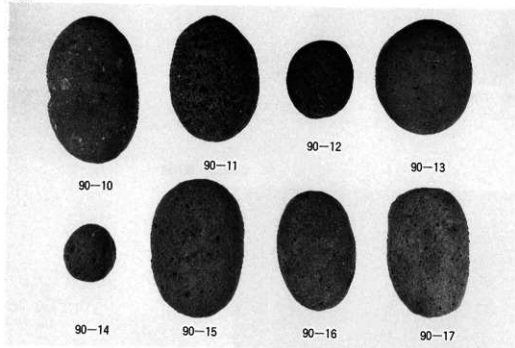
⑯ 磨製石斧(1)



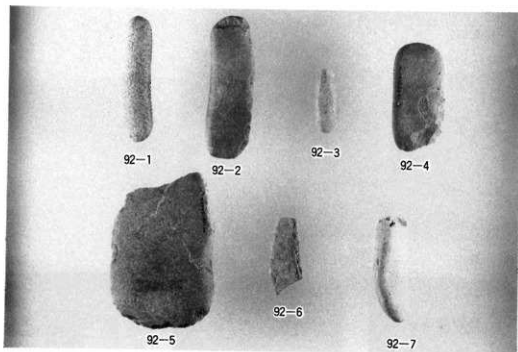
㉞ 磨製石斧(2)



㉞ 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石(1)

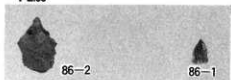


㊦ 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹石(2)

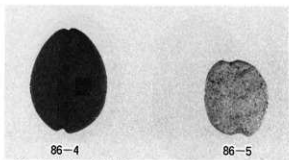


㊧ 特殊敲石

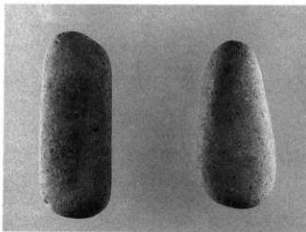
PL.35



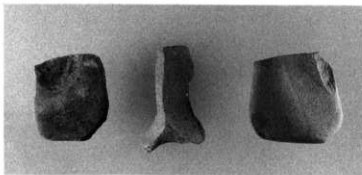
⑪ 石錘・石鏟



⑫ 切目石錘・礫石錘



⑬ 磨斧原石



⑭ 砥石



⑮ 作業風景(1)



⑯ 作業風景(2)



⑰ 指導員会議

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第27集

竹下遺跡Ⅱ

平成元年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会社会教育課

(宇都宮市旭町1丁目1番5号)

TEL (0286)32-2747

印刷 保松井ビ・テ・オ印刷

(宇都宮市平出町4287-2)

TEL (0286)62-2511
